

---

# 神話21世紀

風月英

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神話21世紀

### 【Nコード】

N7283C

### 【作者名】

風月英

### 【あらすじ】

死神『詩月』と、人間の『ハル』。「在るべき運命」と、「誤って進んだ現実」。誰もがより良い未来を求めているけれど、相容れない。

バトルあり。別れあり。

## 手紙（前書き）

掲載中の小説「彼女の言葉は真実か」「彼女の言葉の裏側に」  
「彼女の彼女の彼女の、」「果てない夜、主題は銀の月」続編で  
す。宜しければ先に前四編ご一読下さい。

## 手紙

君へ

永遠を望むべく

愚者の行進

歩みは遅い

先導者は創造主

行き着く先は廃の森

そここの道しるべ

「その灯を信じて良いものか」

なんと疑い深い

賢者は語る

「左に倣え」

もはや神の手に余る

ばらばらと散った愚者と賢者

高層ビル 空虚のタワー

ここは木々が死んだ街

アスファルト 化学汚染

そして灰の闇

傷付く理由が欲しい

貴方に届く声が欲しい

綺麗な右手

汚れた左手

意味がまるで無いとしても  
覚悟を準備を用意を祈りを

愛しい人を逃がす為に

## 一、始まりは

千秋は二年前に死んだ。私達「彼岸の使い」の一方的な過失によって。生涯は十年と一か月。実際の運命の八分の一だった。

彼岸の使い。それは人間界で悪魔や天使や死神などに分類される、いわゆる存在の曖昧な個体。アイデンティティーは人類の運命の管理。人類が絶えればこちらの存在価値も消失され兼ねないので、せいぜい滅ばない程度に気を配る。表裏一体の異世界を陰ながら視野に入れて来た我々のエゴは、知らず自らの目を濁らせた。

我々は優れている。

異なる世界を比べる事の愚かを口にする者はなく、私達はそんな怠慢から彼を死なせたに違いなかった。

萩原千秋は母と姉と彼の三人で暮らしていた。父は千秋が物心つく前に愛人の元へ走ったらしいが、その辺りの詳細は私の知るころでは無い。恐らくさほど重要ではないのだろう。片親だが母と姉は心有る人間だったため彼は真つ当に育った。素直で礼儀正しい、モラル重視の大人に受けの良い子供に。

そんな魅力的な子育てをした母親も、夫を人間界で一番ドロドロした愛憎の争いで失い、手塩にかけた息子に先立たれて心を壊したらしい。今はどこか知れない病院で療養中で、「前管理者」代打の私に分かっているのは姉の春の所在だけだった。

ぼんやりと人間界を思いながら、代打要請の旨が書かれた用紙を広げる。それはハガキ程度の大きさで、コピー紙程度の薄さの紙切れ。

### 萩原千秋及び春の運命管理者代替について

105地区G-008所属、詩月に引き継ぎを命じる。これより先「萩原春」と回帰の契約を執り行い、在るべき運命に帰す事を最

優先事項とすべし。以下履歴。

1985/03/12 萩原春/日本、静岡に生まれる。

88/09/24 萩原千秋/同上。

89/12/01 両親離婚。以後春、千秋共に父親と再会する事無し。

98/10/25 自宅で火災発生。本来春はここで死ぬべき運命。

前管理者が弟千秋と取り違え誤って生き残る。

その後の詳細は別紙確認の事。

目眩がした。通常を装ったさり気なさで渡された紙切れは、余りにも異常だった。

本来春はここで死ぬべき運命。

誤って生き残る。

在るべき運命に帰す事を。

ぐしゃっと紙切れが音を立てた。手に力が入ったらしい。自分の脳は一体何を拒絶しているのだろう。ピンとこないままに、紙のついでに心まで潰れたようだ。

「詩月」

心境に不釣り合いな穏やかな呼び声が聞こえて振り返る。こういう時決まって私の名前を呼ぶのはたった一人。同期の里雪。

「余計な事考えるな」

里雪は端折れる部分すべてを端折って核心に触れた。その気遣いが逆に私の神経を逆撫でする。

「余計な事って」

突き放す言葉を返す。大人げないとよぎるが抑圧出来る程の余裕がない。普段そうついう顔をしない里雪が一瞬困った表情を見せ口を開いたが、何も言わず、代わりに私が続けた。

「はつきり言えればいいじゃない。ハルに入れ込んだって私の立場が悪くなるだけだって」

里雪は無言を守っているが、視線は逸らさない。何を言っても私が噛み付くと悟ったらしく、僅かに目を細めただけだった。

「そもそも関係ないでしょう。口出ししないで」

彼が私の身を案じて声をかけたのは明白で、さすがにこの言い方はマズイと思う。それでも暴言は柔らかなクッションに吸収されたようで、里雪は不快そうな顔もせず、数秒の間の後静かに分かったと呟いた。



## 二、沈黙の森

「…これ。本当は渡したくないんだけど」

溜め息混じりに里雪がくしゃくしゃに丸められた紙を差し出した。  
ぎくりとする。

「なに」

聞くまでもないのだが動揺を気取られたくないののでつい無愛想に答える。

「その後の詳細は別紙確認の事。…お前が捨てたんだろ」

そうだ。萩原春のその後。シナリオのない人生の経過が淡々と記された用紙。読んでいるうちに頭に来て、丸めて捨てたのだった。  
里雪がそれを丁寧に広げていく。

「…知らない」

「詩月」

「知らないの」

そんなものはない。

私はハルを死なせるつもりなんてない。

「じゃあ、俺が持つてるから」

里雪が顔を伏せる。私に対する文句は言い尽くせないほどあるだろう。でも彼がそれを言う事はない。私が反論する事が分かっているから。その反論の中に禁句が混じると分かっているから。だから彼は何も言わない。

「こういうの、不用意に捨てるな」

何も言わない筈の彼がそう言っつて、少しだけ良心が痛んだ。

紙切れといえ、重要書類なのだ。彼岸の使い同士で見られても問題は無いが、捨てたと広まればそれ相応の処分が下る。

「別にいいじゃない。いつかばれるわ」

例え良心が痛んでも、私はこんな台詞しか出てこない。

「もう行くわ。ハルに会わなくちゃ」

くしゃくしゃに丸めて捨てたとは言え、内容はインプットされてしまっている。うんざりしながらも記憶は勝手に蘇る。ハルは現在母方の祖母と二人、見るからに不便そうな安アパートに住んでいる。二人と言っても会話は少なく、傍目には他人同士と見えなくもない。それは父の愛人関係、離婚、千秋の死、母 祖母にとっては娘だが、が心を病んだ事が影響している。祖母はその一連の話題を嫌っているらしく、ハルはそれを本能的に感じてしまっている。加え母は父と結婚する時駆け落ち同然だったと聞く。自分の存在そのものも、もしかしたら認められていないのかもしれない。その懸念がハルを律する。

ハルと回帰の契約をしるだなんて。

ハルではなく元の運命通り千秋が生きていたらこんな不幸はなかった。少なくとも「有るべき」だった元のシナリオには母親が心的障害で床に伏す記述はない。母親は千秋を溺愛していたのだ。ハルにも千秋にも意識して同じように接していたが、実際は千秋のウエイトが大きく、千秋が生きていたのなら生きる希望をここまで失いはしなかったのだろう。

無理だ。

用紙の空いたスペースに走り書きされた文字を思い出す。

ハルの祖母、2000・09・01死亡。

明後日。

ハル。あなたが悪いんじゃない。私はあなたの為に必死になるから、だから惑わされないで。

あなたが今どこにいるか知ってる。あなたが傷付いてるって知ってる。だから信じて。償わせて欲しい。回帰の契約の事、本当の運命の事、言わなければいけない。あなたに聞いてもらわなければいけない。だけど私達が正しいんじゃない。なにか一つだけが正しいなんて事は有り得ない。あなたが生きているのは、間違いなんかじゃない。

人間界。薄暗がりの森へ入る。都心の隅の小さな森。少し肌寒く、これが人間には心地よいのだろう。それともこの視界の悪い景色を恐れる者もいるのだろうか。ひっそりとした無音が美しく、ハルに会う前に一眠りしたい衝動に駆られる。勿論そうする気はないし、そもそも眠れる心境でもない。ただ少しでも遅らせた。出来るならこの小さな森で迷って永遠に会わずにすめばいい。

ハルはこの森の奥にいる。彼女はこの場所を気に入っている。ここは涼しいからだろうか。草木が好きなのだろうか。そうであって欲しくないのだが、誰もいないからなのだろうか。

森の奥は入り口よりもずっと密やかで、何者の侵入も無言の内に拒んでいるようだった。この深い藍色のセキュリティをかい潜れるハルは、やはり生と死の境界線を乗り越えているのかもしれない。不用意に踏み出した一步ががさつと音を立てた。闇の中に立つて姿勢良く星を見上げていたハルがびくりとこちらを向く。脅かすつもりはなかったのに。

「だれ…」

淡い茶色の目が私を見ている。それは不審者に向ける目だ。不審者、あながち間違いでもないけれど。

「こんにちは、ハル」

がさつ。ハルが反射的に後ろに下がる。

「…私の名前……」

私に対する不審の度合いが増す。

「あなたのこと、知っているわ」

「だれなの」

「死神って言うって信じてくれる？」

一歩ずつハルに近付く。踏み付けた土が柔らかく沈む。

「なに言ってるの……」

「千秋の事も知っているわ」

「…アキ……」

ハルの動揺が伝わってくる。

許して。

「彼、あなたの代わりに死んだの」

「……え

「本当はあなたが死ぬはずだった。手違いがあつたのよ」

「なに……」

「だから私は」

許して。

「あなたと回帰の契約を交わしに来たの」

### 三、彼岸の水際\* 回帰の契約

「良い子ね、詩月。ちゃんと仕事出来るじゃない」

彼岸の川に映る闇。ハルと詩月が見られている。

「里雪くん。そう思うでしょう」

「今俺が考えてるのは、お前をこの川に落とすかどうかだ」

独特の妖婉さで、女は視線を水面に落としたまま笑う。

「ふふ。それも一興。でも貴方には無理」

「代打に詩月を押したのはお前だろう。…詩月に一番向かない仕事だ」

「そうよ。でも上手くやってるじゃない。このまま何も起こらないかもね」

「かもな。それならそれでいいさ」

女の指が闇をすくった。ハルと詩月が波に揺れる。落ちる雫の音が微かに響いた。

「…下克上を覚悟しとけ」

女は変わらぬ笑みを里雪に向けた。

「出来るなら止めはしないわ」

「ああそれから」

里雪の背中を女が止める。

「私には桜っていう名前があるの。忘れないで」

里雪は桜を一瞥する。

暫しの沈黙を穏やかな声が繋いだ。

「お前も忘れるな。桜の天下は儚い」

\* \* \*

ハルの揺らいだ茶色の目が痛々しくてまともに見られない。私に後ろめたさがあるからだ。馬鹿な相談だって分かってる。だからい

っそ否定してくれていい。私の存在を。

「千秋が死んだあの火事の日。本当はあなたが千秋を庇って死ぬ筈だった。それが動けなかったでしょう。あなたは庇わなかった」

そう。ハルに千秋を庇う余裕はあった。「千秋を庇って死ぬ筈だった」より「あなたは庇わなかった」の台詞に、目の前の彼女は反応する。今まで何度も自問して来たのだろう。なぜ助けなかったのかと。

「時間を巻き戻す事は出来ないけど、あなたの命と交換で千秋の魂をここへ呼び戻す事は可能よ。肉体は私達が用意するし、過去は不自然じゃない程度に書き換えるから千秋が生きるのに問題はないわ。あなたが後悔しているのなら考える価値はあるでしょう」

考える価値。余りの白々しさに吐き気がする。ハルが助けなかったのではない、私達が千秋を選んだのだ。命を奪う事を目的として「アキを生き返らせたい」

ハルがきつぱりと言った。初めから決まっていたような答え。考える素振りはなかった。

「そうね。私もよ。でもあなたの死が必要だわ」

「構いません。ずっと償いたかった」  
違う。

「ハル。もう少し考えてからでもいいわ。また来るからその時に答えを……」

ハルの即答から逃げたくて踵を返す。

「いいえ」

強いハルの声が飛んだ。

「考えると答えられなくなります。今でいいです」  
反射的に振り返る。

「私を疑った方がいいわ、ハル。死神なんて嘘かもしれない。あなたが死んでも何も起こらないかもしれないでしょう」

目が合ってしまう。

「私は信じます！」

あつさりと言い放たれてしまった。

「信じます。だから」

縫れるなら何でもいい。そう聞こえる。

「だから私を」

殺して。アキを生き返らせて。その言葉がハルの口の中で拡散していく。

ああ。私は本当に死神なんだ。

「あなたが望むなら、…私には都合が良いわ」  
がさつ。

一步。ハルが後ずさった距離が、私との見えない壁を物語る。  
遠い。

「今この瞬間を持って回帰の契約成立としましょう」

私の正面、ハルの背後。月明かりの静寂を二つの柔らかな羽音が乱した。闇に塗られた葉と葉が触れ合う程度の囁かな音。ひとつは藍。ひとつは紅。控えめな白い明りを羽に宿して、それは現れる。

「私があなたに直接手を下す事はないわ。死神はもっと残酷なの」

「この鳥は…。私は誰に殺されるの」

「藍がホタル。紅がシユリ。これを手なずけるのが回帰の契約」

「どうして。私はいつ死ぬの」

「いつかしら。私にはわからないわ」

「…どうということ…」

「あなたがあなたに手を下すのよ。シユリとホタルを手中にしたら、あなたは痛みも何もなく自然と消滅する。葬儀はない。死も消滅も当事者に取っては同じだけど、残される側には違う。死は悼まれるけど消滅はそうじゃない。誰の心にも残らないからあなたを思う人はいない。回帰の契約はそれを受け入れるって事よ。」

「痛みはない…」

「そうよ」

痛みすらない。誰にも。





#### 四、心の内

でも。あなたには。

「ハル、ねえ…」

本当に良いの。そう聞きたい。

「シユリがあなたに懐かないってことは  
それはつまり。

ねえ。

「あなたに生きる力が」

あるって、ハル。

「あなたの魂が『生』を願っているって  
そういうこと。

だってシユリは、あなたの精神の一部なのだから。

ホタルは理性。シユリは本能。ハルの精神を反映している。

理性なんて、強い程辛いだけなのに。

人を優先して、自分が押し潰されて、どんな言い訳を重ねればあ  
なたは救われるって言うの。

本当は嫌だと。

そう言ってくれさえすれば。

死にたくなんてない。

千秋から目を逸らせて。

このまま、あなたを生かして千秋を黙殺する事を正義だと主張出  
来たなら。

「詩月さん。シュリを懐かせる方法を」

教えて下さい。

ハルあなたは違う。

放っておけばきつとシュリを手なずけて、私達の失態さえ赦して死を受け入れてしまふ。

理不尽だと声を荒げる事もなく、それが世界のシステムだと割り切つて。

「未練を、消しなさい」

それでもどうして私はこんなに汚い言葉を口に出来るのだろう。

「この世界の心残りを捨てなさい」

「捨てるって……」

「あなたが死ねない一番の理由を消化するのよ」

ハルが腑に落ちた、という顔をした。

ああ。そうか、そう続くように小さく声を漏らした。

彼女が現世に残したいもの。それは余りに明確で、

「それじゃあ、まだ私が死ぬのはずっと先ですね」

安堵と絶望を織りまぜて、微笑した。私はこんな微笑をこれまで、恐らくこの先も二度と見る事はない。ハルの瞳は、そこに存在する景色の断片の一つも映していなかった。全く別の色をその目に宿して、幻を追いかけて。

美しい。

そう思った。

虐殺だ、略奪だ、その一方でこうやって凜と微笑む人間がいる。

だから。

私達「彼岸」が優れている、なんて下らない。

こんな、危険なくらいに美しいものを「管理」の一言で括るなんて、そんな事。

ねえハル。やっぱり私はあなたを死なせるなんて出来そうもない。



## 五、キャンバス

たった二日前に「明後日」と呼んだ日が訪れて、ハルの祖母は息を引取った。

簡素な葬儀があっけなく終わって、涙ひとつ零さないハルが隣に立った私にこれも運命かと訪ねる。そうだと答えた私には、本当は何一つ確信がない。

「分からないままでした。結局、最期まで」

消え入りそうなハルの声を、私は救うことが出来ない。

「祖母が私をどう思っていたのか」

静かな部屋に、ぽつぽつとハルの声が流れる。それがどうしようもなく遠く聞こえて、思わず口を開いた。

「……知りたかった？」

不躰な質問にハルは微笑んで、そのまま愛おしそうに棺を見つめる。

「いいえ、いいんです。……」

もう、終わったんです」

自分に言い聞かせるような静かさに、苦しくなる。空気さえ重い。

「ハル、あなたは、」

ひとりじゃないのに。

説明できない感情を、伝える術が無い。やりきれないもどかしさが募る、今逆説的に感じる生を、あなたは分かっているに。

生きているのに、あなたは。確かにここににいるのに。

「私も急がないと」

何を急いでいるの。願わないことばかり。

ハルが筆を取る。部屋の壁に立てかけられたのは大きなキャンバス。それを覆う柔らかな布を引き剥がせば、現れるのはどこまでも淡い

淡い色彩。

「描き上げたいんです」

これが未練。残しては死にきれないもの。そうではないと気付いて欲しい。

没頭するハルに聴きたい。描き上げたらもういいのかと。

そんなにも暖かく柔らかな、それは一体何を描いているのかと。全てを捨て去ってしまえるような人間が、欲しくもない光をそんなに必死に描けるなんて茶番。あなたは生きる力を持っているのに、これに全てを注いで終わらせてしまおうとしている。

死にたくないと言って。

シユリもホタルもどうでもいいと言って。

ハル。これは、それだけで反故になる契約だったのに。

## 六、宣戦布告＊叶わぬ願い

黒髪の青年が立ち止まる。彼の正面に里雪。

「…なんだ、華夜」

『カヤ』と呼ばれた青年が不敵に笑う。面白そうに口を開く。

「お前は詩月につくだろ、当然」

「……、何の話だ」

「ん、死神のクーデター、ね。やってくれるぜ、あいつ」

くくつと笑った華夜が続ける。

「戦おうぜ里雪。俺は桜につく」

「ふざけるな」

「いつまで大人しくしてるつもりだ？もう始まってんだぜ、選べよ。戦うか、それとも、」

答を知らながら試すような視線。

「詩月を見殺しにするかだ」

「詩月を？」

ハル、ではなく。

しかし華夜は意味ありげな笑みを浮かべただけだった。

＊ ＊ ＊

ハルの肩にホタルがとまる。深い青の鳥。けれどそれは、幸福を運んでは来ない。

『ハル』

名を呼ぼうとして、声にならない。ずっとこんなことを繰り返している。筆を動かし続けるハルはホタルの存在にも気付いていないのかもしれない。何かに浸かれたようにキャンバスに向かう姿は、既に俗世界から離れてしまっている。

その場に居るのに耐えられなくなって踵を返す。彼岸の世界に帰っ

ても、助かる訳ではないけれど。

ハルから逃げるように、晴れ渡る空を飛ぶ赤い鳥。それは運命に抗うハル自身の想いなのに。

「逃げて、」

呟いた瞬間に涙が零れた。

振仰ぐ空が眩しい。

暖かな日差しと、その空に伸びてゆく緑。

見えるものは、平和そのもののような景色。

今世界が動いていること。それがすごく、虚しい。

## 七、見えない齒車

ハルから離れたシュリは、人恋しいように低空飛行する。そこに留まっていたいと、名残惜しそうに赤い羽根を閃かせて。だからその手に捕われたのは、あながち不注意でもなく、どこかで。

望んでいたのかもしれない。残酷なくらいに、この世界に引き繋いでくれる他者の手を。

「うお俺マジスゲエ！！飛んでる鳥捕まえたぜ！！」

粗野な高校生に囲まれて乱雑に掴まれた羽をばたつかせるシュリ。

「なにコイツマジウケる！っ！かそれインコ？」

けれど足掻くのは何から？

「変な色だなー、真っ赤」

「おーもしかして売れるんじゃない？羽抜いてみる？」

「うーわ残酷！」

「っ、ゲツマジで抜くの？」

「たりめーだろ」

そしてそれを冷ややかに見つめる小さな目。

「やめなよ。可哀想じゃん」

居合わせた幼い少年から余りにも当たり前前に漏れたその一言。高校生の動きが止まる。

「ギャーガキに注意されたぜ！！」

「お前のペットかあ？大事ならカゴに入れとけよ」

そこに辿り着いた、

「……ちよつと……」

今。私が守りたい唯一の。



「ちよつとちよつと、シュリッ！見つけたっ」

綺麗なまま消えてしまいそうな彼女。

幼い彼も高校生も突然割り込んだハルに場を崩されて、反応が遅れる。ハルの柔らかな髪が軽やかに揺れている。

「ああ、捕まえて下さったのね。どうもありがとうございます！何とお礼を申せばよいやら、」

「え…あ、イヤ…」

畳み掛けるハルにたじろぐ高校生。

「全くシュリッてば人なつくくて。構ってくれる人のところにすぐ行ってしまうんです」

噓。

「本当にもう手がかって！」

「あー俺ら急いでるんで……。…な？」

「お、おう…」

「じゃ俺ら行くんで…」

そそくさと背を向ける高校生たち。

「…あら。行ってしまったわ」

それは独り言なの？

「ねえ、その鳥」

そしてハルと。ハルに声をかける残された少年。

未来なんて、もしかしたらもうとつくの昔に決まっっていて、要するに「歯車が動き出した」なんて表現はただの喩えでしかない。

それとも歯車が存在するとして、それならば誰か、そこに引っかかっているネジを一本でも奪い去って、ああだけどそれに何の意味があった？

何もかも。 全てについて。

「遊ばれてたけど」

少年がはつきりと告げる。

「知ってる」

微笑むハル。

「君が助けてくれたね。ありがとう」

「なっ、なんで怒らなかつたんだよ！羽抜かれるとこだつたんだぞ  
！！」

真っ直ぐに反論する少年。

「軽率な行いを諫めるのは大事なことよ」

そう囁いたハルの、呼吸する程度の微かな間が優しい。

穏やかに、緩く撫でるような風が過ぎてゆく。

「でも時には、」

ハルと少年の視線が行き交う。

「笑わなくてはね」

薄情するならば、見えなかったのだ。描かれた未来の一片さえ、  
私には。

## 八、君はヒーローかエキストラ

見上げれば上空を飛行する紅の鳥。

高く自由を求めて、どこまで言っても満たされない。完璧な自由などありはしない。それでも遠く、遠くへ。ほんの１ミリでもいい。生きている分だけ、可能なだけ。

「シユリは、いつもどこかへ行っちゃうの」

「…ふうん」

「まるで懷いてないみたい。ホタルは賢いから目の届く範囲にいてくれるんだけど」

ハルと少年はなんとなく近くの河原に落ち着いて、ぼんやりとした空気の中で、取り留めなく座り込む。別に会話が溢れているだとか、まして一緒にいる理由は何もない。ただ淡々とした不思議な距離感を二人で共有している。少年は妙に物静かで、子供らしくない冷めた目で地面の一点だけを見つめていた。

ハルの言葉に、彼はその年嵩に不釣り合いな思案するような間を置いてそつと振り向く。

「…違うと思うけど」

ハルが反射的に合わせようとした視線を避けて、再び下げられた瞳。

「追いかけて来て欲しいから、逃げるんだよ」

言葉だけ、呟かれた音量に反してはつきりとしていた。

「え…っ、そうなのかな」

「うん」

「そうかな、そうだと嬉しいな」

笑ったハルを、彼は一瞬だけ眩しそうに見た。ハルはそれに気付かない。

「…！またいない！シユリ！！」

がばつと立ち上がったハルにつられて少年も空を仰ぐ。先程までそこにいた赤い鳥がいない。

「探さなきゃ！じゃあまたね、ヒーローくん」

去り際にそう言い残してハルが走っていく。遠くなる後ろ姿。追いかける視線。二人を隔てるような風。

「いいなあ、シュリ……」

少年が残された河原で座り込んだまま、誰にも届かないくらい小さく呟いた。

## 九、いないのはだれ

探してくれる人がいて。

「……ダセー……、あれ鳥じゃん」

はつと我に返った少年が呟く。何比べてんだよ、俺は。

「くそっ」

彼はそのまま地面に寝そべって、吐き出せない不満を持て余したまま空を見上げる。

「わかつてるよ、俺じゃ駄目だつて」

そうして、暫くだるそうに雲を眺めていた少年は一呼吸ついて、何か思い直すように起き上がった。

迷いの無い足取りで行き着いたのは彼の自宅。

「……ただいま」

「おかえりスバル！遅かったじゃない。心配したのよ」

間違いなく愛情のこもった声で少年の母親が少しだけ慌ただしく出迎える。けれど。

「うん。ちよつとね」

そっけない少年の返事に母親は不信感を抱かない。遠い目で母を見る、その少年の愛情に彼の母は気付かない。

言いたいことは、山ほどあるのに。

母にそつと微笑んで自分の部屋に向かった少年は、薄暗がりの部屋に電気も付けず、閉じたばかりの扉に背をつけて進もうとも戻ろうともしない。酷くゆつくりと深呼吸をして、彼は自分を宥める。

「……だから、いないんだつて」

静かに目を閉じれば、部屋の照明など何だつて構わない。

遮断出来ないことを遮断したいだなんて、どうすればいいかわからない。

『ナツメ』って呼んでよ。

少年の兄は死んだのに。

「スバルー、ちょっと来てー」

スバルという名の人間は、もうこの世にいないのに。

「スバル聞こえてるの？」

台所から呼び声。既にいない人の名を。それとも、

「ちよつとスバル、手伝つてくれない？」

存在しないのは、スバルか、ナツメか？

閉じた瞳を逸らすように開ける少年。

「わかったよ！」

母に応えた声が痛々しい。

## 十、そして絡みあう

ピイ。

少年がドアノブに手をかけたと同時に微かな高音が聞こえた。ピイ。

窓の外から。ノブから手を離し、少年は窓へ近付く。カーテンを開けるとそこに赤い鳥がいた。

「シュリ！なんで…」

少年が気付いたことにはしゃぐように、シュリが羽ばたく。

「スバル、早く来てくれない？」

「わかつてる！すぐ行く！」

反射的に母に応え、彼はシュリに向き直る。

「早く帰れよ、あのネーチャンが心配すんだろ」  
ピイ？

なんでも言わんばかりにシュリは主張する。

「いいな、早く帰れよ。俺もう行くから」

ピイ、ピイ。

シュリは確実に、「ナツメ」を選んで来た。否定しながら予感を捨てられない自分にナツメは苦笑する。

彼は「帰れよ」と、もう一度小さく残して部屋を後にした。

そして一通り夕食まで済ませて部屋に戻ったナツメは、窓ガラス越しに再び赤い塊を見つける。

「何でいんだよ、シュリ…」

「シュリは、自分の運命に抗ってるのかな。ねえ、ホタル」

見つからないシュリを一旦保留にして自宅に戻ったハルは相変わらず、浸かれたように筆を持っている。ただいつものように綺麗な色はのらない。描こうとしては、諦める。その繰り返し。欲しい色が、

見つからない。

「ごめんね……でもこれが、私が生きる為の、……」  
生きる為の。死ぬ為の。

「契約なの……」

ハルはそう言つて、筆を置いて一息ついた。

「……シユリを探しに行かなくてはね」

\* \* \*

「ハルは、律儀ね。賢人は言うじゃない。正直者ほど馬鹿を見るつて」

「……詩月、」

「私なら、忘れるわ。あんな理不尽な契約」

「おい、詩月」

月と星を眩ませる都会の灯り。私は高いビルの屋上から、散らかつたイルミネーションを見下ろす。

「聞こえてるわ。ちゃんと」

「後ろ向きでか」

だから当然、屋上の中程に立つた里雪には背を向けることになる。

「おい」

里雪の言いたいことなら、分かっている。充分過ぎるほど。それと同じくらい、里雪がそれを言わないことも知っている。私は、ずるい。

「聞くわよ、顔を見てね。でも他の皆と同じことを言つつもりなら、さっさと立ち去ってちょうだい」

振り返りながらそう告げる。

「邪魔だわ」

「お前に警告してる奴らはお前のことを心配して、」

「規則の前に崩れる情なら結構よ。私は、」

里雪。手を貸そうとしないで。



「薄っぺらい馴れ合いよりも自分の信念が大事なの」  
私は一人で戦える。

「待てよ！」

「分かってももらえないのは悲しいことだわ」

それだけ言い残して、里雪の返事は聞かなかった。

## 十一、誰もがそれぞれに

詩月の去った屋上に一人、佇む里雪の元に、ばさりと蝙蝠の羽を持つ獣が現れる。

「悪いな、リユース」

獣は里雪の声に反応してその肩に額を寄せる。絶対服従を誓うように。

「詩月を見張ってくれ。許容出来る範囲を越えたら俺に知らせる。他の誰にも気付かせなよ」

獣はピュイ、と一声上げ羽ばたいた。街の上空に小さくなってゆく使い魔を見送って、里雪は呟く。

「たく、手のかかる女」

\* \* \*

「詩月ちゃん、また里雪ちゃんと喧嘩したんでしょう」  
煩い。

「そんな時くらいね。あなたがここに来るのって」  
確かに私は滅多に書簡室には寄り付かない。ここにあるのは、下らない本ばかりだ。

「どうせ最後は里雪くんに助けてもらうでしょう？少しは穏やかにしたら？」

分かってる。この女は、私を試している。

「ハルなんて、どうでもいいじゃない。もう」

「桜、あなたの人選ミスだわ。私をハルの担当にしたのは」

試されなくたって私は変わらない。私は桜と駆け引きしてるんじゃない。ただ自分に従っているだけだ。

「里雪がいなくても私の力は変わらない。ハルの時間は私が責任を持って取り戻す。私がね」

相容れないなら、つまり、そういうことだ。

\* \* \*

導かれるまま夜の街を歩いて、結局辿り着いたのは。

「あの…さ、シユリを届けに来ただけだ」

シユリを探し歩いて疲れたのだろう、一度は家に帰って、ベッドに寄りかかるように瞳を閉じたその人。

寝てるん……だよな…、死んでるみたいだ…

ナツメはぼんやりと思う。

「シユリ、お前のご主人は綺麗だな」

ピィ。

「起こしちゃ悪いかな。でも鍵かけないなんて不用心じゃねえ？」

シユリに囁きかける声は柔らかで、暖かい。

「どうしょ…もう明るくなるし……いいかな」

ハルは心地よいくらいに優しい声を夢うつつに聞く。  
だれ…。

「ねえ…、朝だよ」

アキ。

「アキちゃん……」

無意識に抱きしめたのは、きつと後悔の中心に要る存在に重なったから。

「え、」

緩く囲まれた中でナツメが小さく声を上げた。

一気に現実を引きずり出される。

「ごめんなさい！ちよつと違う子かと……思っ

千秋かと。

ナツメを認めて瞳を逸らす。

「アキは、…弟なの。いろいろあって…もう会えないんだけど」  
「……」

静かにハルを見つめたナツメは、濃い色の目を僅かに揺らしたただけだった。

「シユリを届けに来てくれたのね」

「うん」

「ありがとう、お茶を入れるわ。ちょっと待ってて」

ハルはそう言い残して立ち上がる。

## 十二、真意はどい

彼岸の世界では。

「因果ねえ。やっぱり呼び合うのかしら、同じ境遇同士、ハルとナツメは」

「女」を主張するような口調は里雪の背後から。天井の高い彼岸の建築物の中では、落とした声でもよく通る。

「性格悪いな。気配を消して近付くな桜。今の発言も取り消せ」  
振り向きざま、里雪の冷えきった声に、桜がふつと微かな息をつく。白を基調とした背景に、その息はそれよりも白く色付くようだった。

「同期でも里雪くんより階級は上よ。言葉に気を付けたらどう」  
金髪が影を作って、里雪の紅茶色の瞳がぐつと濃くなる。

「俺は階級に興味はねえし、もうとつくの昔に出世コースからは外れた身なんだよ。」

無駄な牽制ご苦労なこつたな」

「無駄じゃないわ。階級と能力は比例してる。あなたのペットを私の追尾機が捉えた。詩月の動向は私の手中」

「手を出すな。詩月の好きにやらせろ」

そう言い捨てて歩き去る里雪。

白く広い建造物の中心。一人佇む桜。

「冗談、」

桜が呟く。

そこには桜を知る誰もが見慣れた、余裕をちらつかせるような笑顔はない。

「せいぜい楽しませてもらうわ」

深く深く、全てを沈めた深海の色。それが桜の瞳だ。その青は沈黙したまま波打つこともなく、里雪の後ろ姿を見据えていた。

「随分シケた面だな」

どこからか現れた華夜がくつと低く笑う。なあ？と言いたげに軽く口角を上げ、桜を挑発的に誘う。

「あなたは相変わらず楽しそうね」

無表情に返す桜。

「『最期の祭り』だぜ？暴れた奴が勝ちだ」

無表情の隙間に、僅か万華鏡のように影が落ちる。鮮烈な彩りに溢れたその瞬間に、名前がないことを華夜は好ましく思う。

「そうね……」

桜は小さく零して、それ以上の言葉は紡がなかった。

\* \* \*

そして人間界。

「そんな訳でね、ハル。私人間界に降りることにしたわ」

お茶を入れようとキッチンに立ったハルの真後ろに、桜がふわりと現れる。

「初めまして。私は桜。……詩月に会ってるなら察しがつくかしら？」

桜、余計なことを。

「……『彼岸の使い』……」

不安そうな表情を取り繕いもせずハルが答える。

「上出来。完結で明確な答」

スズ、行け。

リン、

鈴の音を残して桜の肩を抉ったのは猫に似た、けれどももっと獰猛

な彼岸の使い魔。宙に散る鮮血の華。

「！！きゃ……ちよっ……、」

青ざめたハルの口から漏れるのは動揺の声。

「っ、詩月の使い魔！」

スズを振り捨てた桜は肩の傷に怯みもしない。

「ハル！大丈夫！？」

「あ、はい、それよりこの方が……、詩月さんの使い魔って……」

桜、あんたには触らせない。

「油断したわ」

傷口を押さえ込んだ桜がさして痛みも感じさせない口調で言う。

桜が？

「なんて、温いわ。詩月」

回り込まれた背後から、首筋を鋭利な刃物が撫でて行く感触。続いて、そっちはダミーよと囁く桜の声。

「ダミーなんて、別に珍しくもないでしょう。ハルに気を取られるのも良いけど、冷静さを欠いてるわ」

たとえ冷静だって、今の私と桜には歴然とした差がある。彼岸の使いの目にはどう見ても明らかな差が。

「さて。堕ちて貰おうかしら」

切先が肌を突く感覚が強くなる。すと身を引いたと同時に桜の手に何かが投げ付けられた。

「え、……スリッパ……」

ハルが軌道線の始まりを見る。そして私と、桜も。

「何やってんだよ、あんたたち」

ナツメ。

「伏兵か……」

溜め息混じりに見つめる桜。

「……見えてるの？なんで……」

死に直面していない人間に、彼岸の使いは見えない。ハルに教えたことだ。

だから私は、返事が出来ない。



### 十三、深みに落ちて

「彼岸の使い」を視認出来る人間とは、通常彼岸の側から接触した者に限られる。ハルもその一人。

「彼岸の使い」は、相対した人間に死をもたらすために接触する。どれだけ回りくどいにしても、ハルもその点では決して例外ではない。だからこそ「彼岸の使い」は「死神」と言い変えることが出来る。実際私は「死神」という呼び名の方が明けて透けて分かりやすく、どれだけか気に入っている。

その論理で言つて、今ナツメが私たちを見ているのは異常といえる。普通に生きている普通の少年、ナツメには、『見えない』ことが正しいのだから。

「自分が、何を食べて生きているのかも知らないくせに」

桜が、ナツメに向かって敵意と取れるほどに冷たく言い放つ。私はほとんど無意識に空間を選び分けた。

「黙れ。彼の知ったことじゃない」

空間を選び分けるとは、何も無いように見える場所で、何かを見つけることだ。密度の濃い部分と薄い部分を緻密に合わせれば、どこにでも気流が生まれる。荒れる乱気流で、他者を負傷させることも可能だ。これが人間から見れば、風を操っているように見えるらしい。それに憧れることもあるだろう。だけどこれは、魔法だなんて夢のあるものじゃない。

「このまま魂ごと封じてやる」

桜の周辺をぐるりと覆って空気を歪ませ、そこだけ真空率を上げていく。ただしこちらにダメージがない訳じゃない。「自然な空間」を、自分を媒体にして「不自然」に変換するのだから当然私も消耗していく。それを確認して、風に縛られた桜の唇が綻んだ。

「やだ…息が上がってるわ、詩月」

受けている攻撃を歯牙にもかけない緩やかな声音。

「うるさい。あんたに何が分かる」

上がっていく息の中で雑に応える。私が苦しくて、他の誰が困る。

たとえ息が止まったとして、それが何だって言う？

「……何も」

私の放った風を宥めるように桜の腕がすつと伸びて、その手はそのまま真っ直ぐに私の首元を掴んだ。

「詩月の不幸を分かち合う義理は無い。彼岸の使いが一時の感情に流されるなんて、」

回らない酸素で風が止まる。

酸素が消えても風だけ残るならそれでもいいのに。

「論外。互角以上になっただらかってらっしゃい」

攻撃が消失して、完全に桜が自由になったと同時に氣道を圧迫していた腕は離れた。

「その時は相手になるわ、いくらでも」

咳き込んで息を整える私の耳に、暫く聞こえていなかった「音」が戻ってくる。

「ちよつと、大丈夫！？しつかりして、ねえ！！」

一刻を争うようなハルの声。

「詩月さん！この子目を開けない！！」

「ナツメ！！」

ハルの言葉に振り返り、ぐつたりと瞳を閉じた少年の名を思わず叫ぶ。

名を知っていたということは、彼の存在を把握していたということ。関わるかもしれないと予想はあった。けれど出来過ぎている。「桜は術を使わなかったのに……どうして……」

桜は私の攻撃を粉碎こそすれ、自ら仕掛ける真似はしなかった。

「そりゃ桜一人じゃねえってことだろ？」

聞き覚えのある低音が鼓膜に触れる。

「謎でもなんでもねえ。どうしてもクソもあるか」

振り向けば、腕を組んで壁に凭れ掛かった黒髪の青年。

「華夜……、どうして……」

彼は面倒臭そうに髪を掻きあげる。

「こっちサイドの方が面白そうだったからな。つか、どうしてどうしてうつせし」

「面白そう……そんな理由で？」

声にならない声で聞き返した私を見て、華夜が小さく笑みを浮かべる。

「ふざけないで」

どうして誰もかれも。

「そんな下らない理由でハルやナツメがどれだけ傷付くかあなた考えたことあるの！？私たちの存在がどれだけエゴ的なものかあなたは」

「かわいい」

掴み掛かった私に、華夜はそう言った。

「無神論者は辛いね。自分の存在を認められない」

語る内容がそれでなければ、華夜の笑みは見とれるくらいに綺麗なのに。

「俺たちは神だよ。人間の生死を管理するのは当然だろ」

「……違う……」

死神だとして。それで権利があるなんて。

「そんなの……幻想だ……。都合良く解釈するな……」

悔しくて落とした視界が霞む。それでも華夜は穏やかに言った。

「それが真実なんだ」

その、幻想こそが。

#### 十四、異常事態

例外が、ある。確率が低すぎて、言わなかったけれど。

彼岸の体制は、人間で言う会社組織や軍事組織に似ている。上層部の決定がその一階級下に伝わり、またそれがその下の階級に伝わる。それを繰り返して末端に情報が伝わる頃には、決定を覆すなど夢物語だ。

私たち末端はそれぞれにカバーする地域を振り分けられて、その中で実務をこなす。私が担うのは105地区と呼ばれる、日本の一片ちなみにハルの住んでいる場所はこの中には当たらない。ハルは、彼岸のリストでは103地区に該当する。今はハルの前管理者の『取り違い』の処分の結果として、地区の近い私がイレギュラーに管理を引き継ぐ形となっているのだ。私より近隣の102地区や104地区の管理者に代打要請がなかったのは、私の直属の上司である桜の思惑が大きい。

桜は同期のエリートで、野心家だった。頭の回転が速い彼女はあっさりと階級を上げ、私に指示を出す側に回った。私が異端な行動を取れば彼女の監督責任が問われる訳だから、桜にとって私は煙たい存在だろう。

だけどその憂さ晴らしにハルを押し付けたつもりでいるなら、それは間違いだ。桜は、私が彼岸の決定をいつも投げ出したい衝動に駆られながら実行していたことを知っている。私が彼岸の存在について懐疑的であることを知っている。だから通常の何倍も理不尽なハルとの契約が、取りかえせない痛手になるとも容易に想像がつくだろう。確かにその通りかもしれない。けれどその深手を私が甘んじて受けるとして、覚悟さえしてしまえば怖いものなど何もない。争いたくないなんてキレイゴトだ。私はもう、納得出来ないまま上層部の決定に従うつもりはない。

「ハル、死期が迫っていなくても彼岸の使いが見えることがあるの」  
それは例外中の例外。

「詩月さん……」

「ハルとチアキの取り違いがあつてから、彼岸の方ではあなたの管理者の入れ替わりがあつた。前者から、私にね。あなたの場合は引き継ぎがすぐに済んだから問題はなかった。でも、後任がすぐに決まらない時もある。まず管理者が入れ替わること事態が想定外だから」

ハルの表情が、訝しげに曇る。

「管理の担当がない空白の期間。この時は見えることもある」

つまりナツメも管理者が入れ替わる事態が起こっている。それは。

「詩月さん……この子も……私と同じ……」

「そうよ」

ナツメにもハルと同じように、取り違いがあつた。そういう事だ。

## 十五、遠離る人近しい人

「賢いハルの担当で羨ましいわ。詩月」

桜が囁くように言った。

ハルは、直接的な発言をしなくてもナツメに取り違いがあったと悟っている。彼女の伏せた目が数秒苦しげに閉じられ、ナツメを抱えた腕にぎゅっと守るような力がこもったのが分かった。

「この調子ならハルが消滅するのも時間の問題ね」  
煽るような桜の言葉。聞きたくもない。

「その前に桜が消えるんだ」

真っ直ぐに言い捨てて睨んでも、桜はゆったりと構えたまま。

「私は消えない。あなたの力じゃね」

「…面倒クセエ」

成り行きを傍観していた華夜がつまらなそうに呟いた。

「桜、俺はもう行く」

華夜はいつも協調性に欠けて、他者と慣れ合うなんてことはしなかった。飄々として自分本意で、誰にも属さないかわり、誰の敵でもなかった。

「ええ、私も行くわ」

その華夜が桜と共にいる。

「華夜！」

あなたは『敵』なの？

『面白そうだから』、あなたは私と反対の立場にいるっていつの？

これはそんなに簡単な話なの？

「じゃあね。105地区の詩月」

その台詞を置いて二人は消えた。二人の気配が無くなった瞬間、遠くから華やかな叫び声が聞こえた。その声に聞き覚えがあつて、咄嗟にハルに呼びかける。

「ハル！避け！」

「センパイ!!!」

途端、激突して来たのは彼岸105地区の後輩。

「……アレ？大丈夫ですか？」

強烈な一撃を風のように忘れ、私の上に乗り上げたままその人物がぽかんと言う。

「朝凧っっ!!」

アサナギ。長い金髪を二つに束ね、夏空のようなライトブルーの瞳を持つ彼女は、とても手のかかる後輩だ。

「まあいいつか。会いたかったです!!」

「はあそりゃどうも……」

ぎゅうぎゅうと抱きついてくる朝凧には悪意の欠片も無い。

「そうそう、はい、なぜかここに来る途中でナツメくんの魂拾ってあやうくみーちゃんが食べちゃうところでしたよ」

そう捲し立てながら素手で掴んだナツメの魂を目の前に突き出した。

「みーちゃん？ああ、あの何の役にも立たない使い魔……」

記憶を頼りに確認する。

「役には立たないけど癒してくれますよ」

「……癒されるのはあんただけ」

『みーちゃん』は生々しい大蛇だ。漢字にするなら『巳ーちゃん』。

……センスが無さ過ぎる。

「それにしても……」

偶然とはいえナツメの魂の無事が確保できたのは奇跡だ。

「大手柄。朝凧最高」

「……………」

すっかり褒めた後の間に嫌な予感が過った。

「っ、やっぱりセンパイ大好きです!!!!」

がばーっ!!!という効果音付きで再び激突され予感的中したこと

を知る。こと朝風の奇行に關して的確な表現があるとすれば、抱きつくなんて可愛らしいのもじゃない。文字通りの『激突』だ。

「いちいち全身で表現しないでいいから！」

押しのけながらハルに向き直った。

「ハル、紹介するわ。朝風。見ての通りかなり暑苦しいけど別に害はないから」

「朝風です。初めましてハルさん」

辛辣な紹介を意に介する素振りもなく朝風はハルに笑いかける。

「ハルさん、心配しなくてもセンパイがいれば万事上手くいえますから！バツチリです！私もいます！」

「…朝風、余計なこと言うんじゃない。保証出来ない」

不確かな気休めで紛らわそうとするなら、それは無駄なことだ。

「保証は私します。大丈夫です」

それでも朝風は雑誌モデルのような完璧な笑顔で笑って、そう言った。



## 十六、正義と呼べない

「じゃあ、……安心ですね」

暫くきよんとしていたハルが、微笑んで応える。

「はい、お任せを」

「朝凧！無責任にも程がある！ハルも素直に受け答えなくていいのよ、もつと疑って」

焦って畳み掛ける先で、ハルは柔らかに笑っていた。…私を見て。

「詩月さんが笑ったの、初めて見ました」

ハルの不意打ちのような予想外のコメントに固まる。

笑った？私が…？

ああ朝凧を褒めた時か。

だけどそれでどうして、ハルがそんなに安心したように笑うのかは分からない。

「…とにかく…、とりあえずナツメの魂を戻さなきゃ…」

ナツメの胸に手を当てる。けれど戻るはずの魂は宙に浮いたまま。

「朝凧、魂を保管する箱、持ってる？」

「え、あ…ハイ」

「ナツメの魂を保管する。貸して」

「体には戻さないんですか？」

戻したいけど。

「出来ない。ナツメ自身が嫌がってる」

戻りたくない。そう主張している。戻ってもナツメでいられない世界。

「生きることを拒絶してる…」

ハルが目を伏せた。何を思ったのか問いただすつもりはない。

「この状態の魂を戻すのは私じゃ無理だわ。『ランカ』に会いに行

く」

「センパイ、私も行きます」

「駄目だ、朝凧は関わるな」

思いのほか強い口調になった。

傷付けたくない。

命を奪うことを糧とする狂った彼岸の世界で一人戦おうと決めてから今まで、笑った記憶なんかない。そんな余裕はなかった。

「行きます」

「来なくていい」

人間に肩入れし過ぎた私は、危ない。

「いいえ行きます。絶対です」

勝算のない戦争を仕掛けようとしている。自分が生まれた慈しむべき世界で。

「朝凧、私は彼岸全部を敵に回してる」

「知ってます」

私に付いて来るということは、確実に死に晒される。大切だからこそ、離れたいのに。

「私の側に付いたら、あんたも反逆者と見なされるわ……」

一人きりで堕ちていきたい。

まだ生きている心の奥で、悲しい願いが燦った。



## 十七、既に始まっている

時の止まったような彼岸の世界で、白い背景に馴染む色素の薄い金の髪と、紅茶色の目を持った彼。彼の正面に艶やかに佇む、挑発めいた笑みをたたえた黒髪の彼。ここに存在するのは対立する色彩と、それを引き立てる不穏な空気。

「よお」

黒髪の青年が親しげな軽い調子で声をかける。

「華夜、お前……」

「ん。なんだよ、裏切った、とか言っただよ？」

里雪の纏う空気が一瞬で敵意へと変わった。直後に天井から落ちたのは、白い美しい欠片。

そして、爆音と、白煙が舞い上がる。それは作り物のようにきらびやかな光景。

「うん……腕は落ちてないね。心配が一つ減った」

白煙の中心で身を屈めた華夜が満足気に呟いた。煙が晴れて全てが晒されれば、直撃にも関わらず服すら乱れていないことが分かる。

「ふざけんな」

詩月の前で揺れた暖かそうな紅茶の目が、冷酷な色を持つ。短く吐き捨てられた言葉が真っ直ぐに華夜に届いた。

「心外だな。俺は真剣だよ」

挑発。

爆音。

ばらばらと天井が落ちる。

彼岸が壊れていつっても、構わない。

里雪の攻撃を真正面から受けて面白そうに目を細めた華夜は、身じろぎ一つしない。

「シールドに頼り過ぎると後悔するぞ」

「俺が防御に徹するとしても思ってたのかよ」

ずっと華夜が構えた刹那、どこからか《ストップ》と声が聞こえた。瞬間、舞っていた煙が消え去る。残ったのは穴の空いた床と折れた柱、砕けた天井、その残骸。

「……出た。無力化女。面白いとこだったのに」

声の主を見とがめた華夜がぼやく。

「喧嘩なら他でして下さい」

『無力化女』と呼ばれた彼女が事務的にたしなめる。

オトハ  
「音波……」

音波。里雪が彼女の名を呼ぶと彼女はそちらに視線を移し、知的な眼鏡の奥で瞳を細めた。

「もついいや、冷めた。またな里雪」

溜め息混じりに華夜が言い残し、あまりにあっさりと背を向ける。

「おい待てよ！」

「里雪さん!!」

音波が華夜を追おうとした里雪を引き止める。

「らしくないですよ。攻撃をしかけるなんて……なぜです」

そして問いかけて、思い当たる。

「……また詩月絡みですか」

「うるせえ」

里雪がバツが悪そうに零した。

「ああ。そうなんですか……」

やれやれと首を振る音波は呆れながらも続ける。

「それもいいですけど、もう少し考えて行動して下さいよ。ただでさえ素行不良で目立ってるんですから。一体いくつ揉み消したと思ってるんです。あなたと詩月の勝手な行動を」

「……悪い」

「……こつちも本職があるんですから、私だっていつもいつも書類を書き換えられる訳じゃないんですよ？」

音波が豆粒ほどに小さな欠片を放る。それが損傷した床に接したと

同時に元通りに復元された。同じように、柱も。最期に特に大げさな素振りも無く弾いたそれが高い天井に当たって、何もかもが元通り。

「下手をしたらランカの二の舞いに……」

里雪の顔を見ず音波は言う。

「それは私も本意じゃないのでしっかりと下さい」

「……………了解」

充分過ぎるほど間を置いて、里雪が居心地悪そうに答えた。

## 十八、過去の言葉

そこは都会の片隅でうつかり荒れ果ててしまったビルで、密やかに屋上に立てば地上の喧騒などどうでもいいように思える。

廃墟が心地良いなんて、ロクなやつじゃない。

ビルの屋上からぼんやりと地上を見下ろす彼の中で、ふいにそんな感想が持ち上がって、銜えた煙草の隙間から苦笑する息が漏れた。不良めいた人工的な明るすぎるほどの茶髪が、都会特有の乾いた風に乗ってさらさらと揺れる。

彼はまだ長いままの煙草を唇から抜き取って、肺に入った煙を吐き出した。

「…彼岸も地上もたいして変わんねえ…」

やる気のない呟きも都会の上空に溶けていく。それは誰に聴かせるでもない、けれど言わずにいれない言葉。

「『たいして変わんない』って？言ってくれるね、不良少年」

聴かせる予定の無かった言葉に反応が返る。『不良少年』は、聞き覚えのある声に自然と口角が上がって振り向きもせず答えた。

「少年に見えるかよ。そりゃラッキーだな」

この世界に換算したら、何年生きてるんだか知れたもんじゃない。

少し沈黙した背後の声が、冷めたトーンで言い放った。

「ただのガキだろ。世界が変わるのを待ってる。テーマは何にもしねーで」

こいつは。

今度こそ振り向いて声の主を視界に収める。そこにいるのはアイド

ルと言って通りそうな整った容姿の青年。柔らかな栗色の長めの髪と、瞳を縁取る長い睫毛が中性的なパーツを引き立てて、『綺麗』という言葉が完璧に嵌る顔立ちをしていた。

「…お前、黙ってりや美人なのに。薔薇には棘があるって自然の摂理な」

「薔薇だつてテメーの為に咲いてんじゃねえ。勘違いすんな」

「………すいません」

下手をすれば同性まで手玉に取れそうな青年だが、本人はその容姿もどこ吹く風で微かな愛想すら浮かべない。

その原因が彼岸か……。

やりきれない。

「人間に…いるんだな、お前みたいのが。正直ビビった」  
それはいまだに嘘であればと考えてしまうようなこと。

「この世の何も一方通行じゃ成立しねえ。…自然の摂理だろ」

最期に視線を外した仕草が、綺麗だからこそ余計に痛々しく映る。

「フユ、」

「乱火、<sup>ランカ</sup>テメーに客が来てる。今朝から目障りなんだ。何とかしろよ」

呼ばれた名前を遮って、『フユ』は吐き捨てる。

「…客？」

乱火がフユの更に背後を伺った。

フユが客と呼んだのは、私。

「ん？あー…珍しい客だな…詩月」

乱火が私を見て言った。

「ごめん。目立たないように来たつもりだったんだけど」

「そつちじゃねえ、後ろ」

うんざりしたようにフユが吐き出す。

後ろ……閉めた筈のドアが10センチほど開いて、身を隠しながら



も隠れきっていないのは、二つ結びの長い金髪の片側。

朝風。

「……………目立たないように来たつもりだったんですけど……………」

……………」

そろそろ顔を出した朝風は、黒いキャミソールに十字架のチョーカー、マイクロミニの黒いスカートの上に白い二重ベルトを重ねて、ガーターで吊った網タイツをすらりと覗かせている。

「うん間違ってるわね。テイストとか」

ただでさえ日本には『ブロンド・ブルーアイズ』は居ないっていうのに。

「うわーんセンパイすいません何かよくわかんないんですけどここ間違ってるみたいでごめんなさいわーんでもセンパイ大好きですわーん」

バタバタと更に騒々しい…朝風。

「フユ……………目障りって……………」

念のために乱火が伺う。

「あれ。すっげー目障り」

もはや『あれ』呼ばわり。

「……………返す言葉もございません」

乱火は『彼岸の使い』で、フユは『人間』で。意味が分からない。

「乱火、今日はもう帰ってくんな。つか一生帰ってくんな。お前たちとは関わりたくねえ」

そう言って身を翻したフユは、そこに本当に存在しているのか疑ってしまうくらいに洗練されていた。去り際に『目障り』だと言いきった朝風に向かって自分の着ていたパーカーを投げる。

「着とけ。そんなカツコしてる季節じゃねえ」

行動と裏腹にドアを閉める音だけが酷く大きい。もう閉まっているドアに向かって朝風がキラキラした目を向けた。

「はい！！彼岸の使いは人間界の温度って感じないんですけど御借りします！！ありがとうございます素敵な方！！」

「朝風、可能性のない恋は止めときなさい」

暴走する朝風に出来る限りの助言をして、乱火に向き直る。

「乱火、一緒に住んでるの？人間と？」

今日はもう帰ってくん。そんな口振りだった。

「うん？俺こつちの身分証明書とか無いからな。世話になってるよ」  
普通どこの誰とも知れない人間を家に入れるだろうか。 違う、  
「彼岸」を知っているような素振りだった。

「まあ、今となつちや彼岸の証明書も無いけどな。で、用件は何」  
聞きたいことばかり増える。

「その彼岸のことで手を貸して欲しいの」

「無理。他には」

即答される。

「他にはない。一度きりでいいの、お願い」

乱火が慣れた手付きで煙草を取り出し火を付ける。その一連の動作に焦躁感を覚えた。

「お願いされてもなあ。貸せる手なら貸してやりたいけど、あいにく俺は無力でね」

「私の知ってる中であなた以上に力のある人はいないわ」

吐き出された煙さえ様になる。

「いつの話してんだよ」

彼岸に煙草は存在しない。けれどどこか懐かしい気がした。景色が全て色褪せてしまったように。

「それは、過去だろ」

遠い。

「詩月、俺は必死になるのに嫌気がさしたんだ。

知ってるかよ？人間界では、それをルーザーって呼ぶんだぜ」

ああ、もう。そんな言葉は聞きたくない。



## 十九、愛のかたち

「ルーザーって、もう戦えない人が使う言葉でしょ。あなたのは挫折じゃなくて妥協でしょう、心が死んでないならまだ闘える」

私の知っている中で彼岸の世界に最初に楯突いたのが乱火だ。

彼は当たり前な顔をして「くだらない」と言い、当たり前な顔をして上層部の決定を無視した。保身などには揺らがない、自分の羅針盤を持った強い男だった。

「相変わらずグッサリくる言い方だな」

言葉と同時に白い煙が吐き出される。そのまま紡がれた言葉は、  
「… 何してほしいわけ」

ルーザーじゃない。彼は死んでない。

「体に戻るのを拒絶してる魂を戻したい。その為の力を借りたい」

「あー、それ俺の一存じゃ無理」

苦い顔で答えが返ってくる。

「彼岸の力は封じかけられてっから。他当たれよ。それが…」  
言い淀む先に選択肢があることを臭わせる。

「それか？」

地面に落とされた煙草。それを揉み消す足下。ジーンズに、スニーカー。褪せた色彩が眩しい。

「あいつ関わりたくないっつってたけど…」

「あいつって、さっきの彼？」

「ああ。フユがOK出したら、多分何とかなるぜ？」  
フユ。

「フユ… さっきの方…。でしたらそれは私が責任を持って!!」  
朝風が今にもフユを追いかけて行きそうな勢いで反応する。

「あんたは何もしなくていいから」

乱火に間借を許しているとは言え、フユは彼岸に好意的ではなさそ

うだった。

「彼、何者なの？」

地面に落ちた煙草の灰が、風でちらちらと散る。乱火の視線がそれを追っていた。

「あいつは…、『力』を持ってる。ただの人間だけど生まれた時から『彼岸の使い』が、つまり俺たちのことが見えたらしい」

「見えた…？それって……」

「ああ」

そんな可能性は、考えたくもない。

「俺たちが人間を狩ってんのも、あいつには見えてた」

フユには見えていた。そんな優しい話じゃない。『フユにだけ』、見えていた。

「…うそ……そんなことって」

「彼岸の綻びが人間界に影響を出してんだぜ。どう考えても異常だ」  
そう言った後の乱火の深い溜め息は、彼岸で見たことのない種類のものだった。

「参戦したくねーけど、フユを絶望させとくのはちょっと気分ワリイ」

ひとりきりで誰にも理解されない光景を見てきた。フユの触れたら切れそうな美しさには、いみじくも彼岸の存在が一役かっているということだ。

「詩月、今彼岸はどうなってる？お前は本当は何をしようとしてる？」

「『本当は』？」

意図せずに口角が上がった。乱火の直接的な核心への触れ方が心地良い。

「やることは決まってる」

躊躇う期間はとうに過ぎた。

こんな風にしか償えない。ハルにもチアキにもナツメにも、フユにも。

「戦争よ」

彼岸同士で争い合うこと。私は主義主張の為に。それ以外は彼岸そのものの存在価値を守る為に。

最大のエゴでハルたちを救えたとして、全く同一のエゴで里雪や朝凧を傷付ける。

大切なのに、争うことによって。

自分の中で引きちぎられていく気持ちを繋ぎ止める術を、私は持たない。

## 二十、矛盾

「せ、戦争……」

朝風が息を呑んだ。

さすがに、言えないでしょう。私についてくるなんて。

「スペクタクルロマン！！燃えます！！！」

大声でそう言い放った後輩を、初めて心の底から馬鹿だと思った。

勝ち目がないって知ってるくせに。

その戦争は、どれだけ息巻いても、どれだけ時間を稼いでも、所詮は鎮圧される規模の抵抗に過ぎない。

倒れることを前提にして、それでも留まることが出来ないのは、私が本能より精神に殉じたいと考えるからだ。朝風は恐らくそういう性質ではないし、戦闘マニアでもない。だとしたら参戦するのは命の無駄遣い。

言って聞かないなら、どこか安全なところで置き去りにするしかない。

「取りあえず彼岸で何が起こってんのか、分かる範囲で説明してくんねえ？」

乱火が言った。順序立てて把握しようとするのは、自分の未来に自分で責任を取るためだ。この男は私と似ている。誰かと慣れ合う振りをしたところで、結局最後には自らの意志を優先する。私の味方につくことではなく、彼岸の世界で戦うことに意味を見出せる。そういう乱火だから、手を借りたかった。

「これ」

乱火に手渡したのは、ハルの管理者代打要請の紙切れ。

萩原千秋及び春の運命管理者代替について

105地区G-008所属、詩月に引き継ぎを命じる。これより先「萩原春」と回帰の契約を執り行い、在るべき運命に帰す事を最優先事項とすべし。以下履歴。

1985、03、12 萩原春／日本、静岡に生まれる。

88、09、24 萩原千秋／同上。

89、12、01 両親離婚。以後春、千秋共に父親と再会する事無し。

98、10、25 自宅で火災発生。本来春はここで死ぬべき運命。

前管理者が弟千秋と取り違い誤って生き残る。その後の詳細は別紙確認の事。

「取り違い？」

乱火がその単語を低く読む。

「ええ。ハルを殺して弟を生き返らせると命じられた。納得出来ないからハルを庇った」

「庇うつたつて、この任を無効には、」

そこまで言いかけて、彼は信じられないとも言つ風に私を見つめた。

「シュリと、ホタルか？」

「そうよ」

実はシュリとホタルを使った契約方法は、主流なものではない。

「バカかお前は、アレは管理者の力を食って実体化すんだぞ！行動が人間の精神を主体にしても、個体としてはお前の力を糧にしてる。それで戦争なんてロクに戦えもしねーだろーが！」

そんなこと知っている。今の私は弱い。だけど何だつて打開策はある。

「私の力は彼岸の水で補えるわ」



一瞬、乱火と朝凧が言葉を失った。

「…い…っ、イヤです!!」  
青ざめた朝凧が叫ぶ。

その水は、飲むと彼岸の力を一時的に回復させる。

「あの彼岸の水を飲むなんてセンパイが良くても私がイヤです!!」  
副作用は、回復の効果が切れると同時に生命体としての活動が停止すること。彼岸ではそれが『百年の眠りにつく』と表現されることしばしばだが、時の概念がない彼岸で『百年』と言う期限を一体どの程度当てにして良いのか。

「センパイ!!」

「桜を完全に敵に回してるの。もう退けないのよ」  
喚いたって、なんだって。勿論退くつもりもない。

「桜か。お前の直属の上司だろ？無茶すんなよ」

「無茶する覚悟がなかったら、シュリとホタルなんて引つ張り出してこないわよ。大体……」

「センパイ？」

「どうした？詩月」

何だこの違和感。

「二人とも、伏せ……」

「下がれお前ら!!」

背後からそんな台詞が聞こえた。

目の前のコンクリートに急激な速さで何かが落ちて、ドガツと床が

碎ける音がした。同じタイミングで視界を粉塵に塞がれる。

「フユ……」

乱火が呟いた。『下がれ』と呼びかけたあの声は、確かにフユに似ていた。

似ていたけど、どうして。

粉塵が晴れてやっと、確かにフユが目の前に立っているのが見える。そんな必要などどこにもないのに、まるで私たちを庇うように。

「ぼけっとしてんな。気付けよ狙われてんの」

冷たくこちらを一瞥した彼が告げる。そして。

「クソ、…お前ら面倒くさい」

顔を背けて零された言葉は、独り言のようだった。

## 二十一、何が出来る

「ラッキイ。乱火とフユが同時に釣れちった」

声に吊られて顔を上げれば、屋上のフェンスにピンクの髪をしたドールフェイスが腰掛けている。私と面識はないが、今の攻撃から見ても間違いなく彼岸の使いの一人だろう。しかも厄介にも、人間界での戦いを厭わないタイプらしい。

「なんだ！俺にも用があるのか。乱火の客だと思ってた」

特に動じる様子も無くフユが応える。感情の伺えない声音だった。

「んー。どっちかってとキミへの用事がメインかなっ」

ドールフェイスが無邪気に笑う。

「かつ…」

かわいいです！！！！

朝風が思ったままを叫んだ横で、乱火が白けた目を向けた。

「あれ、オトコ」

「！！！！」

「おい詩月！朝風がショックで倒れた！！」

「うそ、なんで気絶すんのよ！？」

騒いでいるこちらを後目に、ドールフェイスがフユに言う。

「話進めていいっかなー？」

「ああ、気にするな」

「じゃ、お言葉に甘えて。フユ、キミを、」

「抹殺しに来た」

「な…、」

驚いた乱火が小さく声をあげる。対照的にフユは冷静で、試すような笑みを浮かべた。

「ふうん。案外暇なんだな、オマエ」

フユ、挑発……、してるの？

「そうでもないよ、他にも仕事はある」

だって、抹殺、って。

「待って、フユは…『人間』でしょ、関係ない…」

つい口を挟んだ。

たとえ彼岸が見えたとしても。取り違いがあつた訳でも、寿命が近い訳でもない。なのに、どうして。

「関係あるよ」

言葉と同時にフユ目掛けて何か投げられた。ドガツとコンクリートが決れて、直撃したら確実にフユの命を奪えるだけの威力があることを物語る。

けれど、それよりも驚いたのは、フユの軽い身のこなし。

ふわりと風のようにかわし、その着地に音一つ立てない。

「派手な奴。…品のねえ攻撃」

それはわざわざ自分を狙えと言っているような台詞。

「なんとでも言つてなよ」

破壊音と飛び散るコンクリートの欠片が、平和を遮断する。

カシャンとフェンスに飛び乗ったフユが真っ直ぐに相手の目を見て言つた。

「邪魔だな。焼いてやろうか」

フユが翳した手の平に、青い炎が現れる。

それ、は。

「乱火の術…、どうして」

あれは確かに、彼岸の火で、昔乱火がよく手の上で転がしていた。何か持て余すように。丁度さっきの、煙草のように。

「人間の三文呪術なんてタカが知れてるよ。バカじゃん、そんなに何とかなると思ってんの？」

挑発に挑発で返されて、フユが青い炎を翳したまま綺麗に微笑んだ。

「オマエ化学反応って知らねえ？小学校で習う」

彼がそう言って、炎を持たないもう一方の手で羽織ったシャツの胸ポケットから小さなボトルを取り出す。コルクの栓を銜えて外す様はまるで、計算しつくされたよう絵のように艶やかで、現実味が無い。

「フユさん！！」

むくりと起きた朝風が立ち上がる。

「フユさんがピンチです！！」

朝風の言葉にはっとする。「助けよう」と思考が固まるより速く、フユに目を奪われていたと気付く。

「フユ、止める！！」

乱火が叫んだ。

その声も無視してフユが穏やかに続ける。

「火気に反応する物質なら腐るほどある。威力は絶大」

「フユさん！！！！」

朝風がフユの前に飛び出したのは、フユの持ったボトルの中身と、彼岸の炎が混じり合った瞬間だった。

途端、火種が倍以上に燃え上がって、ドールフェイスと朝風と、一瞬朝風に気を取られたフユもろともを包み込む。

「フユ！！」

「朝風！！」

爆発のように拡大した炎はすぐに消え、紫煙が後に残る。彼岸の炎が人間界で継続的に存在することは出来ないらしい。晴れていく煙

の中心で、フユが朝風を庇うように抱え込んでいた。

「……邪魔すんなバカ女。アイツは俺に用があるんだ」

ふらりと立ち上がって吐き捨てたフユが正面を睨む。

対峙するドルフェイスは今の爆破でダメージは受けても、戦う気は失っていないようだった。

彼岸の方がフユに用があったにしろ、それは彼岸の都合であって、フユが真正面から受け止める必要はどこにも無い。

まして攻撃だとか抹殺だとか、どうしてフユは、否定しない？  
声を荒げて「ふざけるな」の一言でもいい。

どうして分かったような顔をして、甘んじて受け入れる、なんて。

痛い。

「乱火、…今、朝風を庇って彼自分のガード遅れなかった？」  
そう見えた。

フユ、あなたは今まで散々人間の命を奪ってきた彼岸を見ていて、それでも朝風を庇って傷付くのか。

「ああ…」

悔しそうに答えた乱火も、多分私と同じことを考えている。

いつだって、ただただ傷付くことで他者を救っていく人間がいる。  
それは苦しいくらいに綺麗だと、私は思う。

だけでも少なくとも、それが私が関われる場所にあるなら、

傷を埋めたい。



## 二十二、命ある言葉

フユが音も無く一步を踏み出し、ドールフェイスが後ずさる隙も与えず、その首を掴んで乗り上げるように押し倒した。

「っ!」

私の立ち位置からは、フユの表情は栗色の髪に隠されて見えない。唇だけ小さく動くのが、辛うじて分かった。

「言え。生きたいのか、死にたいのか」

殺伐とした台詞が低音で静かに紡がれる。下敷きになった相手の首にかけたフユの手に、ゆっくりと力が入っていく。それなのになぜか、微かな殺気も感じない。まるで答を促すような、待っているような柔らかな沈黙だけが辺りを埋める。

「……く、…死にたく……ない…」

弱々しく零れた声に、ぴくっとフユの手が緩む。揺れた髪の間から、ドールフェイスを見つめる瞳が露になる。

『分かってる』

そういう目をしていた。漣一つ立たない、諦めとも優しさとも取れない瞳。

「それでも俺を抹殺するのは、オマエの正義なのか」

感情を殺しているのか、何も感じないのか、事実確認のためだけの質問のようだった。抹殺されることで、目の前の相手の正義が貫かれる。そんな理不尽な回答を、フユはあの不思議な目をして待っている。



「……君は、…危険………だ、から」

フユはそう聞いた瞬間にぱっと手を離し、地面に寛いだ様子で腰を下ろした。もうどうでもいいというように苦笑する。

「危険なものは排除せよ。…賢者の教えは馬鹿の一つ覚えだな」

「ばっ、フユ！そいつを自由にするな！！」

乱火が怒鳴った。

けれど攻撃しようと腕を振り上げたドールフェイスを、フユはただじっと見つめただけ。

それも、有りか。

フユがそう思っている気がした。

もう抗うのも疲れた。

だってその目が。

ここで殺されとくのも、手間が省けていい。そう言っている気がした。

「フユさんは！危険なんかじゃないです！！」

「朝凧！」

朝凧が必死でドールフェイスの腕を掴んだ。

「キレイで強くて、ちゃんと！あなたを助けようとしてる！！！」

ドールフェイスに向かって叫んでいる。フユが与えたのは、死ではなくて、逃げ道。

「あなたは気付いてるくせに、まだ攻撃しようとする！！」

フユが少し驚いた顔をして朝風を見ている。

「あなたのやつてゐることはおかしいです！フユさんのことを何にも知らないくせに！！！」

「……………オイ」

フユが朝風に声をかける。

「ハイ」

「テメーだって知らねーだろ、俺のこと」

溜め息混じりにくしゃりと髪を掻き揚げたフユは、面倒そうにぼやいた。

「アンタ朝風つつたっけ」

「…ハイ！！」

朝風が頬を微かに染めたのを見て、「女の子」だな…と場違いな感想を抱く。でもだからこそ、朝風を連れて行きたくはない。朝風は現状の先にある未来に、充分に幸せを見つけることが出来る。戦つてもエゴを押し通したい私とは、根本的に違う。

「黒髪、あんたは」

「……………詩月」

フユが理解したと言う風にそれと気付かないほど小さく頷く。

「で、オマエは。お人形」

フユがドールフェイスにかけた声は、「抹殺」なんてなかったように静かで優しい。

「名前。なに」

「……………砂都<sup>さつ</sup>」

躊躇いがちに答えたドールフェイスは、フユがずっと立ち上がって空気のように近付いて来てももう攻撃する気はないようだった。

「砂都、プレステ3あんだけどゲームしねえ？」

「えっ……」

「！？？」

フユの誘い文句に全員が息を呑む。

「おい、フユ…っ」

「んだよ」

止めかける乱火に涼しい顔を向けるフユ自身は、自分の言動に疑問を抱いてはいないらしい。

「そいつはお前を殺しに来たんだぞ！」

「…はあ？だから何だよ？」

だから、何、って。

「まだその気があなのか、砂都」

フユが砂都に直接聞くが、「今は違う」なら許せるとでも言うのか。  
「……」

返答に詰まる砂都を見つめるフユは、無表情でいながら、どんな答えも否定しないと思わせるような安心感を抱かせる。答えられないことすら、受け入れてもらえると錯覚しそうになるほどに。

「まあイヤ。ほら行くぞ」

そう言っただけで砂都の頭を掻き混ぜたフユは、大人びていて、痛みなど僕も見せない。

「フユ、待てよ！分かってんのか！！」

呼び止めた乱火を振り返りもせず、フユが呟く。

「俺、刃向かってくる奴って、好き。」

……それで文句ねーだろ。めんどくせーよ、イチイチイチイチ

好きの一言で、こんなに簡単に片付けてしまう人間を、私は知らない。

「おいで、砂都」

戸惑いながら付いて行く砂都が伺うように言う。

「ぼく、テトリスやりたい」

「あー…もつと現代的なゲームやんね？」

その光景は仲の良い兄弟にさえ見える。

後ろ姿を見送って、二人の声が聞こえないほど離れてから乱火に話しかける。

「さっきの、ガード間に合ってたのかしら…。朝凧を庇って自分を守りきれてなかったように見えただけ…」

「ああ、……」

乱火は深く語らず曖昧に濁した。

「とにかく、砂都に話を聞こう。あいつはなんか知ってるだろ」

「砂都さんって、何者なんですか？」

朝凧が尋ねる。

「ピンクの髪のドールフェイスな…。あれは風姫<sup>かざひめ</sup>の側近だ」

「風姫…？」

「これは思ったより、根が深い戦いらしいな」

乱火が独り言のように言った。

## 二十三、テトリス

落ちていくL字形の赤いピースが美しい。テトリスはシンプルで完成されたゲームだ。結局フユは、古いゲーム機を引っ張り出してきて、砂都の要望に付き合っている。

「砂都、どうしてフユを抹殺しようとしたんだ」

画面を見つめる二人の背後から乱火が問えば、フユが不機嫌に吐き捨てる。

「まだその話かよ。うぜえ」

まるで下らないと言いたげな台詞に乱火が反論する。

「お前は気にならねーのかよ、フユ。うやむやにする気が…」

「『危険だから』だろ。それだけ分かれば充分だ」

フユは冷めた目をしていた。

「俺は、お前たち『彼岸の使い』の存在を知ってる。……ずっと見てきた。お前たちが人間の命奪ってる時も、奪う命探してる時も。

ただ黙ってたただけだ。正直：お前たちを『消したい』とどれだけ思ったかなんて、もう、……覚えてない」

淡々と語られる言葉は、憎しみより諦めの方が大きく聞こえた。

「俺は何の力も持ってなかった。『見える』以外は、普通の人間と変わらない。勝ち目もないのに抗うほど馬鹿でもない。

けどある日状況が変わった」

乱火をちらと掠めたフユの視線は、縋るような、責めるような、けれどそのどちらでもない色で伏せられる。

「俺は『乱火の力』を手に入れたし…、今はその気になれば彼岸に喧嘩吹っかけることも出来る」

乱火は、彼岸でも持て余されるくらい強い力を持っていた。

けれど彼は、彼岸の仕事にただ一つの価値すら見出すことはなかった。

そうしてどの人間の運命にも関わらずに上層部の怒りを買って、彼岸に居る権限を剥奪された。

彼岸の力を封じられ、人間界に落とされ、決して人間ではなく、彼岸の使いとも呼べない。

封じられた力が、どこへ流れるのか。存在したものを完全に消すことが出来ないのだとしたら、受け入れるだけの容量のあるところへ行き着くのが自然だ。

それが、フユで。

力が無いから視野に入れなかった『復讐』を、実現出来るだけの状況が訪れたら。

「フユ、でもお前は、」

「彼岸を否定はしねえ。今ここでテメーらと戦おうとも思わねえ」

フユにそのつもりが無いとしても、彼岸にとって「危険」と判断するだけの材料が揃ったら。

抹殺……、全て彼岸が撒いた種なのに…。

危険が積もる前に消去せよ。

まるで、テトリス。

## 二十四、君に手紙を

彼岸の世界は、人間界を顧みない。

私たちはエゴに染まった死神だ。

「全消し。砂都、オマエもーちつと修行が必要だな」

フユはそう言っ、て、砂都に躊躇いもなく笑顔を見せる。

目の前でいとも容易く命を奪われる人間を、彼は何人見ただろう。

他の人間に『見えない』彼岸を話題に出来るはずもなく、何もかも心の中に閉じ込めて、一人きりで傷付いて。それでもフユは砂都を傷付ける手を止めた。あまりにもあつさりと。

私は？

「フユ……」

砂都が消え入りそうに呟く。

「ん？」

「あの…、……ごめんなさい……………」

時が止まったかと思った。誰も何も言わず、呼吸すら聞こえない。そんな一言でキャンセル出来るなら、過去ごと全て無くなればいい。

「なにが？」

背後にいたせいで、フユがどんな表情をして言ったか分からない。  
抑揚のない口調だった。

「何の事だか分かんねえよ、だからお前も忘れる。……それともこ  
う言えば満足か？」『ああ俺も悪かったな。痛くなかったか』、全  
部嘘だぜ」

落ちていくテトリスのピースだけが、変わらない時間を刻む。

「なあ砂都。お前が期待するような言葉は、俺の中からは出てこね  
え。だから下らない謝り方すんな」

ごめん。いいよ。それで終わってゆくことばかりなら、こんなにも  
悲しくはないのだろう。

「許すとか許さないとか、そういう話じゃねえ。どうしたって記憶  
は消せない。いつそ、今まで通りでいいじゃないか。お前らは好き  
に奪えばいい。別に何も感じちゃいねえよ。文句もねえ。好きにし  
るよ」

ごめん。ああ、そんなことどうだっていい。

もう、期待なんてしていないから。

分かり合おう、なんて、夢物語。一体何が駄目で、こんなふうにな  
ってしまっただろう。

「乱火、代われ」

立ち上がって乱火にコントローラーを手渡したフユは、誰の目も見



ようとなしな。

「まあ…、お前もあんま深く考えんなってことだ」

砂都にそう言い残して、部屋を出ようとする。

「フユ、どこ行くんだよ？」

関わることを、避けるように。

「お前らが出てかねーなら俺が出てく。部屋は好きに使え」

フユはドアに手をかけて降り返ることもない。

こんなにも簡単に明け渡して、自分の居場所に執着もない。 居場所、この世界そのものに。

「おい、待てよ」

乱火が咄嗟にフユの左腕を掴んだ。

「っ！」

掴まれた左腕をぐっと庇うように身を屈めたフユに戸惑う。伏せた横顔が苦しそうに歪んでいた。

「お前… やっぱりさっきの攻撃で……」

「うるせえ」

乱火の手を振払う仕草が、拒絶を誇張する。

「…何でもねえ。触んな…、一人にさせろよ。…ここに居たくないんだ」

フユは押し殺すように呟いて出て行った。

私は金縛りのように動けない。

彼を引き止める確かな言葉を、誰か口に来る人がいたとしても。

その孤独に侵入して、この世界に繋ぎ止めるだけ、彼を支配する人が現れたとしても。

きつとフユは、真っ直ぐに視界を上げることはない。

ハルやナツメやフユが、諦めているのを見たくない。その為に私一人で事足りるなら、全て投げ出したって構わない。

「フユさん……」

朝風の心配そうな声が痛い。

人間に肩入れするのは、彼岸を否定するのと変わらない。生死を管理するという存在意義を存続するために、彼岸は躍起になっている。

死神のアイデンティティーなんて、誰が決めたんだ。

殺すことを放棄したら、私たちは用無しで、だけどそんなこと誰が望んだのか。

私が自分のエゴを振翳して人間を保護するためにクーデターを起こすなら、当然それは彼岸に取っては危険因子で、摘み取るべき芽だ。もしも私が勝ってしまったら、彼岸の世界は恐らく現状維持なんて出来ない。きつと新しい意味を見出す前に崩壊していくだろう。そのくらい彼岸は『生死の管理』に固執している。

鎮圧されて抹消されるか、破壊神となって彼岸の終わりを眺めるのか。どちらにせよ結局、未来はない。

それを知りながら尚戦おうとしている私はやはり異端だ。

朝凧も、里雪も、好きだ。

敵対するだろう桜や華夜も、本当は彼岸を守ろうとしているだけだ。

私は永遠に墮落していく連鎖を断ち切りただけで、彼岸の誰かを憎んでいるんじゃない。

けれどそれはキレイゴト。言葉を飾ったところで結果残るのは、殺戮なのだから。

ああだけど、ハル、ナツメ、フユ。

朝凧、里雪。

どうして愛すべき存在を、同じだけ大切に出来ないのだろう。

## 二十五、信じること守ること

「ダッ、ダメだよ！一人にしちゃ……」

青ざめた砂都がはっとして叫ぶ。

「砂都？けど今は、」

乱火が嗜める口調で遮る。

今は、一人にしてやれ。どのみち彼岸の使いである自分達では、何も出来ない。

「違う！連れ戻さなきゃまた狙われる！！」

「『狙われる』？」

狙われるって、どこまで悪化しているのか。それとも元から存在していた酷い事実を、単に私たちが急速に理解しつつあるだけなのか。

事実、

真実……

一番肝心な事を知らないのか？

誰も彼も、真実の断片しか知らずに、他者を傷付ける。悪なのか、正義なのか。

「そう、風姫が『先見の書』を読んだから！

良くない事が書かれてる、危ないよフユ、あんな体で……」

息付く間もなく捲し立てる砂都。

堕ちて、堕ちて、堕ちて……、制御の利かない未来が向こうからやってくる。抗っているつもりで、絡み取られているのだろうか、私たちは？

「落ち着け、砂都。先見の書には何て書いてある、風姫は何て言った？」

乱火が硬く先を促す。乱火も焦っている。私も。

「先見の書…風姫…、センパイ、それって…？」

朝風がおずおずと窺ってくる。

先見の書。そんなものが関わってくるなんて。

「彼岸の予言書よ。彼岸の未来が記されている。風姫はその聖書の番人」

「予言書…そんなものが…？」

非公開のその書物を、私もこの目で確認した事はない。風の噂に聞く程度だ。

「彼岸を統治する上では重要な参考文献よ。彼岸の歴史であれ以上信頼性のある書物はない。ただどあれは彼岸内部の指針でしかないはず…。それに風姫がその内容を公に知らせるなんて、ずっと内密に扱っていたのに、……ましてそのせいでフユが危険だなんてどうして」

砂都が俯く。

「…“彼岸が、人間の存在によって滅びる。その名は、ハル、ナツメ、…フユ”」

それが、

『予言の言葉』か。

「センパイ、それって…」

「それが風姫の言葉か…どういうことだ…!？」

わからない。ただひとつ、はっきりしたもの以外は。

ハル、ナツメ、フユ。

彼岸は彼等を殺すために動いている。

最悪だ。彼岸という世界は、信じるに値しない。

「朝凧」

ごめん。

「はいっ」

「あなたは彼岸に帰りなさい」

「…え」

「何も知らないフリをして、出来るだけじっとしてなさい」

そしていずれ私が敗者になれば、あなたは助かる。

私を止めないで。あなたは生きて。身勝手。

「イヤです」

「朝凧、」

我俣を聞いて。身勝手だって、分かっている。けど言う事を聞い  
て。

「絶対に嫌です」

死なせたくないんだ。

朝凧がいつになく大人びた顔で私を見る。

「私は確かに術もヘタクソだし、単純だから先を読んだりも出来ないけど、でもセンパイと一緒に戦いたいんです。

ずっと憧れてました。四面楚歌でもいつもセンパイだけ凜としてて、それがすごく格好良くて。

センパイがセンパイの意志で戦うように、私も私の意志でここにい

ます。私を心配しないでください。もしも傷付いたとしても…自分の責任は自分で取ります」

「死ぬかもしれないのよ」

「分かってます！」

分かってる？私が何より分かって欲しいことも、朝風、あなたは分かってる？

「…私はハルのところに戻る。朝風、あんたはフユを探して」

「！」

弾かれたように朝風が笑う。

「はい！お任せ下さい！！！」

違う。

「乱火と砂都も危ない。朝風がフユを見つけたら4人で出来るだけ安全なところへ。居場所が決まったら朝風は一旦私のところへ戻って知らせて」

静かに聞いていた乱火が目だけで了解を示す。

乱火は、大丈夫。

「はいわかりました！！他にはありますか、何でも言って下さい！

私はいつでも戦えます！！敵の気を引くとか！オトリでも何でも！」

朝風。

「何でも？」

朝風の言葉を繰り返す。

「ハイ！命懸けで頑張ります！！！」

やっぱり分かってない、あんたは。

朝風の襟元を掴んで思いきり引き寄せる。

「きゃ、っ」

分からせなきゃ、分からない。

「ひとつ覚えときなさい。あんたを囿にするくらいなら私は自分の命を投げ出すわ」

朝風が動作を止める。

覚悟決めなきゃ、こんな事言えないわ。

「私についてきて。絶対死なせないから」



## 二十六、何色を映す

「やっぱりセンパイ大好きですっつー!!」

朝風を抱きつかれる。それを引き剥がしながら思うのだ。戦いが白日に晒される頃には、今のこの瞬間に『平穏』という名前を付けることになるのだろう、きっと。そして思い出すのだ。戦火の中で、あたたかな光を。

彼岸は信じるに値しない。

でも朝風や里雪の存在を信じたい。

「鬱陶しい……」

そう言って引き剥がしても笑ってくれる朝風。

信じてくれるから、全部守れるような気がする。

全く馬鹿げているのかもしれない。

二兎を追ってみるのも、悪くないアイデアだ、なんて。

だけど出来るなら、彼岸と人を。その相容れぬ二兎を両方。

フグが狙われた同じ時刻に、ハルが無事だったとどうやって保証出来るだろう。詩月が不用意に乱火の元を訪れてハルから目を離れた間、余りに無防備なハルと、そこに置き去られたナツメの、魂の抜けた体。

闇が深まる地上に、裏腹に強い光を放つ満月。狂い咲いた白い花の輪郭を、冷たい明かりが縁取っている。それはハルの家の裏庭に、祖母が唯一残した見事な百合。気が違いそうになるほど美しく、その光景はどんな絵よりも白々しい。

随分物わかりの良い花だ。

ちらりと視線を注いだ里雪はそんな事を思つて、自分の感想に舌打ちした。

異常な事態に異常な景色。どこかの台本に書いてありそうな胡散臭さじゃないか。謀られたように都会から外れたこの場所は、実際お伽話なんかとても相性が良さそうだ。とはいえ、そういった類の面倒な思考は里雪の好むところではない。考えずとも充分に山積みであるし、そもそも里雪はその面倒を一つ処理しにここへ来たのだ。五万とある問題のたかだか一つ。まるでお笑い草だが、詩月にとって価値があるならそれもいい。

「あんたが、ハルか」

里雪は無断で家に入ったが、ハルはもう彼岸の使いに驚いたりしなかった。

「…あなたも彼岸の？」

「ああ」

ハルのベッドにナツメが寝かされている。

「…天使みたい、」

ふいにハルが発した言葉に、里雪が目線をハルに戻す。

「なにが」

怪訝そうに聞く里雪にハルは柔らかに答える。

「金髪が、すごくきれい」

里雪の容姿は絵画に描かれる事しばしばの、天使そのものだ。纏う服も、白い。

「…そんなことに意味があるのか？」

返答に迷う里雪に、ハルが穏やかに言う。

「いいえ。ただきれいです」

詩月が必死になる理由は、こういうことなのか……？

里雪の中で、明確な言葉にならない感情が疼いた。

しかし答を探ろうとするより早く、処理すべき事態が近付いてきたと悟る。

チャリ、と、付ける必要も無いウオレットチェーンが重なる音。左に三つ、右に二つのピアス。黒に赤くメツシュを入れた髪。度のない、薄くブルーに透ける眼鏡。それらのアイテムは彼岸には存在しないものだが、状況を見て取れば対峙する相手が彼岸の使いであることは明かだ。なによりも、里雪はその相手に憶えがある。

「人間のオモリは大変だな」

挨拶代わりの軽口を叩くその男。初対面の相手にも昔からの知り合いのような態度を取るタイプで、里雪は彼岸で何度か絡まれた記憶がある。記憶があるからと言って再会して喜ばしい相手ではないのは確かだ。100歩譲って『絡まれた』という若干乱暴な表現が、実のところ的確でないと認めたにしろ。

「よ。久しぶり、里雪ちゃん」

「何しに来た」

抑揚に欠ける調子で里雪が問う。問われた男はもう何時間も前からここで寛いでいたと言うような気安さで口角を上げた。

「んー。ケンカ」

人間に何の愛情も持たないその男は、けれど人間の作り出したアクセサリーを身に付けるのに抵抗がないようだ。果たしてその二つは両立するのかと里雪は考える。作り手を度外視して、個体は個体として認識する……。

どちらでもいいか。疑問を持ったからと言って解答を探し当てる義務はない。

「そうかよ。わざわざこんなとこまでご苦労だな」

ケンカしに。

『喧嘩』は『里雪の』目的だ。数秒後に訪れる未来でもある。しかし『ケンカをしに来た』と口にした男の『目的』ではない。その男は『彼岸の保護』が目的であるはずなのだから。突き詰めて言い切るなら、『ハルとナツメを抹消しに』来たのだ。

こうしてすり変わる。

『正しさ』が、『どちらでもないもの』に。目的が、争いに。里雪は考える。

なんでか生きてる奴ってのは、戦うのが好きだ。彼岸の使いが生き物のカテゴリに入ればの話だが。

自分は巻き込まれているのか。もしくは望んでここへ来たのか。

昼寝している方がいい。どちらかと言えば。

そんな言葉に自分自身で騙されているのだろうか。結果論なら同じ穴の貉。ついでに付け加えるのなら、今は恐らく過程より結果が大事だろう。

何にしても結果をこいつに譲ってやる気はない。

首に引っ掛けていたゴーグルを引き上げる。一瞬で里雪の視界がセピア色に変わる。場違いな感想だが里雪はこの瞬間が嫌いじゃない。懐かしくてリアリティが薄れる褪せた色。里雪ただ一人の中で、世界が染まって行く。

セピアのフィルタの向こうで、もうそれと知れないブルーのレンズ越しに男の目が笑った。

「冷静なのは口先だけ、ってね。里雪チャンがゴーグルすんのかって本気の時だろ」

対照的に里雪の涼しい目が、思案するように宙に逸れる。

「どうだか」

「強がんなよ。遠隔操作で二人分のシールド張りながらの戦闘なんて、手加減してたら負けるぜ？」

そういうところが面倒だ、と里雪は思う。こちらの都合に添って何が変わる訳でもない。お互い戦う事に異論がないなら、それで問題ないだろう。勝った方が『勝者』で充分だ。

「さつさと“ストッパー”を外せ。暴れたいんだろ」

里雪が言い捨てる、セピアの世界で軽薄な笑みを浮かべた男の唇が満足そうに動いた。

「上等」

## 二十七、死神

気が付けば、ハルの家であったそこは、床も空もただひたすらに白いだけの空間へと変わっていた。遮るもののない果てしない白。その色は雪とも雲ともつかない。

もしハルの考える光の概念を密閉出来る入れ物があつたら、きっと中身はこんな状態になる。それは総ての集合体であり、同時に無。この世のあらゆるものを視認出来ないほど細分化して、神の手で攪拌すれば、恐らく新たな何かが生まれるだろう。

パラドックスなドラマもこの白の中でなら魅力的だ。これはそういう光だ。

ハルが咄嗟に抱き寄せたナツメをぎゅっと抱えて呟く。

「...どこ、ここ...」

生命の根源と末路。源と行末。安堵と恐怖。信仰と疑惑。あらゆるものが同レベルで存在する。

「彼岸と人間界の挟間だ。安心しろ、すぐに帰れる」

ハルを『敵』から庇うように立った里雪が振り向きもせず答えた。

「すぐに帰れる？勝利宣言かよ？」

男が嘲る。

「オレを倒さねーとこの空間は消えねーぜ」

瞬間、ハルには男が里雪の背後に立ったように見えた。男の殺意が躊躇いも無く里雪に向かう。

危ないと思うのと、里雪の背中が爆発するのは同時だった。けれどそれを注視したハルが見たのは無意識に予測したものと違う。

神の戦いか天使の戦いか悪魔の戦いか。

傷を負ったのは、黒に赤が混じる髪、人工的な加工を自身に施した男。

「ち、どういうことだ！？背後を攻撃する余裕は無かったはず！！」

男も自分が傷付いた理由が理解出来なかったようだ。左耳の上から三つ目のピアスが痛みと叫びに合わせて揺れる。

「簡単だ」

里雪の冷静過ぎる声が冷ややかに通る。里雪の背後に殺気だった男の、背後に里雪。

「つまり『それ』は、」

それ、とは。男が攻撃を仕掛けた『里雪』という名の何か。それは。

「ダミー」

ガッツ、と鈍く重い音がした。

小型の稲妻のような鋭い光を右手に、里雪が男に斬り掛かる。ダミーではない、後尾にいる里雪が。そして咄嗟に振り返った男の張った、薄いガラスの膜のような半球に直前で阻まれる。落ち着き払った里雪は低く言う。

「二度目だ。 “ ストッパーを外せ ” 」

ストッパー。

彼岸の戦い方など知らないハルにも里雪と男の差は見て取れた。里雪の持つ鋭利な光は、本能的に危険を感じるものだ。あれには間違いないく殺傷能力がある。それに加えて里雪は今相手を傷付けるつもりで扱っている。

どうして戦うの。

「冗談キツイぜ。それでどうして彼岸の下級レベルに甘んじてんだ」  
納得出来ないと言うように男が尋ねる。

「それも簡単だ」

ストッパーが何を意味するかは明かされない。

「 “ 素行不良 ” 、 こういうことだ」

里雪の翳した光が爆発した。男をあっけなく巻き込んで。

加減を知らないその爆発に倒れた男を、里雪が感情を持たない瞳で

見下ろす。

「悪いな。シールドを張ると攻撃力のコントロールが上手く出来ない」

シールド。

「本気な訳じゃない。力を操れていないだけだ」

シールド。景色が白く変わってから、ハルとナツメを包む透明な球体。男が里雪の攻撃を防ぐ為に生み出した半球のガラス膜。

「は、ゴーグルは…、自分の攻撃からのガードってどこか…？ム力つくぜお前……」

最初この男は何と言った？

遠隔操作で二人分のシールド張りながら

ハルとナツメは里雪に守られている…守られている？

ハルにはその矛盾が呑み込めない。死ぬ予定の人間を守る？死ぬ為に生きている人間を守る？

「目的はなんだ。どうして本気を出さない」

里雪が問えば、男が呻くように立ち上がる。この二人は同じ彼岸の使いで、言わば仲間ではないのか？

どうしてたたかうの。

「…ストッパーは外せねえ。まだ力が必要だからな」

どうしてたたかうの。

「何のために」

男は分かり切った事を聞くなと言うように唇を歪めた。

「へっ、それこそカンタンだぜ」

どうしてたたかうの。

「まだ守らなきゃなんねーもんがあるからだ」

どこから取り出したのか、男が4本の短剣を里雪に向かって投げ付ける。

当然のように上空にジャンプして ジャンプではないかもしれない。地面とそれ以外の境界線が曖昧で、空間的な感覚が薄らぐこの場所では。 実際里雪は重力の負荷を考慮していないようだ 躲した里雪

はそのまま短剣の軌道を確認する。

狙いが甘い。勝つ為の戦いじゃないな……。時間稼ぎか。それとも…。

「くらえ!!」

足場の無い里雪に男が再び短剣を投げる。ギリギリで里雪がヒュッと放った強い光が、短剣に当たってどちらも相殺された。

俺の力を量っている？

里雪の中でふっと疑念が過る。

『時間稼ぎ』ならただこの場だけ戦闘不能にすればいい。だが力を量っているならそれだけでは危険だ。

地面に降りた里雪と対峙の相手は一定の間を取って、無言で牽制し合う。

裏に何かある。吐かせるか？

牽制しながら得策はどれかと思考する。

いや、コイツはそれに応じるタイプじゃない。…拘束……それも無理だ。場所も人手も足りない。敵がこの男だけだなんて有り得ない。そもそも拘束しても何も吐かないならメリットが無い。彼岸の人質としても機能しないだろう。現時点で彼岸の歴史を覆すほど体裁を無視した暴挙に出ているのだ、今更犠牲を数えることもしないだろう。

黒髪に赤いライン。ブルーのレンズ。セピアのフィルタ。

再起不能になる程度に負傷させる。

里雪が自分自身で紡いだ選択肢に自嘲する。

そんなコントロールが出来るか？

出来ない、言っただけだ。

どうしてたたかうの。

里雪がほとんど無防備に屈んで地面に掌を付ける。ぽつと何かが碎ける音がした。



時間稼ぎに付き合ってる暇はない。俺のデータが欲しいなら持つて行けよ。誰に報告するつもりか知らないが、報告出来る状態で帰れると思っているのなら。

ぼこつ、ぼこつ。

里雪が手を付けたところから、何かが這い出てくる。

天使のペットと呼ぶには生々しい。

里雪を背に乗せて、巨大な獣が地獄を思わせる声で咆哮した。

天使、天使。一見光の化身を思わせる里雪。けれど天使などではない。今地獄の獣を手懐ける、…。

ああそうだ。ハルは思い出す。

『死神って言って信じてくれる？』

詩月の言葉を。

死神。詩月。目の前の彼。

「悪いが片づけさせてもらう。死んだら詫びるぜ」  
里雪が何でもない事のように言う。

ハルは誰に守られている？

「…殺すの……？」

金髪の彼。天使、死神、誰か。

「やつ……、やめて……！！！」

破壊の音と、濁った白煙がハルを呑み込んだ。……



## 二十八、女神へと祈り

朝風の二つに結んだ金髪が揺れる。

フユさん。今どこに？

フユの姿を探して息を切らし、乱火の言葉を思い出す。

『フユが行きそうなところ？

ゲーセンとか、コンビニとか…、そーいや三丁目の川原も気に入ってるみたいだったな』

そのどこにも見当たらない。

フユさん…、力になりたいです。傷付けてしまった分を取り戻せませんか。

朝風の心を掠める、フユの後姿。

『一人にさせるよ。ここにいたくないんだ』

そう言つてすり抜けていった。

そこまで孤独にさせてしまったのは、きっと彼岸の責任で、…それなのに。

『砂都、ゲームしねえ？』

『俺、刃向かってくる奴って、好き』

素っ気ない顔をして、決して砂都を孤独にさせなかった。

どんな気持ちでしたか。

『それでも俺を抹殺するのは、お前の正義なのか』

正当化される殺人は。

『消すには充分な理由だ』

それはまるで他人事みたいなセリフ。

フユさん。私にはその心を解くお手伝いは出来ませんか。

乱火の言葉が過る。

『そのどこにもいなかったら教会かもしれねえ』

意外な選択肢に、朝凪の中で戸惑いに似た感情が生まれた。

儚げに整った容姿だから、きっとフユがそこにいる姿は絵になるだろう。

『教会……、ですか？』

『ああ、町外れに寂れたのがあんだ。アイツ宗教嫌いなくせに俺と出合ったのはあそこなんだよ。それから行ってんの見たことねーけど、もしかしたら……』

朝凪は、フユが教会で祈りを捧げる様をとて綺麗だろうと想像出来る。けれど神に軽薄な眼差しを向けるフユの方が、ともすれば祈りの姿よりもずっと魅力的だろう。神に媚びない涼しい目は、手の届かない高嶺の花を思わせる。たった一輪、凜と佇む月下の花。それは孤独を知る人々を惹き付ける、命の意味。

フユさん。そこに居て下さい。

錆びれた教会にしつとりと差し込む光は、埃に澱んだ空気にぼやりと滲んでいく。

希望があるはずのその場所は、今はもう希望ごと忘れ去られたように冷たい。ここには誰も居ない。フユの他に誰も。

フユは一番前の椅子に雑に腰を降ろし、白い女神の像を見つめた。しんとした薄明かりに、信者を持たない女神の白さが柔らかに映える。

教会が作られてから、いずれ取り壊される日まで、同じ微笑を浮かべる女神。

何を祈れと言っのだろう。

幸あれと？

フコは遠くを見るように瞳を微かに揺らす。少なくとも自分はそんなものを望んでいないと知っている。

「……なあ、」

微笑に向かって呟く。あんたが神だっと言っなら。

「もう、俺を殺してくれよ」

## 二十九、フユ

最初に彼岸の使いを見たのは小学生の時だった。

錆びれた教会の中で、フユは色褪せた記憶を辿る。太陽の光を薄く遮る塵と埃が、いつそ自分の体も浸食していけばいいのにと彼は思う。それならば思い出も、これから起こるやりきれない予感も、少しは霞んで見えるかもしれない。

ほんの少しでいい。全部から目を逸らせなくてもいい。でもたった少し。

母親と買い物の帰り道。

瞳を閉じると、脳に残った断片的な古い映像が甦る。

あらやだ…事故…？ 母の声。

ピーポー…… 救急車のサイレン。

玉突き事故だって 飲酒運転かしら 怖いねえ… 野次馬のざわめき。

偶然居合わせた交通事故。

状況と位置関係を考えれば、生々しい事故現場を自分は見たはずだ。

けれどフユは覚えていない。血の跡も。そこに転がっていたはずの人の姿も。思い出すことが出来ない。

代わりに母にこう尋ねたことを記憶している。

母さん、あの人なにしてるの。

え？

母が自分の質問の意味を量りかねていた。

車の前で、白いふよふよしたものの持つてばーっと立ってる黒い服の女の人。

事故車の前に立って、かすり傷の一つもない女。左手に何かを持っていた。横顔が笑みを浮かべていた。それが人間の命の消える瞬間だと気付いたのはそれからずっと後の話だ。

その時は誰にでもその女が見えていると思ったから、自らの発言に疑問を抱かなかった。だが母の顔色がずっと青く引いて、その唇が『そんな人はいない』ときっぱりと言った。

フユ、そんな人いないわ。気持ち悪いこと言わないで。

母はそれ以上言わなかった。

俺も黙っていた。

暗黙の内に不思議な隔たりが出来ていった。意識的に「諦める」事を知ったのは、多分この時だ。

それから半年が経って、突然クラスメイトが体を壊した。

見舞いに行ったら『アイツ』がいた。

あの時の女だ。ベッドの脇に、少し口角を上げて、何かを待つように。

この女の人ダレ

喉まで出かかった言葉を呑み込んだ。気付かれてはいけない気がし

た。

入院しているクラスメイトにも、あの女にも。

次の日クラスメイトは死んだ。

あの女が持つて行っただ。

そう思った。

中学に上がる頃には、『そいつ等』は『死神』みたいなものと理解するようになって、『人間』と見分けもつくようになった。

自分以外に見えていないということも心得た。

奴らはなんて無感情に命を奪って行くのだろう。

立ち向かうにもその術を知らなくて、なにより一人きりだった。

「フユ、昨日のお笑い見た？」

何も知らない同級生たちの声。

「見てねえ」

自分は素っ気なく返すだけ。

「ええなんで？！ちょーおもしろいのに！！」

「次見ろよ！ぜってーハマるって！！」

ああ、もう。どうしてなんだ。

「俺、興味ねーから。そういうの」

そんな風に返したいと思ってる訳じゃない。それでも口を突いて出るのはそんな言葉だ。

「んだよ、いつも一人でいるから友達になつてやろーとしてんのよ」

「そーだぞ？！何様だよ！」

頼んでねーよ。

いいね。見えない奴は平和で。



苛ついた。

どうしようもないと思い知るほど。

友達ってなんだよ？分かり合えないんだぜ。

「俺たちも帰ろうぜ。ったくよー、顔良くてもアレじゃなー」  
「モテねーよ。もったいねー」

彼等は聞こえよがしに言い捨てて行くけれど、何の価値もない台詞だ。

残念ながら、この容姿はこの世の何にも貢献していない。

もし俺が

人生って滅茶苦茶あっけなく終わるんだぜ。  
って言うって、

お前等は応えれんのかよ。

コンビニやファーストフード店みたいに、手軽に奪われてく命を見てんだ。

お笑い見て笑ってる余裕なんかねーんだよ。

消えた命に泣いてる人を見たんだ。

それでも知らないフリをした。

### 三十、閉鎖する

友達なんかより、この感情を消す方法を教えてくれ。

自分が無力だなんてことは、もう充分過ぎるくらい。

知ってる。

ただ知らないふりをしている。

訳の分からない、人間ではない何者かにあっさりと下される命の終わりも、そうと知りながらただの一度だって足掻こうとしない、他の誰でもない自分という人間の冷めた残酷さも。

フユは他人に期待しない。それと全く同じだけ、自分に期待することもない。

ヒーローなんて柄じゃない。期待出来る理由もない。

サイテーなヤツ、それでいい。

だから、もう揺さぶられたくない。

見たくないんだ。見たくない。痛みなんて感じたくない。

傷付きたくない。

学校からの帰り道に、出合いたくない、黒服の人の群れ。

葬式だ…

失った誰かを悼む人々。

俺は誰も護れない。

フコは鼻歌混じりに魂を弄ぶ死神の存在を知っている。

護れない。

泣いている、他人。

慰め合っている、他人。

静かに立ち尽くしている、他人。

みんな、彼と何の関わりもない人間なのに。

みんな、みんな、みんな。

他人だ。

関係ない。

アンラッキーだった、俺ならそうやって割り切れている筈なのに。  
こんなの何とも思わない。

関係ない。

だって、俺が何とか出来る話じゃないだろ。そうだろ…。

何とかしたくても、どうしていいのか分からないんだよ…

誰かに答えてほしかった。

その場から物理的に離れても、現実は何からも逃げられない。

俺のせいかな？死神を“俺が” “止めないから”か？

どうすればいいんだ。俺が悪いのか？俺が？

答えが欲しかった。

なんでも良かった、もう。

『俺が悪く』で、いいから。

どちらでもないところを彷徨っていられるほど、身軽じゃなかった。

だけど答えてくれる相手はいない。当たり前だ。彼がここにいることを、誰も知らない。

救いなんてない。俺しか見えていないんだから。

ふとした瞬間に、喪服で泣いていた、名前も知らない誰かの残像が過る。

本当は、何か上手くしたら、それを彼が止められたのかもしれない。何様のつもりだ。偽善か？

『正義』なんてささやかな幻想に縋りたい思いと、それを否定する酷く冷静な自分が、何の規則性もなく立ち代わる。

目の前で泣かないでくれ。

自分が悪い気がしてくる。目眩がする。

こんな世界信用出来るか。

脈絡なんてない。唐突にクラスメイトの声が耳の奥に甦る。

「フユ、昨日のお笑い見た？」

こんな世界。

所詮叶わない。

「次見ろよ！ぜってーハマるって！！」

ああ、どうしてもっと。

「フユ」

普通に。お笑いとか見て、分かち合って。

信じたいのに、どうして。

普通になれたら。

どうして…。

### 三十一、教会

そんなこともあったな。

しんとした教会の薄暗がりの中で、フユはぼんやりと記憶の糸を辿る。

クソマジメすぎるぜ、自分。

真剣に向き合おうとしていた。だから、苦しかった。

どうする術も知らない代わりに、どうすることも出来ない自分を責めて、傷付くだけの純粹さがあった。

生きたくて必死だった。

あの時は。

まあ、可愛いっっちゃ可愛いかな…

確かに「苦しい」と感じていた頃の自分は、今から思えば嫌いじゃない。

少なくとも今の自分よりは。

あーあ、昔の俺に言ってやりてえよ。

“答えなんか出ねえ。気楽に生きてけ”

それから。

“彼岸の使いには声をかけるな。かけると後悔するぞ” って。

本当のところを躊躇いなく言えば、今だってそれなりに傷付いている。

ただもう今は、自分も、他の誰も責める気にはなれない。

全ては無意味な茶番劇。

フユはキャストに含まれている。けれど彼の意志で物語は進まない。

「あークソ、哀しくなってきた…」

何気なくぼやいた台詞が、ぼやいたフユ自身の耳に驚くほど切実に響く。

ヤベー、泣きそう。

何やってんだ、俺。

この世界のあらゆる全てを、遮断したい。

埃の舞うこの教会の、中途半端な明るさ、酸素、過去、未来。乱火の後ろ姿。

いつだって自分の欲しかったものを理解するのは、手遅れになってからだ。

もう今は。違うのに、止められない。

取り留めない思考が現れて、すぐに消えていく。  
言葉の意味を咀嚼する前に、感情は消えてしまう。

頭が痛い。

なんだろう。

乱火。

やっぱり、俺が悪いんだよ。

もうどうでもいい。

意識が途切れていく。

もう、いい。

熱い。

知らねえ。

冷たい教会の長椅子が心地よく、フユは重たい眠りに引き込まれていった。



## 三十二、微睡みの絶対値

ギィ。

乱火に教えられた教会は、およそ祝福とは程遠い佇まいをしていた。壁にはヒビと雨の染みが目立ち、教会を囲む草木は伸び放題。

ここには手入れをする人間が一人もないようだった。

開けた扉から差した光が、朝凧の影をくすんだ赤の絨毯に落とす。

日の光が微かに届く先で、栗色の柔らかそうな髪が長椅子の端に見えた。

「あ！良かった！フユさ……」

寝そべったフユに朝凧が声をかける。

返事はない。

「……」

上から覗き込むと、フユは瞳を閉じていた。

寝て……ます……！！

「フ……フユさん、すみません、起きてください、……あの、」

肩に手を置いて軽く揺さぶる。

「フユさん、」

「……ん……、」

微睡むように声を漏らしたフユの仕草は、どこか幼い子どものようだった。

うわあ、カワイイです……！！

「……だれ……乱火………？」

フユさん、寝ぼけてます……

「いえ、あの、」

「オマエ、彼岸に帰るのか……」

夢と現実の間で、フユがうとうとと呟く。

「あの……、」

「戦うのか…？」

小さく掠れた声に、不思議と切羽詰まった空気を感じて朝凧が目を見開く。

「どうして…」

寝ぼけていると片付けるには、それは少し痛々しすぎた。

「なあ…、」

押し殺した感情が、行き場無く滲んでしまったような。

「嫌だ……」

完全に覚醒していないけれど、完全な夢の中でもない。

左手で瞳を隠したフユが泣いていたのかどうか、朝凧には分からない。

「あの…フユさん……すみません、朝凧です」

とにかく連れ戻さなければいけない。朝凧に過ったのはそれだった。

なにか…様子が…

余りにも反応が悪いフユに不安を覚える。

肩で息をしているその呼吸のリズムが不規則だ。

「もしかして熱が…？」

彼岸の使いは人間界の温度は分からない。

だから当然、フユの額に触れても熱いのかどうかは判断出来ない。

「…早く、乱火さんたちと合流しましょう！」

一刻も早く連れ戻したいと、朝凧の感情が揺れる。

たとえ連れ戻す先が、彼岸の使いである自分達の元だということが、間違いであつたとしても。

朝凧の目に、フユが今にも切れそうな頼りない細い糸で、やっとこの場所に繋ぎ止められているように映る。

数時間前に見たフユの挑発的な笑みは、張り詰めた雰囲気纏ってはいたが凜として強かった。

あの時不快そうに歪めた表情から窺えたのは、苛立であつて孤独で

はなかった。

その後のポーカーフェイスから読み解けたのは、誰も立ち入れない領域の存在だった。

不思議と詩月に似た存在感を感じた。

けれどそれはどれも、「弱さ」に結びつくものではなかった。

それなのに今日の前に俯せたフユは、大切に扱わなければ壊れてしまいそうな心許なさがある。

フユは全てを拒絶しているのではない。

全てを拒絶『しよう』としているのだ。

唐突に何か核心に触れた気がして、朝風はかける言葉を失う。

「合流は、不可能」

気配を感じる間もなく、出し抜けに沈黙を引き裂く声が聞こえた。

### 三十三、彼はここにいる

朝凧が上げた視線の先で、教会の入り口を黒い影が塞いでいた。

「誰です!？」

黒い髪、黒い服、暗い眼差し。その女の手には鈍く光る槍のような決して新しくはない、剥き出しの凶器が握られている。

「彼岸の最上層衛隊、黄昏だ」たそがれ

低く表情のない声が端的に答える。

「彼岸の最上層の決定を伝えるぞ」

ぐつと構えた朝凧を気にする素振りもなく、淡々と続く言葉。

「ハル、ナツメ、フユ、以上三名を直ちに抹殺せよ」

朝凧の視界には、ぐつたりと力無く俯せたフユ。

「朝凧、それを渡せ」

フユの上下する肩で分かる、苦しそうで、不規則な呼吸。

こんなに傷付いているのに。

「お断りします!フユさんは『それ』じゃない!」

こんな結果にしてしまったのは、他でもない彼岸自身。

「あなた最低です」

抹殺…

何の解決にもならない。

「ならばお前も反逆者と見なす。“反逆者も消せ”。それも決定の一つだが構わないな？」

彼岸には始めから、解決しようなんて気すらない。

「全部…、なかったことにするつもりですか…」

「お前は私を倒せない。それは理解しているらしいな。ならばもう一度言っぞ」

何度も聞きたい言葉じゃない。

「それを渡せ」

この人は絶対に間違っている。

「…お断りします」

「そうか。ならば消すしかないな」

戦うまでもない戦いだ。

朝凧は弱い。

相手は彼岸の際上層衛隊。彼岸の上層部を護衛するために組織された一員。

戦闘能力上位ランクの選りすぐり。

公に行動するのを見たことがなかったから、その存在が本当にあるのかさえ疑問だった。

だけど暗黙の内に。

いままでもこうやって、彼岸の綻びを無理矢理繕って、馬鹿げた辻褃合わせをしてきたのだろうか。

「先手必勝です！こちらからいきます！！」

朝凧は勝てない。

結果は知っている。

「えい！」

朝風の手の動きに合わせて、丸い物体が実体化する。  
棘に覆われた野球ボールほどの大きさの卵。数えきれない量のそれを次々に黄昏に投げ付ける。

特に避ける様子もなく、黄昏はその卵を見つめる。

これほど殺傷能力のない攻撃もなかなか無い。

黄昏の足下ぎりぎりに落ちたそれにパキッと僅かなヒビが入って、白い煙が立ち上がる。

黄昏にその気があれば、やすやすと踏みつぶされそうな位置で孵ったそれは、むくりと確実に生命体であることを主張して立ち上がる。目や口は付いているが、体外器官の境目が余りにも曖昧で、総合的にはアメーバに似ていた。  
アメーバが口を開く。

「アホー」

「……」

黄昏の指先がぴくりと動く。

「アホー」

「アホー」

「アホー」

次々と孵ったアメーバが、もれなく黄昏に向かって合唱する。

「……アホー」

ちなみに朝風のこの術は、対戦相手に物理的なダメージは一切与えない。

かろうじて与えるものがあるとすれば、若干精神面をイラツとさせるくらいだ。

言う間でもないが、朝風の弱さはこの、術のセレクトの絶望的なセンスの無さにある。

「お前は個人的にも消す……!!!」

元々戦闘を考慮に入れて来た黄昏のモチベーションをより一層助長させ、より一層不利になった朝風に、それはもちろん自ら招いた不利だが、容赦ない集中砲火が浴びせられる。

「キヤー!!!逆効果でした!!!!」

当然加減などあるはずもなく、彼岸の弾幕が朝風とフユを襲った。爆音が二人を包む。

際どいところで最低限の常識力だけは発揮した朝風がバリアを張るが、力の差が明白なこの戦闘ではそれも大した時間稼ぎにならないだろう。

どっ……どうしましょう。私のバリアにも限界があります……!せめてフユさんだけでも逃が……

朝風がそこまで思考したところで、フユの手が朝風の腕を掴んだ。

「オイ……」

心底うんざりした顔をして、フユが気怠そうに起き上がる。

「フユさん!!気が付いたんですか!？」

「……当たり前だ」

この爆音と振動だ。

「何やってんだテメーこんなところで。早く逃げろよ」

ごく自然な調子で、取り立ててたじろぐ風でもなくフユは言う。

「あ、ハイ逃げましょう!!フユさん歩けますか!？」

くしゃりと自分の髪を掻き混ぜたフユの振る舞いは、この状況の中にあって些細な日常の一幕のようなようだ。

「あー…」

欠伸を噛殺す程度の無関心さでフユは呟く。

「俺はいいや…頭いてーし、動きたくねーから」

「え…」

起き上がったとは言っても、椅子に座った状態のフユを朝凧は見下ろす形でいたから、俯いたまま言葉を繋がれてはそのフユがどんな表情をしているのか窺い知ることとは出来ない。

「もう、いいから」

フユから静かに零れる言葉が、朝凧の鼓膜を打つ。

「だから、もう、戦うなよ」

その響きは強さとも弱さとも違う次元で放たれた。

「許すから」



## 三十四、始まりの場所

「許すから……」

代わりに解放してくれ。

この世界から……

フユに逃げる意志がないと悟った朝凧が青ざめる。

「何…、言ってるんです！一緒に来て下さい！」

フユさん。

一緒に どうか、

諦めたりしないで

「戦いましょう！フユさん！！」

朝凧がそう叫んだ瞬間、全てを投げ出していたいたようなフユが突発的に顔を上げた。

「ダメだ！！」

朝凧に確実に焦点を合わせて、その目に水の膜が張る。

「やめろよ…、戦ったら、その答えは……！！」

戦う気にすらなれないほど絶望してるとか、そんな話じゃない…  
そうじゃない。

熱のせいだ…こんなこと。

「答え…？」

問い返す朝凧からフユの目が逸れる。

どうして、いつもいつとも言えないことばかり抱えて。

ぐつと奥歯を噛んだフユが小さく頭を振る。

なんでもない。そう言いたげに。

そうだ、こんなこと、

「何でもねえ。悪い」

止まない爆音。立ち上がった拍子にフユの視界がぐらりと揺れる。

きつと熱のせいだ。

支えようと出された朝凧の手を静かに払う。

傷付けたくない。傷付きたくもない。

「逃げよう」

何か言おうとした朝凧をそう言って遮る。

何で出会ったんだ。

『死神もキリストに祈るのか』  
始まりはこの教会。

キリストなんか、これっぽっちも信じてないくせに。俺も、アイツも。

『変な話だな』

埃っぽい空気の中で、背徳めいた茶髪と、吐き出された紫煙と、右手に挟まれた煙草。乱火の後ろ姿。全部馬鹿げていた。何もかも全てが。

乱火、偶然じゃなかったんだよ。

何で俺は声かけたんだ。アイツに。

振り向いた乱火の驚いた表情。  
面白い顔をしてた。

なあ、俺は知ってたんだ。訝しげに俺を観察したお前が、ただの一つも悪くないこと。  
あの時に許してれば良かった。

「あ、…フユさん…もうバリアが…」  
朝風の声がフユを現実に取り引きもどす。  
目眩に気付かないフリをするくらい、訳ない。今は無力じゃない。  
この女一人くらい護れる。

「分かってる。後ろにいる」

もう、後戻り出来ない。

### 三十五、絡んだ鎖は解けない

私が考えていたよりも、もつとずっと大きな何かが動いている。  
ハルの元へ引き返す詩月の胸中に、ざわりとした不快な予感が沸き  
上がる。

何かが動いている…

それ以上考えない方が良くとも言うように、その先の思考は一向  
に進まない。

ハル。

ナツメ。

フユ。

走っても全く進んでいる気がしない。

無事でいて…

脳裏に過る、姿勢の良いハルの立ち姿。ナツメの子どもらしくない  
表情。伶俐なフユの瞳。彼岸の水の映像。

何かが…

里雪の金の髪。華夜の挑発的な笑み。桜の見下ろすような余裕。  
動いて…

朝風の華やかな声。乱火の呟き。

大きな、何かが。

砂都の言葉。

テトリス。

赤いピースがフラッシュバックした瞬間、ぞっとした。

動かされている…

大きな、何かに

取り違い。

くしゃくしゃの紙切れ。

回帰の契約。

シユリ。

ホタル。

戦い。

先見の書。

上手く考えることが出来ない。

『余計な事考えるな』

いつか聞いた、里雪の噛殺するような一言が鮮明に甦る。

傷付かないために、『考えない』という選択肢がある。

手を下す自分を傍観して、そもそも始めから罪など存在していないかのように、振舞う。

ハルは死に、チアキは生き返り、運命は元通り。一件落着。

『無神論者は辛いね。自分の存在を認められない』

華夜はそう言った。

神にも悪魔にも忠誠は誓わない。そうやって飄々と生きていた彼の、皮肉めいた台詞。

何かが矛盾しているような気がするのに、どこに間違いがあるのかは分からない。

『私は消えない。あなたの力じゃね』

桜の口調はいつも通りだったはずなのに。

どうして不自然に感じるのだろう。

『思ったより、根が深い戦いらしいな』  
眉間に皺を寄せた乱火の横顔。  
それから。

『クソ、…お前ら面倒くさい』

文句と裏腹に、微かな迷いも感じさせなかったフユの、華奢な背中。

急がなきゃ。

走って、走って、走って。

そうしなければ、答えも何もない。

ハル。

たぶん、私は未来に裏切られる。それでも行くから。

たぶん私は肝心なことを知らない。

走って。

見えるままが、全てじゃない。

### 三十六、けれどすべては終着する

金の髪が、ハルの目の前でふわりと揺れる。  
無音。

上がる白い煙と、はらはらと落ちる白い破片。

里雪と対峙していた男が血まみれで倒れている。

男を静かに見下ろす里雪には、動揺の一つも無い。

この空間はまだ生きてる。

視界は白の景色のまま、ハルの家に戻る気配はない。

かろうじて上下する胸の動きで、倒れた男の肺がまだ機能していると知れる。

まだ息があるか。

攻撃をしかけようとした刹那、ハルがそれを否定する声を上げた。

あれに少し気を取られた。

二度手間になったただけだ。

里雪は一步踏み出す。

バチツと光を翳す。とどめを刺すつもりだった。

「待…待って！」

後方でほとんど放心状態になっていたはずのハルが、思いがけない強い力で里雪の腕を掴んだ。

「あの…やめてください。もう…、まだきつと…助かるから…殺さないで、こんなことしないで」

里雪が振りほどかなかったのは、ハルの手が震えていたからだ。

小さく息をついて、ゴーグルを外す。

潔癖。

「…仲間なんじゃないんですか…、あなたと…あの人は同じ」  
同じ。

「死神」

振り返り、ぱつりと零れた里雪の単語に、ハルの手がはっと緩む。  
振りほどく間でもない。

「あなたがもし俺たちに何か期待してるんなら、それは馬鹿げた勘違いだ」

モラルもルールも、同じラインには存在しない。

「……いいえ、」

一度離れた腕を再び掴んだハルの手は、初めより確実に強い意志がこもっていた。

「いいえ！私はそうは思いません！きつと違う…、」

真っ直ぐに澄んだ声が、里雪を引き止める。

「あなたも詩月さんも死神じゃない！！」

突然の風のように、その言葉は里雪の足を止める。  
他の、どんな言葉より強く。

動揺するな。

思い出すことを封じていた過去。彼岸と人間界の挟間に、立ちすくんだ詩月の後ろ姿。

気配には気付いていたはずなのに、近付いても振り向かなかった。

感情を表に出さない女だった。

じつと世界を観察しているような目をしていた。

否定もしない。肯定もしない。周りには染まらない。

強さと危うさを合わせ持っていた。

『手を下さない死神は、ゴミ以下かしら』



初めて聞いた酷く頼りない声。

随分昔の話だ。

今迷ったら殺られる。

『殺さない死神は、死神じゃねえよ』

かつて他でもない里雪自身が口にした言葉。

詩月の自問自答を、ずっと隣で見てきた。

それを間違いだと言いたくはなかった。

『でも』

いちいち傷付いていく誠実さは、結局自分を苦しめるだけだと知っていた。

『だからって他の何かになれる訳じゃないだろ』

ふっと俯いた詩月の苦笑がやたらと印象的だった。

駄目だ。

『それでも殺したくないの。あなたには下らなく見えるかもね』

こいつはこの先もきつと汚れないんだと、漠然と思った。

『嫌なら辞めればいいんじゃない？』

もしあの時そう言わなかったとしても、ずっと変わらずに。

『でもこのチームのリーダーはあなたよ』

『リーダーのメンツとか考えるんだ、詩月』

『意見が聞きたかっただけよ。だけどやっぱり……、そうね、』

思い出すな。

『私もあなたも死神だもの。仕方ないわ』

あの時。

『詩月』

『今の忘れて。大丈夫よ。ちゃんとやるわ』  
ただ純粹に、綺麗だと思った。

ぎりぎりの場所でも、振れないように立とうとしている姿が。

『詩月、そうじゃない』

だから、このまま。

『辞めよう』

そんなに意外だったかと聞きたくなるほど無防備に驚いた目が、ま  
っすぐこちらを見ていた。

思い出さないようにしていた、何か。

浅はかな幻想だったとしても、そのまま。

瞬間、無意識にハルに向き直ろうとした里雪の背中に、ドッと鋭い  
衝撃が走った。

### 三十七、手紙の導く先へ

何もかもが幻想であつても  
春になれば

翻り咲き綻ぶ  
桜吹雪

月夜に乱れ舞う  
失つた時を追つて

過ぎ去つた映画だつた  
そうやって

日ごとと思ひ出は増える

泣いてみるのも洒落た一幕

風流に霞むひとひら  
情緒に揺れて少し、弱くなり過ぎたかな

春になれば翻り咲き綻ぶ桜吹雪  
世界の終わりまでいざなつてくれ  
華やかな祭りの如く  
何度でも酔いしれる  
幻想で構わない

ひとひら

月夜に解けていく  
失つた記憶

馬鹿げた台本に沿って踊る  
君は美しい

幻を幻と呼べない君は

誰にも聞こえない声で叫ぶ

幻を幻と知っている君は

天の邪鬼

今となつては

己の心の在り処も見えない

幻想を幸福と呼んで一興

儚い命

艶やかに染めたい

沈黙の水面に石を投げ

崩れていく視界を讃えよ

さあ

終着に向かって

進め

二度と

振り返ることなく

鮮やかな赤が散る。

ハルの肩にどさりと倒れ込んだ里雪の背中に、細身の長い刀が付き刺さっていた。

「ハッ、…クソ…ッ、しくじった……ッ」

里雪が呻いた言葉に反応するように、血が流れ出る。

「っ、…う…、」

どくどくと溢れる血が、里雪を支えたハルの柔らかな服に滲んでいく。

「隙だらけだ。里雪。貴様らしくもない」

里雪の様子など意に介さない涼しい声が、鋭くハルの耳を打った。冷ややかに刀を何本も構えた女が、こちらを見ている。

「…全く、うちのアホは遊びすぎだな。このフィールドが生きているから、まだ辛うじて意識はあるようだが」

苛々と零された言葉は、里雪の攻撃に倒された男のことを言っているようだ。

一息ついて女は続ける。

「挨拶が遅れたな、ハル。彼岸の最上層衛隊、平たく言うところの彼岸の戦闘要員、椿<sup>つばき</sup>だ」

返す言葉が見つからずハルが見つめる先で、椿が白々と言い放つ。

「名前は覚えなくていい。どの道先のない命だからな」

それを聞いた直後に、ハルの腕の中で、支えた里雪の肩が微かに強張った。

「こんな事の為に…。里雪も馬鹿な男だ。死神は死神らしくしていれば良いものを」

「…、」

俯いた里雪の唇が、自嘲するように弧を描く。

「望めば“彼岸最上層衛隊”の“最強”も手に出来る男だったというのに、惜しい話だ」

自力で自分の体を支えるように身を起こした里雪が笑う。

「ハ、…惜しいもんか…、最上層衛隊の“最強”…、は、」

そこで一度息を止めて、里雪はぐつと拳に力を入れた。その瞬間ドガツと地面が砕けて獣が現れ、椿を押しつぶそうと襲いかかる。ズタズタな状態で攻撃を仕掛ける里雪にハルは声をかけることも出来ない。ただその傷付いた背中と裏腹に、はっとするほど優しい、落ち着いた囁きを聞いた。

「世界のあらゆるものを……破壊するだけだ……」

### 三十八、正しい事が正解じゃない

「まだ力が使えるのか。この力…完全に宝の持ち腐れだ」

シールドらしきものを張つても、獣の予測できない動きのせいでじわじわと切り傷が増えていく椿が吐き捨てる。

「引くも戦法か…里雪を消せないのは腹が立つが…。私の任務はこの間抜けの回収だ」

酷い不協和音の鳴き声を撒き散らして荒れ狂う獣。椿を攻撃しようとしているが、同時に獣自身も何かから逃れようとしているかのようだ。

「…いずれお前の相手は適任者が選ばれるだろう」

椿がそう言い残して倒れていた男ごと姿を消した瞬間、獣も消え、ただ闇雲に白が広がっていた景色はハルの家に戻った。

「あ…、家が…」

そんな僅かの安堵も、負傷した里雪がどさりと倒れる音で瞬時に飛散してしまう。

駆け寄ったハルの足下に血溜まりが留まる事なく広がっていく。

『やめて』

「私が…、あんなこと言ったから」

あの言葉で、里雪が一瞬躊躇ったのをハルは確かに見た。そして恐らく、それがなければ結果はこうではなかった。

「どうしよう…詩月さ……」

「ハル！どいて！」

「詩月さ…」

駆け込んできた詩月に押しのけられるようにしてハルは里雪の側を

離れた。

「里雪！里雪、里雪！」

返事の無い里雪を下手に揺する事も出来ず、顔面蒼白になって荒げる詩月の声には、どう差し引いても意識があるかどうか確認する以上の感情が込められていた。

「里雪！り……」

「っ……るさい……」

「里ゆ……」

「名前……、呼びすぎ……、っ……死んでねえよ、バカヤロ……」

微かに意識を浮上させたらしい里雪が億劫そうに答えるが、その間も血は止まる事なく流れ出ていく。

「お前が護りたがってた人間には……一つの……、傷も、付いてねえよ」

ハルの目から涙が零れる。

「早くそいつを連れてけ、詩月」

里雪ははつきりとそう言った。

「ここは場所が割れてる」

「行け」

「……り……」

詩月の表情が揺れる。

「なあ……、知らないなんて言っなよ」

ぴしゃりと『行け』と言い放った調子を押し殺して、まるで宿めるように里雪は紡ぐ。

「全てが上手くいく戦いなんて……、」

これは、仕方のないことだと。

「どこにもない」



だから早く。

ずっと眠った状態で倒れていたナツメを抱きかかえて、詩月は反対の手でハルの腕を掴む。

「っ、詩月さん！」

進もうとする詩月にハルが声をあげる。

「待って！詩月さん！！」

あの流血で置き捨てて行って助かる訳が無い。

「詩月さん！！嫌だ……置いてきたくない！詩月さん！ねえ、大切な人なんでしょう！？」

詩月だってそれに気付かない訳じゃないだろう。

「詩月さん！！！」

今進んだら二度と。

「詩月さん！離して、しづ……」

「大切だから……、行くの」

迷ったら、全部嘘になってしまうから。

「ハル、何も言わないで。マトモじゃないことくらい……私にだって分かってる……」

引かれる手のままに、詩月の後ろ姿を追って行く。

ハルには、その背中がどうしようもなく哀しく見えた。

「見事な一突き。ずいぶん派手にやられたわね」

里雪の血の池の中に、桜が屈みこむ。

もう意識の無い里雪に意味ありげな思案の目を向ける。

「詩月も馬鹿だけど……」

ぐったりと動かない体。

「あなたも相当馬鹿よ、里雪くん」

### 三十九、君の望むままに

この教会に慈愛に満ちた女神はいない。  
今ここにいるのは死神。

希望も祈りもない。

黒服の女、黄昏が鈍く光る凶器を振り回す。  
躊躇いなどない。照準はフユ。

救済はない。

荒い風圧が、微笑する女神像を襲う。

？女神の資格を失った女神だ。

些細な感傷がフユの思考を掻き乱す。

「フユさん！！」

朝風の声。

？『死神もキリストに祈るのか。変な話だな』

？『祈ってねーよ。救われたいとも思ってたねえ』

乱火と交わした言葉の記憶。

フユは刃を向ける黄昏の襟元をぐっと掴んで、振払う代わりに引き寄せた。

「あの時出会ったのが…乱火じゃなくてあんたみたいな奴だったら…、」

手遅れだと知っているけど。

「今迷うことなんて、無かったのに…」  
言わずにいられない。

？『世界が壊れりゃいいと思ってるんだ』

乱火はそう言った。とても乾いた口調で。

投げやりな無防備さと気怠さに、どこか自分と似た空気を感じた。

認め合える予感なら、多分この時に、もうあったんだ。

？『丁度いいな。俺もだ』

けれど、そう言って微かな予感を自ら打ち消した。

？『お前達を破滅させたいと思ってた。ずっと』

ただこのやり切れなさを向ける相手を探していた。心中でも良かった。

どうせ浮き世を謳歌する気持ちなんて残っちゃいない。  
挟り取られた心の分、彼岸の世界もズタズタにして…。

？『こっちはお前ら彼岸の使いのせいで、今までずいぶん泣かされ  
たんだぜ。報いるよ』

見開かれた乱火の目が動揺を物語ってた。

『彼岸の使い。誰にも知られてないと思ったか？』

凶星だと顔に書いてある。

『自分達だけが特別だとも思ってたかよ？じゃあさっきの挨拶は  
？』

？『死神』も、キリストに祈るのか。

『タチの悪いジョークだとも?』

おめでたい。その勝手な思い込みで、気ままに人狩りか。

でも乱火。お前は違ってたんだろ。

だからこんな廃墟で気怠くサボってた。永遠に彼岸には戻らないつもりで。

『なあお前の力…、俺に渡せよ。もう要らないんだろ』

丁度良い奴に出会ったと思ってた。あの時は。

乱火は彼岸に愛着が無かったし、俺はそれを壊したかった。要らない力なら俺が使う。

拍子抜けするくらいあっさり力の譲渡を承諾した乱火は、おもむろに立ち上がって手近なステンドグラスを割った。

『血の魔法陣が必要なんだ』

ガラスの破片で深く切ったのだろう、赤く染まる手から雫が落ちた。振り向きもせず説明した声はもう乾いていなかった。静かで穏やかな声だった。

力の譲渡はあつけない契約だ。

リスクがあるのは差し出す方だけで、受け取る方は黙って立っていれば良い。

乱火の血で床に魔法陣が描かれていくのを、突っ立って見下ろす。促されるままその魔法陣の上に移動しても、消耗していくのは乱火だけ。

ゆっくり、不思議と温かい感覚になる。一方でぐったりしていく乱火を眺めていた。

？このままコイツが死んでいったって。

ふと微かに震える赤い手に触れたのは、何かの気の迷いだっと思う。

自分よりはるかに低い温度にぎょっとした。

『おい、大丈夫かよ』

咄嗟に呼びかけても反応がない。

『おい、』

まさか死んではいないだろうが、焦りを感じて手を取っても、振払う力も残っていないらしかった。

『おい、死ぬなよ？』

そう言うどぐったりしていた表情が少し緩んで、唇が微かに弧を描いた。

ガラスで切った外傷よりも力を失った不安定さで消耗しているようだ。

『バカだな。そんなにしんどいなら止めときゃいいのに』

くれと言った手前、勝手な言い分だが本心だった。病院に担ぎこまなきゃいけない事態ではないが、さすがにこのまま放置することも出来ないので隣に胡座をかいて一人愚痴る。

返事の代わりに弱々しく手を握り返された。その瞬間、何も始まっていなかったのに後悔に似た感情が過った。

あんな風に出会ったりしなければ良かった。  
今は心から思う。

彼岸の力を無くして、乱火がどうするつもりだったのか知らない。

『行くと来ないならここにいれば』

多少の罪悪感があった。でも、だからだけで、ああ言った訳じゃない。

打算。乱火がいれば、彼岸の奴らは必ず近付いてくる。破壊の取っ掛かりになれば、いい。

? 『フユ』

そんな風に思ってたのに。

風の気持ちいい春だった。乱火が居るのに慣れ切っていた。

あの日ソファで目を閉じていたけれど、眠っていた訳じゃなかった。

? 『お前の望みに俺は最後まで付き合うから』

不意打ちだ。

俺が負った傷に、それで報いたつもりなのかよ。乱火。

余計に挟れていくんだ。

わかんねーのかよ。

ムカツク。

たぶん。

認め合えるけど分かり合えない。

今視界に映るのは黒服の殺意。黄昏という名の女。あの時出会ったのが乱火じゃなくてコイツだったら、楽だったのに。コイツなら、何の躊躇いも無く…。

ポケットからガラスの小瓶を出す。

乱火から奪った力と小瓶の液体を反応させるように黄昏に投げ付ける。

濁った爆音と共に青白い閃光が走る。その後立ちこめる濃い白の煙。直前に見た黄昏のハツとした顔。

爆音と閃光で聴覚と視覚が馬鹿になっているが今更関係ない。

煙が晴れてもそこにいるのはフユと朝凧だけなのだから。

朝凧が青ざめる。

「最上層衛隊を…焼き…尽くした…？」

「何してるんだ。早く行くぞ」

「あ…、はい…！！」

フユに気圧される朝凧。

もう、全部が戻れない。



## 四十、忒分の忒は忒

焼けこげた跡と。廃墟をゆるりと撫でて消えていく煙。  
朝凧の視界に映るのは、静かに立ち上がるフユの姿だけ。  
数秒前の爆音と白煙が黒服の女を消し去った。

彼岸の使いが、人間に消された？

それは朝凧にとって、あまりに衝撃的だった。  
いくら今のフユが乱火の力を持っているとは言え、相手は最上層衛  
隊、戦闘を主に任務を果たす彼岸屈指の精鋭だった。フユは、それ  
を跡形もなく消したのだ。  
フユの戦闘センスの問題か、それとも詩月が頼ろうとした乱火の力  
がそれ程までに強いのか。

「こ……こっちはです」

朝凧はフユと目を合わせるのを避けるように背を向けた。詩月達の  
ところへ行かなければならない。そしてそれ以上に、この息の詰ま  
るような廃墟から一刻も早く抜け出したかった。この闇も光も淘汰  
した、いにしえの教会から。

一歩踏み出すと、どさりと背後で音がした。

振り向くとフユが蒼白で床に膝を付いている。

「フユさん!!」

「は…、この有り様だ。やってらんねえ…」

「大丈夫ですか!？」

「大丈夫な訳あるか。俺は彼岸の使いじゃねーんだ」

「え…」

フユは息を殺すように整えながら、同時に感情も殺すように言う。

「力を使えば跳ね返りがある。薬の副作用みたいなもんだ」

一つのリスクも無く世界が回る訳が無い。

「それ、…乱火さんは…」

「言うなよ」

フユはぴしゃりと朝風の問いを遮る。

「俺が欲しくて奪った力だ。乱火のせいじゃない」  
欲しくて奪った。

「？それって…」

「トロそうなくせに察しはいいな。そうだよ、俺は彼岸と戦うつもりだった」

自分の全部を投げ打って、刺し違えてでも。

「だから彼岸が俺を消そうとするのは、あながち間違いない。むしろ正しいくらいだ。あんたは俺を置いていつて良いんだよ」

ふと二人の目が合う。

「きつとそれが一番賢明な方法だ」

彼岸には、今の自分の存在は厄介だろう。刺し違えてでも。いつまたそう思わないとも限らない。フユの思考は朝風よりも余程冷静だ。朝風の瞳が少し揺れて、下に逸れる。

「…すみません…。あの…」

不安げに躊躇う間があつて、それでも意を決したように朝風は口を開いた。

「言っている事が難しくて、ちょっと意味がわかりません」

絶妙の間の悪さだ。

「いや……。もういい」

俺はこんなアホに庇われたのか。

心配そうに自分を窺う朝風を前にして、フユは切実に思った。  
でも彼岸にこんな奴がいるから、怒りじゃない感情も動くのかもしれない。

彼岸に対する相反する感情が内在するのは苦痛だけれど、仕方ない。乱火のことも、今目の前にいる朝風のことも、きつと自分は嫌いはなれないのだろう。

朝風が上げた目と再び視線がぶつかって、フユは苦笑した。

「と、とにかく急ぎましょう!!」

突然至近距離で零れたフユの笑みに朝凧の頬がかあつと染まる。場を無理矢理繋げようとあたふたとフユを急き立てる。

「あー、そうだな。俺ももうあんま立つてられねえ…、サイアク」  
すでに立っているのがやつとだが、時間が経てば経つほど辛くなる。良い加減腹をくくって朝凧の跡を付いていくべきかもしれない。重たげに体を起こすフユの前で朝凧がそわそわと聞く。

「あ、あの、手をお貸ししましょうか!？」

手、と言いながらその待機姿勢は明らかにおんぶを想定している。

「…」

「あつ、遠慮なさらなくて良いですよ」

花のように笑う、朝凧。姿勢は前屈み。

遠慮ではない。断じて。

「フユさん、どこからでも」

「…」

「どうぞ!」

「無い。無理。有り得ない。俺歩けるし」

## 四十一、小休止

境界の入り口を出てすぐのところ。

「みーちゃん」

朝風がそう言うとき強い風が吹いた。

「乱火さんのところに連れて行ってね」

ガサツと足下の雑草を荒らして姿を現した大蛇。恐らく10メートル弱。派手な黄色をベースに、深紅の模様を持つ。

「……おい、みーちゃんって、……」

フユは嫌な予感的中しないことを祈りながら？望みが薄いとは知りつつ？聞いた。

「あつ、この子です！みーちゃん」

「……その蛇か」

「はい！」

朝風のからりと笑う表情に悪意はひとかけらも無い。

「……そいつが案内してくれるって？」

「はい！みーちゃんの第六感はずばりですよ！」

第六感か。仮に彼岸の蛇の第六感が百発百中だったとしても、だ。

「俺たちはそいつの後を付いていくのか？」

この教会は廃墟だから良いとして、まさか乱火のところへ辿り着くまでに誰とも出会わないなんて保証はない。

「一応聞くが、そいつは普通の人間には見えないんだろうな？」

「えっ、あつ！」

？見えるのかよ。

「すっ……すみません！」

「見えるんだな」

「はい」

「なんでだよ……お前達の姿は誰にも見えないのに……」

フユは深い溜め息をつく。厄介なことこの上ない。

「すみません。飼い主の私の力が到らないばかりに」  
しゅんとする朝凧。

「?」たく、境目がわかんねえ。さっきの奴の攻撃だつて簡単に教会を破壊したし。見えないけど殺傷能力はあるってふざけた話だな...。お前達どこまで人間界に関われるんだよ」

「すみません。私もよく知らないんです。今までこんな風に関わったことなんてありませんでしたし...」

ますますしゅんとする朝凧。

思案しかけて、フユは匙を投げた。

「まあいいや、考えたって仕方ない。さつさと乱火たちと合流しようぜ」

「え、でもみーちゃんは、」

怪訝そうな朝凧にフユが気怠い一瞥を加える。

「なあ、少しはこつちの世界のルールを勉強してもいいんじゃないかね?」

そう言つて、ジーンズのポケットから青い携帯を取り出した。

## 四十二、憂鬱の実情

「今どこにいる」

フユが携帯に吹き込んだ第一声。朝風にはフユの声しか聞こえないが、恐らく電話の向こうでは乱火が何事か言っているに違いない。

「……ああ当然だろ。つかお前らが迎えに寄越した女、むしろ足手まといなんだけど。……そう。朝風。……ああ。……ん、どこ？白羽？ふうん。わかった。……行く。要らねえ。……はあ？……、知ってるよ馬鹿」

通話はそれで終了したが、足手まといと言われた朝風は自覚があるだけにコメントのしようがない。

「ホテルにいるらしい。どこに隠れたって大して変わらないと思うけど……呑気だな、あいつは」

淡々とした調子だが、今のやりとりで戦闘直後の切羽詰まった空気が少し和らいだらしい。教会にいる間中フユを取り巻いていたピリリとした気配がふわりと消えた。

乱火はそれだけ『フユ』に近いところにいるのだ。

『彼岸』ではなく。

「ここから30分くらいだな。オイ蛇は置いていけよ」

「あ、はい！ごめんねみーちゃん。彼岸に帰っててね」  
がさがさつと音がして『みーちゃん』が消えた。

結局フユを迎えに来た朝風がフユに案内される形になって、教会を後にする。

それにしても。

フユの後ろ姿を追いながら朝風は思う。

乱火と電話するフユは淡白で、口調も荒かったけれど。でも親しい相手に向ける甘さが確かにこもっていた。

（たぶんフユさんは乱火さんを信用してる）

「あいつ、電話切る直前にさ、」

特に振り向くでもなくフユが口を開いた。

「『俺の番号知ってたんだな』って言いやがった。心底ホッとしたみたい」

小さな笑いを囃殺す声。

「誰がケータイ渡したと思ってんだよ」

朝風の心臓がどきりと跳ねた。フユは気を許した相手には、こんなに甘い声を出すのだ。

無防備で、優しくからかうような響き。

「あんたも乱火も抜けてる」

聞き逃したくない一心で朝風は耳をすます。音だけに集中していたせいで視界は油断していた。

突然振り向いたフユの表情に息が止まる。

「そういうのが、イイのに。な」

フユは困ったように笑うのだった。

白羽ホテル。特に立地条件が良い訳ではないし豪華でもないが、そこそこ綺麗なホテルだ。教会から電車を二本乗り継いで30分強。愛想は悪くない、けれど客に対して適度に無関心なホテルマンをすり抜けて、乱火の指定した部屋を探す。

ルームナンバー307。

アイボリーのドアに控えめなプレートが付いている。

「乱火さん、朝風です！」

ノックもせずに声を上げる。隣にいるフユは、辿り着いた安堵からか気負いが一気に降りたようで重そうに息を付いた。ガチャリと鍵が外れる音がして乱火と砂都が顔を出す。

朝風の不安げな様子とフユの沈黙を見て乱火の表情が曇った。

「フユ、大丈夫か？」

乱火の手がフユの額に触れる。

「……スゲー熱だな。病院行くか？」

「触んな平気だ」

「どこがだ」

彼岸の使いには人間界の温度はわからない。朝凧は乱火にフユの温度が分かるのを不思議な気持ちで見ていた。

「もういいから寝てろ。こっち」

「だから平気だって、」

ほとんど引きずられていくようなフユを見て朝凧は複雑な気分になる。

「羨ましいの？仲良し」

小声で砂都が朝凧を茶化す。

「えっ、あつ、そういうわけでは……!!」

弾かれたようにこちらでも小声で否定する朝凧。

「そーお？ボクはちよつと羨ましいなあ」

「え……」

「フユのこと好きだもん」

砂都のくるりとした大きな目が、さも残念そうに伏せられる。

「心配したいじゃん」

大げさに溜め息を付いて朝凧を窺う。可愛らしいドールフェイスの効果か、砂都のオーバリアクションにさほどの嫌みはない。ぱあっと顔を赤くした朝凧が小声のまま自白する。

「あの、あの……じ、じは私もフユさんのことが好きなんです……!!」

バレバレだし。と砂都が思ったことなど朝凧が知る由もなく、彼女は同士を得た事実を単純に喜んでいる。

自分の容姿をフルに生かしたピュアスマイルで砂都は朝凧の手を取った。

「そうだったんだ！頑張つてね！応援するよ！」

「さ……砂都さん……!!」

感動に瞳を潤ませる朝凧。

「フユと乱火がどんなにラブラブでも負けちゃダメだよ！朝凧は女の子なんだから、きつとフユも最後は朝凧を選んでくれるよ！でも



あのプライド高そうなフユが乱火に甘えてる時点でほんとにはもう脈ないかもしれないけどね！禁断の恋は燃えるって言うしね！でも頑張ってるね！応援するよ！」

ニコニコ捲し立てる砂都の台詞の危機感に、潤んだ瞳も一気に干上がって朝風は蒼白になる。

おもしろい…。

内心で砂都はそう思っていた。

「フユ、たまには人を頼れよ」

奥の部屋で無理矢理ベッドにフユを座らせた乱火が呟く。

「うるせーよ」

「寝てろ、薬買ってくるから」

離れる乱火の服を、引き止めるようにフユが掴む。

「こんなはずじゃなかったんだ。ごめん乱火」

「…フユ、」

「ごめん。彼岸を壊したいって、俺はずっと言ってたけど」

懺悔に似ていた。教会では言えなかった。教会で言うことじゃなかった。

これは、乱火に言わなきゃいけない？

「俺は間違ってた。間違ってたんだ…」

詩月の使い魔、スズが先頭を歩いていく。スズの後をナツメを抱いた詩月、そしてその後にはハル。彼岸の力が働いているのか、詩月の足取りはナツメを抱きかかえている重みを一切感じさせない。まるで何も持っていないようだ。

「ハル：こんなことに巻き込んで、本当にごめんなさい」

抑揚のない声で詩月が言った。その後ろ姿からは何も読み解けない。……いえ……」

小さく返すハル。他に答えようもない。詩月が『里雪』と呼んだ、血に染まる金髪の青年の残像がハルの頭を過る。

ハルが浴びた里雪の血は、時間が経つと見えなくなった。彼岸の痕跡は人間界にあまり長く留まることは無いのだ。

？行け。

里雪はそう言った。それが何度も何度もハルの耳の奥で再生される。もちろん、詩月の耳の奥でも。

詩月とハルは会話のないまま進んでいく。

辿り着く場所がどこにも無いかのように二人は無言だった。

スズは『白羽ホテル』と書かれた入り口の前で消えた。同時に自動ドアが開く。

「センパイ！」

ロビーで詩月とハルを今や遅しと待っていた？もとい、フユと乱火の側を離れて頭を冷やそうとしていた？朝凧と出会う。

「ハルさん！無事だったんですね！！良かった！」

無事を心から喜ぶ朝凧はハルに抱きつかんばかりの勢いだ。

「センパイも無事で……」

朝凧の言葉を聞いていないような、どこか上の空の詩月。

「センパイ？何かあったんですか？」

詩月はかろうじて返事をしなきゃいけないと思い至る。

「ん…ちよつと、疲れたから。先に休んでいいかしら。悪いけど」  
「…ええ、もちろんそれは…。あ、じゃあナツメ君は私が預かります。これ鍵、女子は308号室です。乱火さんとフユさんは隣の307号室にいますので、何かあったらそちらに。…私達もしばらくしたら戻ります」

「ありがとうございます」

詩月は力無く微笑んで部屋へ向かった。  
あまりの覇気のなさに朝風が動揺する。

「ハルさん…何か…ありましたか」

さつと目を伏せるハル。

「何が…」

ハルは僅かに逡巡して、くつと奥歯を噛み締める。

「ハルさん…」

小さく拳を握りしめて、ハルが口を開く。

「じつは、…」

308。

そっけないルームナンバーの付いたドア。今閉めたばかりのそのドアに背を預けて、詩月はもうこれ以上一步も進めないと思う。

電気も付けない部屋。

暗闇の中でずるずるとしゃがみ込む。

？行け。

いつでも味方でいてくれた里雪は、最後まで味方だった。

「……………」

咽から漏れた声で自分が泣いていることに気付く。

暗い。電気なんて付けたくない。暗いまま。このまま。  
失いたくない物ばかり無くしていく。

里雪

里雪

里雪。

どうして。

悪い予感なら、きっとあつたはずなのに。

この暗闇を引きずって、それでも止まることが出来ない。

？里雪がいつか自分の為に傷付く気がしていた。だから本当は泣く資格なんてない。

それなのにどうして。

「っ……、」

嫌だよ。でも。

？なあ、知らないなんて言うなよ。

音の無い、光りも無い、たった一枚のドアに隔てられた、ホテルの一室。

聞こえないはずの、見えないはずの里雪の残像が、詩月の胸中を埋める。

？全てが上手くいく戦いなんて、どこにも無い。  
どこにも。

甦るのは悲しいほど温かな声。

まだその声は、詩月の背を押そうとする。

立たなきや。

部屋に満たされた闇より黒い、詩月の瞳に意志が宿る。  
後悔は、今じゃない。

「目の前の間違いを迂回しようとして、結局袋小路に迷い込む」  
艶やかな声が歌うように紡がれる。白い手にはまだ血の滴る刀。  
「正しさも間違いもガラクタと一緒に埋もれてるのよ。この世界ではね」

その女の口元には、まるで世界を高見から眺めているような微笑。

「茶番だな」

黒髪の男が言葉を挟んだ。

「ええ」

女と男の目が合う。誘うような、試すような女の目。それをもさらに受け流す、飼い馴らされることの無い男の目。

「その茶番が、全てを創っていくのよ」

その女？桜は、目の前の男？華夜にそう言って、瞳の色を濃くした。

#### 四十四、知らなければ孤独

「なあフユ……」

乱火に背を向けるようにベッドに横になったフユと、やはりフユに背を向けるようにベッドの近くの床に座り込んだ乱火。

煙草を燻らせながら、乱火が零す。

「あのさ……、どれもお前のせいじゃないから」

フユは意識の定まらない浮遊感の中でそれを聞いた。彼岸の力を使った反動で上がった熱は、持続性は無いが高い。

「……」

持て余す体温のそばに他者の気配。

本来は彼岸の使いであるはずの乱火が、フユの方に余分に感情移入している。

「そんなことしたって、何にもならないのに……」

「俺に情でも湧いたかよ」

「マズいな……とフユは思う。」

「バカだな、オマエ……」

拙い言葉。けれどそれしか口に出来ない。

返事をしないまま乱火が煙を肺に入れる。

「バカはお前の方だろ、フユ。」

救いにならない優しさも、気休めにもならない慰めも、取り繕うだけなら必要ない。

儚い沈黙に、言葉にならない感情が溶けていく。

瞳を閉じて意識を手放すフユ。

「狂ってるな、俺も。」

煙草の匂い。今はそれにすら安堵する。

一方、人気のないホテルのロビーのソファを占領しているハル、朝  
凧、砂都。

「金髪の、天使みたいな男の人が、私を庇って…」

ハルがぼつりぼつりと言葉を選んで話す。鋭利な刀を背に受け止めた金髪の男を、記憶の中心に抱きながら。

「金髪の……天使、みたいな……？……それって…」

朝凧の見知る中でその容姿に当てはまるのはただ一人。慣れ合いを好まない反面で、見て見ぬ振りが出来ない甘さを合わせ持った、詩月の同期。ハルがその人物の名を挙げる。

「里雪、さんと」

予想と一致した名に朝凧の背筋が冷える。

「里雪……さん……。まさか…」

「詩月さんが、そう呼んでました」

「そんな…」

里雪が、負けた。最上層衛隊に。

「砂都」

聞き慣れた声にハル、朝凧、砂都が一斉に振り向いた。

「センパイ」

視界に詩月の姿を認めた朝凧が呟く。すらりと立つ詩月に懸念したようなブレはない。

「砂都。私に力を貸して」

詩月はそう言っただけで砂都の正面に屈みこんだ。

「センパイ、あの、」

朝凧の呼びかけには応じず、詩月は射ぬくような視線で砂都を見る。

「最上層衛隊に攻撃されたわ」

ブレないかわり、他の物を寄せつけない。

「里雪はもう戦えない」

視線を合わせる砂都の目が揺れる。

「ここだって別に安全じゃないわ。一時凌ぎよ。砂都お願い。私を風姫に会わせて」

それは故意に押し殺したような口調だった。ぎゅっと握りしめられた詩月の手を、ハルは見つめる。

「抹殺なんて間違ってる。ハルやナツメやフユが私達にどんな風に関わっていたとしても、風姫の予言がどんなに正しくても、最上層衛隊の行動が例え最善だったとしても、私達やハルやナツメやフユの未来に他に選択肢がないなんて、そんなこと絶対に有り得ない。

『誰かを犠牲にして解決』なんて逃げてるだけよ」

詩月は自らの一言一言を確かめるように紡ぐ。

「砂都、あなたに手伝って欲しい。もっと確かなものを、きっと私達は信じられる。だからお願い、力を貸して」

ハルの胸中で、押さえようの無い安堵と、小さな後悔が持ち上がる。今までずっと詩月に気遣われていることを知りながら、ハルは一つも応えようとはしなかった。自分が死んで弟が生き返る。それが体の良い作り話でも構わないと思っていた。気休めでも。それがもしもどうしようもなく馬鹿げた行いでも、一人きりで、自分を殺して消えていく。それで償えるのだと。だから受け入れて流れに身を任せる気でいた。

詩月はハルのそのスタンスを決して否定しなかった。けれど、別の答えを探している。

ハルやナツメやフユの、他の未来の選択肢を。

？私は、一人じゃなかったんだ。

唐突に思い知った現実がハルの視界を滲ませる。

「風姫に会って話を聞いて、今起こっていることをちゃんと知りたいの。じゃなきゃ何も出来ない。風姫の予言はきつと指針になるわ。何をすべきか考えなくちゃ」

詩月の真摯な横顔が、後ろに引くつもりが全くないことを物語って



いた。

「フユを守るかな」

「守りたいのよ」

砂都の問いに短く答えた詩月には、もう止まつもりなど無いのだとハルは思う。

詩月はきつと信じたままに進む。

？でも詩月さんは、

ハルは目を伏せる。

少し間を置いて砂都が「案内する」と呟いた。

けれどほっと微かな息を付いた詩月は誰とも目を合わさない。

？まるで、一人で戦っているみたい。

## 四十五、青色の未来

白を基調としたドーム状の部屋に、白のドレスを着た女が佇んでいる。入り口に背を向けた後ろ姿でも、プラチナブロンドの髪が緩くウェーブを描いて美しい。彼女の傍らに分厚い本が開かれた状態で浮遊している。白紙のそのページの上を、やはり浮遊する羽ペンが動き、青く濡らしていく。その青いインクが記す文字こそ、彼岸の未来の予言。つまりここに浮遊する本が先見の書である。

そして白いドレスの女、彼女が先見の書の番人、風姫。

「あなたは本当にそれで良いのですか、桜……」

入り口へ向き直り、透き通った声で風姫が言った。その視線の先には不敵に微笑する桜の姿がある。

「ええ勿論」

何に動じる様子も無く、桜は笑みを留めたまま続ける。

「現状に問題があるのなら、むしろ聴かせて頂きたいわ。私に取っては何もかもが順調よ。怖いくらいにね」

風姫は少しの間桜を見つめて、ただ一言静かにそうですかと呟いた。桜が苦笑する。

「風姫、あなた考え過ぎよ。訪れる前から後悔なんて馬鹿らしいわ。時は移ろうものよ。たとえ気に入らなくても、」

桜はゆったりと深い息をつく。

「どんな事でも終わりがあるわ」

風姫は桜から目を逸らさなかった。その瞳の奥がそれと気付かないほど僅かに揺れる。目敏い桜は風姫の表情の変化を読み取りながら、敢えてそこに触れはしない。桜は風姫を真つすぐに見据えて諭すように言った。

「いずれ風化するのよ。戦場も楽園も、隔てなくね」

## 四十六、それも齒車

最初に意識に触れたのは、肌に触れる滑らかな布の感触だった。次に嗅ぎ慣れた空気の匂い。目を開けると想像通り、潔癖な白さが暴力的に広がった。神経質なほど白で統一された、彼岸の世界だ。

？生きてる。

これが里雪の漠然とした感想だった。

歓喜も動揺もなく、ただそれだけの事実が事実として里雪の前に立ち現れる。

ゆるゆると開いた紅茶色の瞳。その紅茶は案外冷ややかに自身の生存を受け止めていた。

ハルを庇った戦闘が現実である事は、背中から貫通したらしい刃物の傷の痛みで間違いない。体を起こすとずきりと鋭く痛みが走り、気を失っている間に何者かの手で巻かれたらしい包帯に血が滲んだ。寝具に寝かされている事と、巻かれた包帯で、気絶中の自分の体がそこそこ丁寧に扱われたのだと悟る。治療と呼ぶには荒っぽい、彼岸の使いの治癒力を考慮に入れば、それでも充分釣りがる手当だった。

「上層部のイヌ相手にそのざまか。ずいぶん情け深くなったもんだな」

ふいに記憶にある声が聞こえてはつとする。

「お優しいのは結構だが、下らん戦いで死なれちゃ困る」

いつからそうしていたのか、腕を組んで壁に寄りかかるように立っていた黒髪の男がつまらなさそうに呟いた。

「華夜……！？なんで……」

そこにいるのは、この状況下で真逆の立場に立っているはずの男だ。

この好機に里雪にとどめを刺そうとしても何の不思議もない。いわば敵と称して問題ない男。だが自分の気分次第でどうとでもなるこのチャンスに、華夜は何の興味もなさそうに佇んで、壁に預けた背中を動かす気配もない。そして、

「お前はこの戦いの最後まで頭数に入ってる。あんまり自分を安く扱うな」

手の平を返すような台詞を、やすやすと吐き出した。

「…どういう意味だよ」

予想外の華夜の態度に面食らって里雪が聞き返す。ちらりと一瞥を投じた華夜が再び口を開いた。

「上層部は本格的に動き出したぜ。予言の書を盾に詩月を筆頭にしたら反対勢力も根こそぎ消そうって腹だ。露骨な軍勢を使わないのは単に詩月の戦力を嘗め切っているからにすぎない。事実今の詩月の戦力は絶望的だろ。詩月自身の力を彼岸の水で回復したとして、所詮多勢に無勢。先は見えている。まして人間を守りながらだ。お前が良い例だろう。いずれは全滅だ」

里雪が無言を返すと、いつになく饒舌な華夜が続ける。

「詩月だって馬鹿じゃない。遅かれ早かれ結局は無駄死にだと気付くだろう。だがもう後には戻れない。一步もな。大敗したくないなら防御は捨てて攻めに徹しな」

？忠告、か？

里雪の理解が間違っていないければ、華夜は勝負に駆け引きを持ち込むような性格ではない。頭は切れるが、どちらかと言うと特攻、正面对峙を好むタイプだ。己の恵まれた実力を自覚しているからこそ、気まぐれに戦い、不遜に勝利を手にしていく。その飄々とした華夜が、まるで地ならしをするように助言めいた言葉を吐く。

「敵には非情になれ、俺たちは死神だ」

この華夜に取ってはごく些細な一言が、里雪の神経を逆撫でした。

「ああ、俺たちは死神だ」

傷口が開く愚を冒すとわかっていても、気付いた時には里雪は華夜

に掴み掛かっていた。胸ぐらを掴んで華夜を壁に押し付ける。

「オマエだつて俺の敵だろう、だったらどうして俺を助けた!？」

「なんだよ死にたかったのか？変わった奴だな」

手負いの里雪などハナから相手にしていないという態度で、華夜が見下すように笑う。案の定、里雪の腕の拘束はすぐに緩んだ。開いた傷口から流れる血が、里雪の体を覆う包帯を赤く染め上げていく。「ここで焦ったって何も変わらないぜ里雪。せつかく助けてやった命だ、大事に使い」

ずるずると華夜の足下にへたりこむ里雪に動じる様子も無く、華夜は淡々としている。

「華夜、何を考えてる…」

「さあね。教える義理は無いな」

くつと笑いを含む華夜の声に、里雪が先程から抱いていた疑問が頭をもたげる。

「オマエは…、敵じゃないのか」

増す痛みのでいで碌に問いつめることも出来ない。

「敵だよ。何だよその質問。今更かよ」

華夜は皮肉な笑いを声に湛えたまま、まともに答えるのも馬鹿らしいというようにあしらう。

「ま、思ったより元気そうで安心したぜ。じゃあな里雪」

そう言いながら気さくな素振りで里雪の肩をぽんと叩いて、自分の用はもう済んだとばかりに部屋を出ようと背を向ける。そうして返事のない里雪を背後に、最後の一言を入り口に残していった。

「じゃあな、里雪。戦場で会おう」

## 四十七、未来の照準

「じゃあ行くよ。手を貸して」

砂都がそう言つて、自身の右手を詩月の前に差し出した。

「こう？」

「うん」

詩月がその手を重ねた瞬間、その場にふわりと薄く白い靄がかかる。詩月を風姫の元へ誘う、彼岸の無機質な白い靄。

「朝風、ハルとナツメとフユの事、少しの間、頼むわよ」

ふと顔を上げた詩月が、朝風に向かって言った。

当たり前の事のように。

「はいもちろん！」

朝風も何の疑問もない返事をする。

「ハル、そんな顔しなくても大丈夫よ」

視線を合わさないハルに気付いて詩月が穏やかに宥める。

「いえ、あの…。そうじゃないんです、詩月さん」

躊躇う一呼吸を置いて、ハルは外していた視線を真つすぐに詩月に向けた。

「私も一緒に…、連れて行つて下さい」

ハルの予想外の言葉に、詩月が固まる。

「…え」

聞き返すでもなく声を零した詩月に、ハルは続ける。

「私は今までずっと受け身で…。千秋の事も詩月さんたちの事も私が受け入れればそれで良いんだって、そう思っていました。私が受け入れれば丸く収まつて、誰も傷付かずに済むつて、でもそんなの…、

そんなもの？

「そんなの嘘です、詩月さん。一人でどれだけ背負ったつもりにな

「たつて、やっぱり私は一人じゃなかった」

ハルの言わんとしていることが汲み取れずに、詩月は沈黙を守る。

「私も詩月さんの力にはなれませんか。守ってもらえるのを待っているだけなんて嫌です。私も何か役に立ちたい」

守るのは詩月で、守られるのはハルで。そんな一方的な関係は、きつとどこかおかしい。

「でも、そもそもハルは私達のせいでこんな事に巻き込まれたんだし、だから、そんな事する必要……」

「詩月さん」

堪らず口を開いた詩月をハルが遮った。

「もういいんです。そんな事は」

その言葉ははつきりとした強い調子だった。

「誰のせいとか何のせいとか、そんなのはもう、どうだっていいんですよ」

詩月ははつとする。ハルのそれは、チアキの命と引き換えに自分の命を投げ出すと言った、初めて出会ったあの日と同じ調子なのだ。けれど、絶対的に違う。

今のハルの視線は死地へ向かつてはいない。

「私は何かしたいんです。私や詩月さんに訪れる未来の為に」

未来と呼ぶに相応しい光の一端が、今のハルの前には存在している。

「私が行ったって何が変わるでもないけど、そんな事は私だって充分分かってるつもりです。それでもやっぱりこれは私の問題でもあるし、何か出来る事をしたいんです」

向こうからやってくる結末を待つのではなく、自分の足で進む。それは似ているようで決定的に違う。

「それに私は……」

けれど自ら進むことの出来る足を持っていたとしても、向かう先が光ばかりとは限らない。闇もひとつの形であるのだから。

ハルは凜と立つ詩月を見て思う。

「特に、このひとは。」

「詩月さん、あなたが心配です。力になれませんか」



## 四十八、彼にだけ見えるもの

どこまでも続く白い建物。ここにあるどの建物も、ただ白い事だけが存在意義でもあるかのようにその色を主張している。

どの建物もフユの目にはほとんど同じに見える。白く美しく、狂気を覚えるほどに整然としている。フユはこの無数にある建物の中の一つから外の景色を見ているが、恐らくそこからではなくても、この世界の景色は同じ姿を見せるのだらう。

このままずっとこの風景を眺め続けたら、いずれはこの世界の全てが？今唯一青く色付く空さえも全て？白に侵食され、染め上げられていくのではないだらうか。

この世界は気高くて綺麗だ。そして寂しい。他者と慣れ合う事のできない孤独を、内包している。

？何度目だらう、この夢は。

フユは自問した。

これはいつも見る悪夢だと、夢の中で理解出来るほど何度も見た夢だ。

だからもう、先を見なくても結末を知っている。

？ここはたぶん、彼岸の世界だ。

夢でしか見た事の無いこの白い世界がきつと彼岸なのだと、フユには確信があった。

乱火の力を手にしてから見るようになった、酷い夢。

日を重ねるごとに、同じ夢を見る回数が増えた。

？乱火。

鋭い閃光が視界を塞ぐ。

小学生の時、授業で見た原爆の映像によく似ている。

フコはじつと佇んだまま、それを見ていた。

重たそうな煙が上がって行くさまと。

衝撃波までが目に見えた。

？助からない。誰も。

気高い白も空の青も、何もかもが呑み込まれて行く。

陰という名の衝撃があらゆるものを包んで行く。

そして、思い出したように聞こえてくる地鳴り。

？ああやっぱり、音は光よりも遅いんだな。

そんな素っ気ない思考が、いつもこの夢の最後だった。

「っ、……」

目を覚ますとそこは、ホテルの一室。

暗がりの中で冷えきった指先は毎回のことだが、あまりに見慣れ過ぎた悪夢に、酷く冷静に分析しようとする自分がいる。

？あれを予知夢じゃないって思おうとする方が、無茶だ。

夢を鵜呑みにするなんて、馬鹿らしい。だがあの夢はそんな風に無関心を装えるレベルを越えている。

？乱火の力を奪った弊害か。

？それとも。

「……罰、か」

暗闇の中、フユは諦めたように囁いた。

## 四十九、さよならと言つ代わり

「フユ、そろそろ起き…」

乱火がそう言つてフユを呼びに来たのと、フユが床に自身の血で魔法陣を描き終わったのはほぼ同時だった。

足下の鮮血に乱火が青ざめる。

「フユ、これ…」

「ああ。丁度良かった。そこに立てよ、乱火」

描かれた魔法陣の傍らに散らばるのは割れた花瓶の破片。べつとりとフユのシャツに染みた赤はとても鮮やかだ。フユの右の指先を生々しい血液が伝う。抵抗の痕跡の無いそれらが、彼自らの意志で傷を負ったのだと物語る。

「どうしてだフユ…、何のつもりだよ…」

流れ落ちた血の量を考えると、意外なほどしっかりとしているフユに乱火が問う。するとフユが不意そうに眉をひそめた。

その魔法陣は、出会ったとき乱火がフユの為に描いたのと同じものだ。

つまり、力の所有権を相手に差し出す、彼岸の呪術。

「いいから立てよ。説明しなくなつて分かるだろ」

分からない訳がない。フユがこの魔法陣を描くという事は、せつかく手に入れたその彼岸の力を放棄するという事だ。本来の力の所有者、乱火に全てを返すという事。

「力を返してやる。だから早くアイツ…ナツメっていたつけ、アイツを助けてやれ。俺じゃやり方が分かんねーから。それに」

「フユ…」

乱火の視線を避けるように、床を見つめるフユ。絞り出すように呟く。

「力が、必要だろ」

あの悪夢が訪れるなら。

力を返さなければ、彼岸に戻る術を持たない乱火だけはあの悪夢を逃れることが出来るのかもしれない。力を返さなければ、乱火だけはあれに巻き込まれることはないのかもしれない。だがそれで、誤魔化せるものばかりじゃない。

「もう…、俺の前から消えてくれ。乱火」

フユは息を呑んで立ち尽くす乱火の腕を無理矢理掴んで魔法陣の上へ座らせる。

「潮時だ。この力が一瞬でも俺の手中にあったこと自体、間違いだっただよ」

返さなければいけない。乱火には乱火を頼って来た仲間と、それに応えるだけの器があるのだから。

「っおい、フユ！」

「オマエ俺に対して変な罪悪感持つてるみたいだけど、ソレ勘違いだから」

彼岸の使いが見えたことで生まれた酷く冷めた価値観は、別に乱火のせいじゃない。

「最初は本気で、彼岸なんかぶっ壊してやろうと思ってた。あの時出会ったのがオマエでも他の奴でも、そんなの俺にはどうでも良かった。どうせ選べる立場になかったしな」

フユが彼岸の消失すら望んでいた頃、たまたま出会ったのが乱火だった。

「人選なんて俺に取っちゃ贅沢な話だったけど、結局のところオマエは最高だった。変に同情的で、優しく、彼岸に執着がない。俺が彼岸を消したいと思うてるのを知っても、いつでも俺に協力的だった。本当に嫌になるくらい、オマエは完璧な駒だった。でも、正直オマエは完璧すぎたよ」

同情的で優しく、自身の犠牲を辞さない。使い捨ての駒のはずが、反面それに救われていく自分がいた。

救済を自覚すればするほど、新たな傷が抉られていく。決して正義と呼べない行為を、振翳そうとした罰だ。

噛殺すように、フユは自嘲気味に告げる。

「皮肉だな。今はもう、彼岸の消失を望んじやいないのに……」

動かす方法を知っていたのに、止め方を知らない。

？彼岸に対して嫌悪や憎悪以外の感情が生まれ得ると、今なら。知っているのに。

俯いたフユの唇が柔らかく弧を描く。

「彼岸なんか見えなきゃ、俺ももっと可愛い性格してたんだけどな。本当馬鹿らしいよ、生きてくのは。笑っちゃう」

「フユ、」

「ごめんな乱火。俺は始めからオマエに声をかけるべきじゃなかった。じゃなきゃもっと早く力を返してオマエから離れるべきだった」彼岸の使いだけが感じる空気の重みが乱火の肩を覆う。

それは魔法陣発動の証拠であり、乱火に力が戻りつつある証明でもある。乱火に取って懐かしい彼岸の空気が辺りを埋めていく。一方で、フユの力が刻々と弱まる。

乱火は辛そうに息を付くフユを目の前にして、こんなに華奢な奴だったかとはとした。普段当たり前のよう存在した揺らぐことのない強い瞳さえ、今は伏せられた瞼に隠されて見えないからかもしれない。

乱火に力を返せば、フユは無防備になる。

「フユ……。なんでだよ……」

もう答える気力を持たないフユに乱火は問う。

「一度はお前が欲しいって言った力だ。彼岸と戦える力が欲しかったんだろ。この力を失ったら、また見てるだけしか出来なくなるのに……。それに、今フユは……？」

わかってる。そう言いたげにフユは微笑して、どさりと床に倒れた。切れた腕の傷口は深い。乱火が労るようにその傷に触れて呟く。

「なあフユ……、今お前は狙われてる」

## 五十、予言と選択肢

詩月とハルが砂都に導かれて訪れたのは、彼岸の建物の小さな一室。ドーム状の天井を有するその部屋の中心に、開かれた分厚い本が浮遊している。そしてその傍らにプラチナブロンドの女性が佇んでいる。

「ただいま、風姫」

砂都が目の中の女性に向かって進み出る。

「砂都。おかえりなさい」

女性が穏やかな声を砂都に返して、詩月とハルを順に見た。

好意も敵意も含まない瞳。それが静かな湖面のように見たものを受け入れる。

「詩月、あなたに会うのは初めてですね。？ハルさんも。何もないところですが、どうぞごゆっくり」

これが、風姫。この柔らかな物腰で、終焉を語るのか。詩月はそんな感想を胸中に結んで風姫に向かう。

「風姫、あなたに聴きたいことが」

風姫の湖面のような瞳に詩月が映る。

「ええ。予言の書には既に彼岸の未来が記されています。あなたの聴きたいことはそれでしょう。けれど私に答えられることはありません」

譲歩はない。穏やかだが、その意志をはっきりと含んだ返事だ。

「予言の書には『彼岸は人によって滅びる』と記されています。その名が『ハル、ナツメ、フユ』とも。？ハルさん、たとえばあなたが望まなくとも、これは確かに記された文字です」

ハルが不安そうに目を伏せる。

「私は終焉を心得よと皆に伝えました。ただそれ以上は語れないのです。私は未来を知るが故に、それを故意に変えられる立場にない

のです。予言について語れることは、他に無いのです」

そこで風姫はわずかに言葉を切った。

未来を知ることが、全てを掌握する事ではない。懸念と徒勞から逃れる代償に、行動する希望と可能性を失う。

「詩月、あの予言は私が一人の彼岸の使いとして皆に伝えることが出来る限界なのです。予言の書の番人としてではなく、私自身の意志で伝えられる最後の問いなのです。何を成すべきか、どうしたいのか、終焉という言葉の前で考える権利は全員にあるのです」

「でもそのせいでハル達は……！」

詩月が声を荒げる。

「あなたがいるでしょう、詩月」

風姫が穏やかなま遮る。

「え……」

二人の対照的な視線が絡まる。

「それ、どういう……」

「あなたがいるから……、いえ……。一つ事実として言えるのは、彼岸が今までに無い急激な速さで動いているという事です」

不自然に言葉を濁した風姫は、真意を答えることなく続ける。

「間もなく欠けた月も満ちるでしょう。それが、最後の合図です」



## 五十一、月が満ちる

嵌め込みのガラスの向こうに都会の夜が広がる。  
雲に淡く霞む月。

見下ろせば地上には人工の灯り。立ち並ぶビル。

眠り落ちたフユを背後に、ホテルから眺める夜景はくらくらするほど美しい。

晴れていく空。冴えた月明かりが窓際に立つ乱火をそつと撫でる。  
？満月。

乱火が手を翳せば、そこに青く透ける炎が音も無く現れる。

「使えるのか……」

剥奪されたはずの彼岸の力。フユから所有権が戻ったところで、使えるかどうかは半信半疑だった。

乱火の唇が静かに弧を描く。

彼岸最上層衛隊にも恐れられる、強力な青い炎。乱火が存在した瞬間から手にしていた力だ。要領も悪くない。彼岸の地位に魅力があれば、乱火もそこに立つことを望んだのかもしれない。

しかし始めから能力的に勝利していた乱火には、その分彼岸の世界を冷静に見る余裕があった。

？命狩り？くだらない。

七面倒な理論は、乱火にすれば取るに足らないことだ。何にも縛られず、自身の出した結論に従う。力を持つからこそ、我儘に振舞える。人間界で命を奪ってくる仲間達を尻目に、乱火は斜めに構えて加わりうとしなかった。

けれど彼岸の存在意義であるはずの命の管理に一切関与しようという乱火は、秩序を考えれば邪魔なものだ。

『乱火、おまえは彼岸に必要な。おまえにも彼岸の力は要らないだろう』

痺れを切らした彼岸上層部がでっち上げた罪人判決で、もう顔も思いつけない誰かが告げた。

？確かに。要らないな。

ただそう思ったことだけを覚えている。

仮に周りが羨むほどの力を持っているのだとしても、使う当てが無いのなら無意味だ。

『最後のチャンスだ、選択しろ乱火。彼岸の使いとして人間の命を管理するか、それともその力も、ここに存在する権利をも失うか』  
上層部の最終宣告は、乱火が彼岸を見切る決定打になった。

？何かありや人間人間って……。馬鹿馬鹿しい。

『俺は、後者を選ぶ』

乱火の彼岸の記憶は、そこで途切れている。気付いたら人間界にいて、人間界にはフユがいた。

回想を中断して、目を覚ます様子の無いフユを振り変える。ここ何回かの慣れない戦闘と、力の譲渡で疲れ切ったのだろう。熟睡しているようだ。

差し込んだ月の光によってフユの閉じられた瞳に繊細な陰が落ちる。  
？綺麗な男だ。

背負った傷の深さが、彼の纏う空気をより魅惑的にしているのだろう。静かで、孤独で、心許ないほどの真つすぐさが彼を傷付けてきたのだろう。

誘われるように近付くと、乱火の陰がフユを覆った。

フユの肺が規則正しく上下する。

？生きてるんだな。それでも。

だから綺麗なのだろう。きっと。ズタズタな心をひた隠して、闇を飼い馴らすように生きていく。欲しがった力も、望んだ彼岸の破壊も手放して。もしもフユが覚醒していたら、誰も寄せつけない冷め

た目で、乱火に「行け」と言っのだらう。

？コイツはこの先も、多分ずっとそうやって生きていく。

救ってやれたら良かったのに。フユが聴いたら鼻で笑いそんな台詞が乱火の脳裏をよぎった。

目を開けないフユに語りかける。

「今まで、悪かったな。彼岸は俺が止めるよ。だからお前は生きていけよ」

「バイバイ、フユ」

## 五十二、見果てぬもの

「ねえ」

幼い声が乱火の背中を追う。

「目覚めますの、待たないの」

振り向かない乱火の後ろ髪を引くように。

「あの人きつと悲しむよ。あんなに傷だらけだったのに、側にいてあげないの」

「…ナツメ」

乱火は背を向けたまま、口の中で自分呼び止めた声の主の名を呼んだ。

力が戻ってから、フユが望む通りにナツメの魂を体に戻そうとした。『戻した』のではない。文字通り『戻そうと、した』のだ。彼岸の術を使って強制的に魂と体を繋ごうとした。だが意外なことに術を使う必要はなく、それは詩月が手こずったことを疑いたくなるくらい簡単に体に戻った。

乱火はナツメの魂をナツメの体に近付けただけ。それだけだ。

彼岸の力で無理矢理戻したのではない。

どこで気が変わったのか知れないが、ナツメは自分の意志で戻ろうとしたということだ。

「ねえ」

世界に戻ることを拒絶していたはずのナツメが、そうと信じられないほど強い声で乱火を止める。

「…傷は、治した。もう塞がってる」

「そうじゃなくって！」

乱火の力が彼岸の使いだけではなく人間にも適応出来ると知ったのは、フユの傷を治したつい数分前の話だ。

砂都との戦い。朝凧を庇ったと言う黄昏との戦い。それから力の譲渡。全てで傷を負い、疲弊したフユの衰弱はあまり樂觀できるもの

ではなかった。どさりと倒れたフユの体は酷く冷たく、床の魔法陣は一見して出血量を危ぶむくらいに、かすれることも無くはつきりと描かれていた。

彼岸の為に負った外傷だけでも治癒できたのは不幸中の幸いだ。

「血が出てなくなつて誰かに近くにいて欲しいときがあるじゃん」

思考に沈む乱火の前に、ナツメは主張を重ねる。

「ねえ大人だつてそうでしょ?!」

「まさかコイツこんなこと言うために生き返つたわけじゃないだろうな。」

乱火が苦笑して振り変える。

「ナツメ、お前に頼むよその役目は。フユは口は悪いけど根は優しいし、多分お前とも上手くやれる」

そういうことじゃないのに。まっすぐに乱火を見上げるナツメの目が、否定の色を強くする。

逸らすことを知らない視線に苦笑を深くして、乱火はナツメの頭をぽんと撫でた。

「そんな心配しなくたってフユは強い。あんな男前の美人は中々いねーよ、だから大丈夫」

ナツメの眉が不満そうにしかめらる。

「でも」

「なあナツメ。一個伝言お願い」

「あの人に?」

「そう。フユに」

「...いいよ。なんて?」

いつでも言えたはずだったのに、一度も言えなかった。

フユは自分を責めるから、多分言葉の通りには伝わらない。

「“お前は?”」

それでも本当はずっとこう言つてやりたかった。

フユ、お前は何も悪くない。

### 五十三、彼岸上層部

「罪人詩月を捕らえよ。時は一刻を争う。生死は問わない」

白髪の方が、足下に跪いた最上層衛隊に低い声で命じる。

ここは彼岸の中で二番目に高い建物の最上階。パノラマで彼岸を見渡せる展望台のような造りだ。

集まった最上層衛隊はおよそ30人。彼等は全て詩月の敵。

「あの女を放置しては彼岸の無駄な血が流れるのみ。表向きの人道主義などまやかしに過ぎない。そうだな。桜」

最前列、男に最も近いところに跪くのは桜。視線を上げることなく、桜は答える。

「はい。浅はかな芝居にすぎません。これ以上の考察は無益かと」

「ふん。みくびられたものだ。恐らく詩月の真の狙いは『神の地図』。彼岸の主権を握り、この世界を創り変えようというのだろう」

桜は、吐き捨てるように続ける男の靴をじっと見つめる。

「愚かなことを。『神の地図』は我々の手には負えん。まして世界を創り変えるなど見知らずの極み。生かしても害が残るだけか」

靴。服。床。

？白い。どこもかしこも。

桜はふと思い、何事も無かったように顔を上げて告げる。

「詩月は近々ここに攻め入って来るでしょう。こちらもそれなりに守りを固めるべきです」

男が冷ややかに桜を見下ろす。

「まるで詩月一人のために彼岸最上層衛隊が手こずるとも言いたげだな桜。気になることでもあるのか」

「いえ」

桜は瞳を逸らさない。だがそれはナツメが乱火に向けたような、何か訴える温度を持った視線とは違う。静かで揺れない、遠くを見透

かすような冷めた視線だ。

「準備をしておくに越したことはない」と申し上げているのです。無傷で済む戦いで、むざむざ血を流すのは本意ですから」

桜のそれは、表情からも声からも感情を窺えない。

危険因子は全力で討つ。これが最速で彼岸最上層衛隊まで昇りつめた女のやり方か。男は口元に笑みを乗せて命じる。

「そうだな。桜、お前に地図の保管室の守りを任せたい」  
手段を選ばない桜の伶俐さは、過激だが必ず結果を出す。

「はい。勿論私も始めから、」

そしてこの残酷なほどの行動力が最大の強みだ。

「そのつもりです」



## 五十四、白昼夢を抜けて

？ついさっきまで都会のアスファルトを踏んでいたのに。

乱火はそろりと視線を上げる。

？ここに帰ってくることになるなんて。

この世界？彼岸では、冷ややかな白が全てを覆っている。まるで「我にひれ伏せ」と言わんばかりの圧迫感だ。

無数の色が脈絡無く点在する人間界もそれなりに乱火の虚無感を煽ったが、ここも同じくらいに酷い。

「…彼岸も地上もたいして変わんねえ…」

ぽつりと声にして、そういえば、いつだったか同じ言葉を呟いたと思う出す。

？変わらないんだな。結局。

どこにいても。何をしても。隣に誰がいても、？いなくても。

ここは彼岸で、乱火の居るべき世界で、下らない命の駆け引きや意地の張合いがあつて、今まで居た平和で悲しいあの場所は、たぶん束の間の夢だ。

祈る者のいない教会。割れたステンドグラス。

微笑する女神像。後悔と懺悔。それらはいずれ人の記憶から抜け落ちて行く。

フユの纏う気配はあの教会の空気に似ていた。

自分の弱さの晒し方を知らない。

煙草にジーンズ、埃の混じった風。

青い携帯。声。諦めていた。ごめんと。

あれは綺麗な夢だ。乱火の踏むべき地面はいつだって「白」だったのだから。

目覚めたらもう怠惰に続きを見ることは許されない。

乱火は細長く伸びた柱に背中を預けて桜を待つ。

「どうせこうなったら彼岸の向かう先は知れている。

詩月は戦うと言っていた。上層部は絶対に引かない。戦力は上層部が上。闇雲に戦っても勝ち目はない。

「勝ちに行くなら、神の地図を狙うのがせめてもの上策。

「あら。お久しぶり、乱火」

上層から降りて来た桜が意味ありげに笑う。

「ずいぶん大役を引き受けたみたいだな」

「鍵のこと？察しが良いのね」

「皮肉か？楽しそうだな」

「あなたこそ。彼岸の力が戻って来て楽しそうじゃない」

「ああ。今あんたが持つてる保管室の鍵が手に入ればもっと楽しいんだけど」

「そう」

桜が試すように乱火を見る。

「でも残念。渡す訳にはいかないわ」

チャリ、と見せびらかすように挙げた桜の右手には金色の鍵が収まっている。

「第一これがあったって単身乗り込んでどうにかなる話じゃないのよ。最低でも五人は必要。ご存じ？鍵は四つ、同時に開かなければならない」

桜は続ける。手の平で揺れる鍵は意外なほど簡素な見た目をしている。

「そして扉はとても重い。鍵は半回転させた状態で維持しなければ再び閉まってしまう。開けた人物が動くことは不可能よ。必然的に鍵を開ける人物のガードはその瞬間に緩む。仮に運良く鍵を手に入れたとしても、最上層衛隊がそれを指を銜えて見てるかしら？有り得ないわ」

桜の言葉は皮肉挑発にしては説明過多とも取れる。

「つまりこういうことよ、乱火」

「教えなければ俺たちを簡単に殲滅出来るのに…それとも教えたと

ころで何も出来ないと？

「どんなに条件が良くても必ず四人犠牲になる」

？四人。

「だけど健闘を祈るわ。もうこの戦いは白紙に戻せないもの」  
すれ違い際、桜は乱火の肩をぼんと叩き、囁く。

「犠牲は、甘んじて受け入れるしか無いのよ」

？四人？

ずっと離れていく手。

「おい桜……！」

呼び止めようとする乱火の目の前で、離れかけた桜の手が人差し指をそっと立てる。

黙って。

？聴くなってことか？今。どうして？

鍵を開けるのに最低でも五人。

確実に反旗を翻すと分かっているのは詩月、朝凧。そして乱火。

一体誰をカウントしてる？桜。まさか彼岸の使い以外を？

四人犠牲になる。

？その犠牲は？

## 五十五、再生、それとも幻影

乱火と桜が言葉を交わしていた頃、華夜の跪くその場所には緩やかな風が吹いていた。抜けるような青空の下、途方も無く続く白い地面。まるであらゆる生命体が死んでしまったかのように、何の気配もない彼岸の片隅だ。沈黙する景色の中にただ一人、頑な白を汚すような黒い瞳を伏せて、華夜は屈んでいる。右手には身長を越すほどの剣。

静かな風が華夜の髪をさらさらと揺らす。

華夜が足下のいかにも柔らかそうな地面に剣を突き入れると、切り口からまるで血のように赤い液体が滲んだ。さらにぐつと剣を差し込むと、赤い液体が勢いを増して飛び散り、華夜の頬まで跳ねた。華夜はそれを気に止める様子も無くゆつくりと、切り口を深く広げていく。地面に見えたそれは一つの大きな繭のような塊で、覗き込めば空から差し込む光によって内部が微かに確認できた。繭から溢れるほどの赤い液体の中に、横たわる人影がある。

華夜は切り口をさらに広げる。光が奥まで入ると、突然の眩しさを避けるように、その影が小さく身じろいだ。少年だ。

「朝だぜ。チアキ」

華夜が少年に向かって話しかける。

「チアキ」

呼ばれた名前に導かれるようにチアキと言う名の少年が起き上がると、赤い液体の中から白い肌と薄茶色の髪が露になった。

「よお。目覚めはどうだ。チアキ」

「…ぼく、寝てたの？」

「ああ」

「そっか」

そう言つて、チアキは一瞬だけ思案するよつな仕草を見せる。

「全然覚えてないや。なんか変な感じ」

あつさりと回想を諦めたチアキは、自分を取り巻く赤い液体に目を移した。

「なんか。なんだろ、全部変」

一糸纏わぬ自分の姿。ひたりと触れる赤い液体。外界から隔絶された丁度一人分の空間に、その二つが押し入れられていた。けれどチアキは、心の奥底で感じる違和感を上手く言語化できないでいる。鮮やかな赤い液体と、そこに放り込まれた一人の人間。華夜がその手に掲げた剣で光の道筋を作らなかつたとしたら、恐らくその二つは永遠に窮屈な暗闇に沈められていただろう。

「ほら」

華夜がチアキに向かってごく当たり前のように手を差し出す。

「うん」

華夜を知らない。もしくは覚えていない。チアキは、警戒心もなくその手を握った。華夜の手が、暗闇からチアキを引き上げる。

「…あ」

ふいにチアキが声を上げる。

「なんだ」

「手、あつたかいね」

他意なく発せられた一言に華夜は答えない。

「それに良い匂いがする…。甘い」

ふわりと香る甘さと共に引き上げられたチアキは、触れ合うほど近い華夜にさらに近付く。何も言わない華夜は、拒絶するでもなくただ静かにチアキを見ていた。

そこでは、相変わらず緩やかな風だけが吹いていた。

## 五十六、ナツメ

「なっ…なっ…なっ……」

朝風が頬をぱつと赤く染めて、ぱくぱくと「な」を連呼する。

「なっ……」

朝風の正面に、魂の戻ったナツメが立っている。

「なっ……」

繰り返される「な」の字に、ナツメの中で物凄く嫌な予感がよぎる。予感というか確信に近い。

「ナツ……！ナツメくん……！！よくご無事で……！！」

「ぎゃっ！」

朝風ががばつと熱くナツメを抱きしめた。ナツメの不吉な確信をはるかに超える馬鹿力で。

「ちよつ、待つ、……！！ギブ！離……！！！！」

まだ身体的に少年のナツメと、おつむはともかく外見は10代後半〜20代の朝風ではそれなりの体格差や力の差がある。だが仮にそのハンディがなかったとしても、この状況は免れなかったかもしれない。朝風の女子とは思えぬ破壊力。ナツメはせつかく生き返ったが、残念ながらこのままでは圧死する可能性が高い。

「……………！！！！」

ナツメの本気の抵抗が、力ない無抵抗にすり替わった瞬間、やっと朝風が涙の抱擁の腕を緩めた。ナツメはもはや真っ青だ。

「あれ？ナツメくん、どうしました！？まだ完全には回復してないんですか……」

「いや……そうじゃなくて」

ぐつたりとしているのは抱擁という名の攻撃のせいだ。

「やっぱり無理に魂を奪うなんてことをするから！許せません！」

「あの、だからそうじゃ……」

「……桜さん、なんて酷いことを……！！」

桜に対する怒りを露わにする朝凧。

「やっぱり絶対許せません！！！」

「……だから違うんだけど……」

「あつ、自己紹介が遅れました！ナツメくん私朝凧と申します。よろしく願います。彼岸の使いです」

ナツメの弁解を置き去りにして、朝凧が突然名乗る。

「……知ってる。寝てたときの、聞こえてたから。なんとなく状況はわかるよ」

誤解を解くことは諦めた方が良さそうだ。

「ああ良かったです！！戻ってきてくれて本当に！！」

ナツメの胸中など知る由もない朝凧は、華やかに捲し立てる。

「良かったです！！今ちよつといたんですけど、センパイもハルさんもきつと喜びます。私もすつごく嬉しいですよ！！」

朝凧は花のような笑顔で「嬉しい」と言う。ナツメはそれに戸惑う。ナツメには、知り合いでもない自分が生き返ったことを喜んでくれる相手がいるということが、上手く理解できない。

？嬉しい。嬉しいって言った。このひと。

ナツメには本当に嬉しそうに笑う朝凧の姿が、とても珍しいものように見えた。その光景は決して不快なものではなく、心をやんわりと暖めていく。

？喜んでくれるんだ。俺が、ここに存在していることを。

「あ……、ありがとう……」

ナツメからぼつりと零れたお礼に、朝凧はきよんとして首を傾げる。

「あの……、嬉しいって、思ってくれて」

ナツメはそう言いながら、おずおずと視線を逸らした。ぽかんとした表情で自分をマジマジと見つめる朝凧に、気恥ずかしいような居辛さを感じる。

「なっ……なっ……なっ……」

デジャヴ。反射的に身構えたナツメに朝凧が飛びかかった。

「なんですかこのカワイイ生き物はツツ！！！」

「うわあー！！」

朝凧はぎゅうつとミクロの隙間も埋めるようにナツメを抱きしめる。

「嬉しいですよ！当たり前じゃないですか！すごく嬉しいですよ！

！ナツメくんラブ！！！！」

「ぎゃー！！」

ナツメの悲鳴をスルーして、抱きしめる腕の力は更に強くなる。

暗くなるナツメの意識の片隅で、朝凧は危険人物にカテゴライズされた。



## 五十七、彼女は滅びの神

彼岸は人間によって滅びる。その名は、ハル、ナツメ、フユ。

世界の終りを告げる先見の書。いつそ捨ててしまえたら、未来を悔やまずに済むのかもしれない。

ドーム状の小さなその部屋で風姫に出来るのは、さらさらと羽ペンが記す青い文字を静かに眺めること。

「風姫、どうにかならないのかな、他に未来は…、ねえ」

『終焉』や『滅び』以外の言葉を期待して、砂都が訴える。

そしてハルの心許ない視線を受けても、風姫は微笑するだけだ。どうしようもない。そう答えるのと同じ。

詩月が口を開く。

「風姫、彼岸のさだめが変えられないのなら、私は彼岸の世界を」  
風姫の穏やかな目とぶつかって、詩月は言いかけた言葉を飲み込んだ。

それでいいと言うように風姫は無言を通す。

「詩月さん？どうかしましたか？」

ハルが詩月を気遣うように声をかける。

良くない考えに思い至ったかのように詩月は堅い表情で風姫を見ている。

「風姫…、私たちは……」

彼岸は人間によって滅びる。その名は、ハル、ナツメ、フユ。

詩月の中で今までの状況がフラッシュバックする。

ハルの命の取り違いがあった。ナツメは無理矢理に魂を抜かれた。

フユは何も出来ずに、彼岸の狩りを見続けていた。

人間の命を管理しているという自負のあった彼岸にとって想定外のそれらは、世界のルールの狂いを意味していた。彼岸上層部は、その綻びをお粗末な辻褃合わせで繕うという。

初めの予定通りハルを死なせてチアキを生き返らせる。詩月は任を受けていないから正式なところは分らないが、桜の行動を見る限りではナツメにも兄スバルとの取り違いが発生しているのだろう。それも入れ替える。フユに取り違いはないが、彼は彼岸に取つての不安因子だ。先見の書の言葉に後押しされて、抹消を決めたのだろう。そうしてそれが完了すれば一件落着。元通り。

ふざけている。詩月は心の中に吐き捨てる。

綻びは全て彼岸が招いたものだ。どれも発端はハルやナツメやフユが自発的に動いたものではない。そもそも彼らには、不確かな優しさや、罪の意識や、ささやかな願いがあつたに過ぎない。それを。

過ちも辻褃が合えば許されるというのか。

彼岸自身が犯した過ちに動揺していたところへ、先見の書のあの言葉。彼岸はあの言葉を盾にして、暴挙に出た。予言を掲げて自分たちを正当化している。彼岸の存続に必要な犠牲だと。必要悪が正義。それも一つの真理かもしれないが、受け入れるのは不快過ぎる。

受け入れられない。だから戦う。

「詩月さん？」

戦う。それが。

ああそうだった。最初から知っていた。こうして、戦うことこそが。

そうだ。

「大丈夫よ、ハル。覚悟決めなきゃって思っただけ」

それが彼岸の終焉を呼び込むのだとしても。

詩月の思考の中で突然腑に落ちた彼岸の終焉。

先見の書は彼岸の終焉を告げている。

詩月が負けるのなら、彼岸の終焉は訪れない。彼岸を滅ぼそうとしているのは詩月。上層部は曲がりなりにも守ろうとしている。それなのに予告された終焉。

つまりこの戦いの先には、大多数が思い描く結末とは別の未来が用意されている。

終りは訪れる。きっと。

「風姫。あなたは分かっているのね。これから私が何をするかを」

「ええ」

「それでもあなたは私を止めないのね」

「ええ」

彼岸は変えられない。だったら壊すしかない。

「ありがと風姫。私は、進むわ」

## 五十八、守りたいもの

「砂都、もう私に側近は必要ありません」

「え？」

風姫が唐突に告げた言葉に、砂都が固まる。詩月はそれを見て、初めて砂都が風姫の側近だったと実感した。砂都の動揺は、傍で見ている詩月にも明らかだった。

「あなたも行きなさい。あなたにも自分の意思で行動する権利があります」

対照的に風姫はゆったりと微笑む。

「でも、僕は…」

「あなたはよく尽くしてくれました。とても感謝しています。だからこそ、あなたには自分の意志で行動して欲しいのです。私と共に留まるのではなく」

それを聞いた詩月は、ずっと視線を下げて地面の一点を見つめた。

「納得できる道を行きなさい、砂都」

「でも、風姫は行かないんでしょう？ だったら僕も、…僕は、風姫とずっと一緒に」

「いいえ」

食い下がる砂都を風姫は穏やかに制す。

「私が参戦しては道義に反するでしょう？ 私には先見の書の番人としての誇りがあります。私は大丈夫」

「風姫…」

「行きなさい、砂都。守りたいものがあるのなら」

彼岸にどう口を出して良いか分からないハルは、ただ黙って成り行きを見守ることしかできない。

優しく砂都を諭す風姫。不安そうな目をして風姫の前に立つ砂都。何も言わず、何かに耐えるように地面を見つめる詩月。

「守りたいもの…。僕は…」

砂都の迷いの中によぎるのは、フユの残像。

フユの涼しそうな瞳の奥にちらついていた、孤独と、優しさ。諦め。

「風姫、僕は、」

「砂都。今までありがとう」

風姫は砂都を遮るように言った。穏やかさだけは変わらず、けれど迷いは許さないといった口調。

「お行きなさい」

砂都がぎゅっと拳を握りしめる。

「僕こそ……。ありがとう、風姫。…今まで、楽しかった」

風姫はその拙い言葉に優しく笑う。

砂都はそれ以上言えずに風姫に背を向けて、この部屋を出ようと扉へ向かった。けれどそのまま出ていくことが出来ずに振り返る。そして風姫の唇が密やかに動くのを見た。「さよなら。砂都」と。

詩月とハルも後に続き、もう戻ることの無い時が扉と共に閉じられた。

風姫、あなたは何でも知っているけど、何にも分かってない。

閉じた扉を見つめて、砂都は心の中で語りかけた。

僕は、側近『だから』側にいたんじゃない…

「詩月、僕も彼岸と戦う」

砂都が呟く。

「守るよ。僕はフユを死なせたくない」

砂都のくるりとした大きな瞳がハルを捕らえる。

「ハルとナツメも、守るよ」

## 五十九、幻影

「ねえ、あの人大丈夫かな」

ナツメが朝風に向かってぽつりと呟く。

「え？」

「フユ」

「そうですね…。心配です」

朝風は少し俯いて答える。

「というか…、それも心配なんです、ナツメ君は大丈夫なんですか？」

「何が？」

「ご両親とか心配なさってるんじゃない」

「ああ、それは平気。さっき電話したから。友達のところにいるって。俺、…」

ナツメは一瞬そこで言葉を切る。

「俺じゃなくてスバルが。」

「信用されてるから大丈夫」

「そうですか。それなら良いんですが…」

怪訝そうな朝風を見て、ナツメはぱっと立ち上がる。

「やっぱちょっと見て来る！乱火って人に伝言頼まれてるし」

朝風の前をすり抜けながら、ナツメは思う。心配だから。それは嘘じゃない。けれどそれが全てでもない。

自分の置かれた環境のことを考えたくないからというのも、理由の一つだ。他のことを気にしていれば、その間は考えずにいられる。自分の名前を呼んでくれない母親のこと。仕方ないと理解すること、それを受け入れることは全然違う。居場所の無いこんな世界でもう一度目を覚ましたって、悲しいだけだということ。

もちろん母親だけがナツメの世界の全てではないけれど、そう割り切るにはまだナツメは幼過ぎる。スバルという、もうこの世にはい

ない兄の名が、いつもナツメの心に影を落とす。母親がスバルと口にする度に、存在を望まれたのは兄で、消去されたのが自分だと思  
い知る。始めの頃こそ自分はナツメだと否定していたが、錯乱する  
母親を何度も見て、だんだんと主張するのが怖くなった。いつか母  
親が本当に狂ってしまうのではないか。これ以上自分の存在を否定  
されたら、自分も、壊れてしまうのではないか。

怖くて、そうやっていつしか諦めて、それならせめて願いを叶えて  
あげようとスバルのフリをするようになった。

自分がスバルでいさえすれば、平和なのだ。スバルのフリをして振  
舞う。それだけ。けれどそのうちにナツメはスバルの記憶を思い出  
せなくなっていく。もうどんな顔だったかさえ分からない。

母親があんなに溺愛するくらいだから、きつと優等生で、優しくて  
……。そんな風に思い出の上に理想が積もって、ねじ曲がっていく。そ  
んな想像上のスバルをナツメは演じるようになった。スバルとい  
う架空の人物は、物わかりが良くて、大人びて、本物の大人に手を  
焼かせない子供だった。

そうしているうちにナツメ自身はどこか物事を達観したように見る  
ようになった。同年代の子供と遊ぶには、冷静すぎるほど。同じク  
ラスの仲間から、ある種の憧れや期待や嫉妬の目を向けられること  
はあっても、対等に話すのはナツメの方が疲弊した。クラスには友  
人もいるし、彼等を好きだと言えるけれど、あまり長時間一緒にい  
ると、言葉に出来ないズレを感じた。遊んでいても、心に何かが引  
つかかる。友人が本当に楽しそうにしている横でナツメも笑ってい  
たけれど、どんなに笑っても、必ずどこかが冷めていた。

ナツメが目覚めたくないと思った、そういう本質的な物事は解決さ  
れた訳ではない。だから今は、許されるなら他のことを考えていた  
かった。フユを心配することを言い訳にするつもりはないけれど、  
フユを気遣うことで、ナツメは自分を守ろうとしているのかもしれ  
ない。考えたくない。

朝風はナツメが目を覚ましたことを嬉しいと言った。今はそれで充

分。眠っていた間、詩月やハルが労るように守ってくれていたこともナツメは知っている。乱火がこの世界へ引き戻してくれたことも、乱火に「ナツメを助けてやれ」と言ったのがフユだということも。誰もが碌に話をしたことも無いナツメを気にかけていたと、知っている。だから今はそれで充分。今はこの瞬間の幸せの中に留まって、他のことは考えないでいたい。



## 六十、スキャンダル

？鍵、は。

どこもかしこも白いせいで、一向に進んでいる気がしない。変わらない景色に嫌気を感じながら、乱火は足早に目的地を目指す。

？一つは桜。あと三つ。可能性があるのは：

桜と同等以上の力を持つ者。それはまず間違いない。ならば鍵を持つ者は自然と限られてくる。恐らく最上層衛隊、その中でもとりわけ名が知られた者である可能性が高い。

乱火は記憶の系にかかる名前を心の中で反芻する。

？椿。

乱火が人間界にいた間、彼岸でどのくらいの強者が現れ、どのくらいの権力者が引きずり降ろされたかは分からない。その中に乱火と面識のある者もいれば、そうでない者もいるだろう。椿は後者だ。

だが名前だけは知っている。それは人間界に落ちる直前に聞いた名で、『誰もが恐れた乱火』という存在の、空いた穴を埋める者の名だった。

力があれば名は知れ渡る。

どんな世界でも先駆者は求められるもの。それが例え乱火のように『何もしない』というだけのスタンスであっても、力を持つ者が貫徹ば意味が出てくるのだ。乱火に人間の命を狩ることを強要した上層部が、屈服させることも出来ず、その乱火との戦闘で返り討ちに合う。それも一度だけでなく何度も。彼岸の絶対的存在である上層部に辛酸を舐めさせるような行動を平気な顔でとる乱火は、良くも悪くも目立つ存在だった。

噂が噂を呼び、乱火が初対面の相手に恐れられることも珍しくはなかった。乱火はそういったことに無頓着だったから、噂は完全に野

放し状態で、必然彼岸の話の種に乱火の名が上がることは多かった。人間界で有名人のスキャンダルが流行るように、彼岸でもスキャンダルは恰好の暇つぶしになる。けれど乱火は人間界に落ちることを選び、巷の話題から乱火の名は薄れていった。そんな乱火がいなくなる隙間を丁度埋めるように頭角を表したのが椿だ。

乱火とは対極を成すタイプで、生まれも育ちも上層部というサラブレッド。炎を操る乱火とは違い、日本刀に似た細い刀を使い、ダイレクトに攻撃を仕掛ける。好戦的で、戦闘に迷いが無い。おまけに銀髪で、女。強く、その戦闘スタイルは無駄がなく鋭利に切り込むような華がある。そして公での戦闘を厭わない。

椿は新たなスキャンダルの主役だった。彼岸を去ると決まった乱火の耳にもその名は届いた。乱火は他者の声で好き勝手に語られるその名を聞き流しながら、彼岸で繰り返されるその類の空虚さに、溜め息をついたのを覚えている。

？椿は今も上層部の中心にいるだろう。

だから向かう先は一つだ。

好戦的と謳われる椿なら、多分待っている。戦いを。逃げも隠れもしないだろう。

戦いに適した場所で、誰かが鍵を奪いに来ることを待っている。誰か。恐らく、過去に自身と同じように騒がれた、乱火を。

乱火は白い扉に手をかける。

？ここしかない。

ただ広いだけのその場所。この扉の先には地面以外何も無い。果てが無いほど広く、障害物は何も無い。

ギ……と重い音がした。足を一步踏み入れる。

「私の相手は貴様か。乱火」

乱火の想像通り、銀髪の女が出迎える。椿だ。椿は目を細め、満足そうに続ける。

「聞くところによると、ずいぶん強いそうだな。手合わせ願えるのは嬉しいよ」

「そりゃ光栄だ。でも俺は戦いたい訳じゃない」

乱火がそう返すと、椿はくくつと咽を鳴らした。

「鍵ならあるさ。私に勝つたらくれてやる」

「…勝つよ」

簡潔に勝利宣言をした乱火に、椿は笑みを滲ませる。そして言った。

「おまえは負けるよ、乱火。私にはもうストッパーが無いからな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7283c/>

---

神話21世紀

2011年2月25日11時33分発行